

2019 年度 文部科学省委託事業

「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム

～知的障害青年のための大学教育の創造～

Kobe University Program for Inclusion (KUPI)



2020 年 3 月

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム (KUPI)
～知的障害青年のための大学教育の創造～

目 次

1. 「学ぶ楽しみ発見プログラム」の開設と背景	3
2. 神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラムの準備と活動経過	9
1) 募集要項とチラシ	9
2) 説明会開催 (8月7日、21日)	16
3) プログラムの内容作り (火曜・水曜・金曜)	17
4) 入学者募集の状況と応募、選考	17
5) 神戸大学学生のメンター募集	17
6) 聴講生制度の活用、事務当局の協力	17
7) 連携協議会の開催と内容	19
8) 記者発表とメディアの反応	21
9) 入学式の様子	22
10) 修了式と打上げの様子	23
3. プログラムの内容	25
1) 火曜日プログラム	25
2) 水曜日プログラム	40
3) 金曜日プログラム	80
4) プログラム以外の学生による活動	101
4. プログラムから何を学んだか	102
1) 授業担当教員	102
2) メンター学生	108
3) 一般学生	122
4) コーディネーター	134
5. 知的障害のある青年が「大学での学び」から得たもの	省略
6. 知的な隔たりの間で学ぶとはどういうことか	136
7. 「青春の謳歌」を支える大学の学び	147

※ WEB版の報告書は完全版ではありません。完全版をお求めの方は、発行者宛にご一報
ください。

1. 「学ぶ楽しみ発見プログラム」の開設と背景

神戸大学人間発達環境学研究科 津田英二

1) 知的障害者が大学で学ぶということ

「学ぶ楽しみ発見プログラム」は、2019年度に神戸大学が着手した、知的障害者を対象に大学教育を開いていく実験的な試みである。

文部科学省障害者学習支援推進室が主管する「学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議」は、2019年3月に、「障害者の生涯学習の推進方策について一誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を目指して一」という報告書をまとめた。この報告書は、障害者の生涯学習推進に向けた大学の役割について、次のように言及している。

“大学は、多様な学生の受入れを通じた教育研究の一層の高度化の観点からも、地域や社会への貢献の観点からも、特別支援学校等を卒業した後の障害者の学びの場としての役割を果たすことが求められている”

大学入学試験に合格して入学してくる障害者に対する障害学生支援の充実はもちろんだが、障害者の生涯学習推進の文脈では、それ以外の取り組みに焦点が当たる。入学試験によって大学の知の正統な伝達対象とされる学生の対極にある、入学試験に挑戦することさえ許されてこなかった人たちがターゲットである。

国連が2015年に採択した「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」のキーフレーズである“誰一人取り残さない”という国際的な決意は、教育界の常識の転換をも迫っている。大学は既に大衆化し、一握りのエリートの独占物ではなくなっている。人類の知的資源の継承や活用に関わる、多様な役割を担っている。この知的資源は多岐にわたり、社会構成員全体で共有すべき内容も多く含まれる。これを享受できる人を限定するということは、人類の歴史的営みから特定の人たちを排除するという意味する。

こうした問題意識は、19世紀から継承されてきている。労働者階級に大学を解放することで国民統合を図ろうとしたイギリスの大学拡張運動は、諸外国の影響を与えてきた。日本の大学も、公開講座や聴講生制度、放送大学の設置などを通して、大学教育の対象の拡張を図ってきた。近年は、知的障害者を大学教育の対象に含める運動が各国で展開している（ゆたかカレッジ・長谷川、2019）。

前出の文科省の報告書は次のような提起も行っている。

“知的障害者等の学びの場を大学に設けることで大学にどのようなメリットがあるのか、社会的な効果としてどのようなことが考えられるか、といった観点から、実践的な研究を行うことが求められる。”

“大学を場としてオープンカレッジや公開講座を行うことで、本人がモチベーションを高

く持って参加することができること、大学の研究機能を活用し、研究成果を広く情報発信することができるといったことが期待される。一方、担当教員任せでは持続が困難であるとの意見もあることから、大学としての組織的・継続的な取組としていくことが期待される。”

日本では、大学が知的障害者を教育対象として位置付ける実践の蓄積が乏しく、その方法も十分に組織化されていない。この領域を開拓していくためには、まずはパイロット事業を起こして、実現可能性や効果検証をしていかなければならない。現段階では、これらのことに着手しようということである。

筆者は、この「有識者会議」に参加し、大学の果たすべき役割について意見を述べた。したがって、このような流れになってきた責任の一端を感じており、パイロット事業の実施を神戸大学で引き受けることとなった。それが、この冊子で紹介し検証する「学ぶ楽しみ発見プログラム」である。

2) 「学ぶ楽しみ発見プログラム」開設の条件

“知的障害者に大学教育を開く”ためのパイロット事業を引き受けるためには、何らかの前提条件が必要だった。当初、これを引き受ける最適な大学は神戸大学ではないと考えていた。神戸大学は、障害学生支援の領域で恵まれた条件をもっているわけではないし、国立の総合大学という特性上、学内の合意形成が極めて困難であるという特徴がある。

2018年度末ぎりぎりになって、文部科学省の障害者学習支援推進室から、比較的条件が整っている大学に対して説得を試みたが不発に終わったという報せを受け、最終的に神戸大学でこれを引き受けることにした。

1年目の事業を終えるにあたって、神戸大学でこのパイロット事業を引き受けることができたことに感謝している。これまで私たちが実施してきたさまざまなプロジェクトの上でうまく収まるプログラムだという確信をもつことができたからである。以下では、「学ぶ楽しみ発見プログラム」がどのような前提条件の中で実施されたかということを示すため、これまでの神戸大学の関連する取り組みを簡単に紹介しておく。

第一に、私たちは、知的障害者を対象とした公開講座を実施した経験をもっている。神戸大学発達科学部が2003～2004年度に開催した公開講座は、主に芸術系教員（美術、音楽、感性心理学、書）の専門性に即した授業によって構成した。短期で終了したのは、私自身がイベント的な学習機会の提供に物足りなさを感じたためであった。この経験の詳細は、2本の論文にまとめてある（山本他、2004；津田他、2006）。

第二に、知的障害者のセルフアドボカシーについて実践的研究を実施してきている。2001年～2002年にかけて、知的障害者が自己決定の原則に即して自らの権利擁護を行う実践に着目し、その原理的把握を試みた。その研究の動機になったのは、セルフアドボカシーの世界的な運動の流れにある日本の「本人活動」の支援を行った経験による。この支援は、1999年に開始し、年2回程程度の知的障害者が編集する新聞の発行を支援するという形で、現在まで継続している。この研究を通して、知的障害者の自己決定をめぐる知的障害者本人と支援者との関係がいかにあるべきか、検討した。この実践的研究の成果も数本の論文等にまとめている（津田、2003；津田、2005）。

第三に、知的障害者を対象とした大学教育に関する韓国との共同研究を実施してきてい

る。2007年頃から韓国ナザレ大学との交流を継続してきている。この大学は知的障害者を正規学生として積極的に受け入れており、現在では知的障害学生のみによって構成されるリハビリテーション自立学部に発展している。この大学で学生たちがどのような学びを実現しているのかということ、韓国ナザレ大学との共同研究として、複数の視点で追っかけている。その成果もいくつかの論文にまとめている（近藤他、2013；村田他、2015；金丸他、2017）。

第四に、「のびやかスペースあーち」の運営によって、個々の知的障害者と長期的に関わり、知的障害者が地域社会や大学生と関わる場を創出してきている。「のびやかスペースあーち」は、2005年に神戸大学のサテライト施設として開設した社会教育施設である。神戸市との連携協定に基づき、役所の跡地を活用して設置した。「子育て支援をきっかけにした共に生きるまちづくり」というコンセプトを掲げ、さまざまな層の地域住民や学生らが集う場やプログラムを展開してきている。知的障害者も幼児から成人まで日常的に参加しており、25年にわたる過程で彼らの成長と関わり続けてきている。この実践的研究に関しては、多数の研究論文がある。関連の深い文献のみを示しておく（津田、2012a；津田、2017；津田、2012b）。

第五に、カフェ「アゴラ」の運営によって、学舎内で知的障害者が日常的に教職員や学生と関わる場を創出してきている。「アゴラ」は神戸大学人間発達環境学研究科の福利厚生施設として設置された「交流ルーム」で、神戸大学が直接経営しているカフェである。2008年に耐震改修を契機にオープンした際、重度障害者をマスターに迎えたところから、障害者の雇用や実習の場として活用されてきている。2019年度時点で、障害者雇用枠で働いている知的障害者が3名、実習生が2名おり、短時間雇用の非障害者複数名が彼らを支えている。研究室に囲まれた環境にある「アゴラ」では、教職員や学生と障害者との日常的に自然な関わり合いが生まれる場として機能している。ここで働く知的障害者の中には、学生と深く関わる中で、大学で学ぶことに強い関心を持つようになり、「学ぶ楽しみ発見プログラム」に真っ先に応募した人もいる。

以上のような実践の積み重ねは、「学ぶ楽しみ発見プログラム」の構想や実施に際して、それぞれ異なる意味で重要な役割を果たした。何よりも、プログラムの構想や理念に必然性をもたらし、説得力を持たせることができたこと、またそれにより周囲の関係者を巻き込むことができたことは、これまでの実践の積み重ねによるところが大きかったと実感している。

機が熟していたという意味では、「福祉型専攻科」の注目度が高まっているという条件も看過できない。全国で年々急速に数を増やしている「福祉型専攻科」については、神戸に2010年に開設された「エコーL KOBE」があり、先行事例として注目を集めている。学校卒業後の学びの場が目に見える形で提示され、知的障害者の学びのニーズが顕在化しつつある時代と場所が、「学ぶ楽しみ発見プログラム」の実施の重要な背景となっている。

3) 「学ぶ楽しみ発見プログラム」のねらいと概要

これまで日本の大学において知的障害者に学習機会を提供しようとする取り組みは、公開講座として実施するものが最も組織的なものであった。公開講座は、前述のように大学拡張の流れに位置づけることができる運動の一環である。1995年から実施している東京学芸

大学での系統的な取り組みに始まり、「オープンカレッジ」という名称を付して全国に広がっていった。「オープンカレッジ」に関わるテキスト等も発行される(安藤他、2001)など、一定の成果をみている。とはいえ、公開講座自体が大学にとってはマイナーな取り組みであり、継続的实施を支える制度とは言えない。

「学ぶ楽しみ発見プログラム」は、公開講座よりも一步踏み込んで、通常の大学教育と知的障害者の学びをリンクさせることをめざした。具体的には、通常の大学の授業への知的障害者の参加を実現する聴講生制度の活用と、知的障害者を対象とした授業づくりとを組み合わせることで、大学教育の新しい形を模索する実践として構想された。

公開講座形式の取り組みが、教員の個人的な負担によって成り立っていること、私たちの経験としてもイベント的な実践になりがちであることから、運営形態の面でも実験的な要素を意識した構想とした。聴講生制度を利用するという事は、大学の正規の授業の一部に位置づき、大学の「本業」に深く関わるということの意味する。個人的な負担で駆動するのではなく、組織的に推進される道が開けると考えた。本部事務局機能も、神戸大学人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの一部に位置づけ、インクルーシヴ社会支援部門の主幹として私(津田)が対外的な責任者となったものの、発達心理学や特別支援教育論の領域で活躍する赤木和重准教授、メインコーディネーターの河南勝氏、サブコーディネーターの黒崎幸子氏、神戸大学の研修で学んでいた阪神特別支援学校教諭の秦美季氏が、それぞれの立場でプログラムを支える「顔」として中心的な役割を担うことにした。

2019年6月に入って、文部科学省からの研究受託が決定し、コーディネーターの雇用を行った。コーディネーターは、障害児教育や障害者の移行教育などの経験を豊富にもち、アドバイザー的な役割を担うメインコーディネーター(週1日勤務)と、日常的な学生のケアや授業担当教員の支援を行うサブコーディネーター(週3日勤務)の2名とした。

彼らの雇用とともに本格的な準備段階に入った。最初に行ったことは、プログラムの名称やロゴマークを決めること、協力を期待できる教員に授業担当の内諾を得ること、知的障害者を聴講生として迎え入れるための事務的な調整などであった。名称は「学ぶ楽しみ発見プログラム」とした。受講者に大学の授業をめいっぱい楽しんでもらいたいという思いに加え、受講生が授業を楽しむことができるようなサポートを模索するという関係者の合意を名称に託した。また、このプログラムを普段気軽に呼ぶために KUPI という愛称を採用した。これは Kobe University Program for Inclusion (神戸大学をインクルーシヴにするためのプログラム)の頭文字を並べたものであり、私たちの隠れた思いを込めている。ロゴマークは協力者の藤田雅子氏によるデザインで、六甲山の山並みと人々の多様性が表現されている。

こうした仕込みを経てプログラムのアウトラインが浮かび上がり、学生募集要項を作成し、連携協議会の協力団体(兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、神戸大学附属特別支援学校)に説明を行い、学生募集を開始した。また、受講する知的障害者に聴講生制度を適用するためには、若干の制度変更を行う必要があったが、大学事務の積極的な協力によって速やかにこれが実現されたことは特筆すべきことであった。このプログラムは、事務スタッフの協力なしには成り立ちえなかった。

授業は後期(第3クォーター、第4クォーター)の火曜日、水曜日、金曜日に設定した。

授業は 17:00～18:30 の 1 コマと、その授業をさらに噛み砕いて理解を深める約 1 時間を加えて設定した。ターゲットは、15 時あるいは 16 時に就業する就労支援施設に通う知的障害者を想定した。学生の応募を開始した時点では、夜の授業で、しかも大学の立地も駅からバスに乗らなければならない場所ということもあって、応募者の人数は 3～4 名程度と見込んでいた。

ところが、8 月 7 日に実施した説明会を経て応募締め切りまで、約 1 か月という短期間に実際に応募してきたのは、14 名であった。応募者の中に、神戸大学の障害者雇用で働いている人、福祉型専攻科「エコール神戸」卒業生がそれぞれ複数名含まれたが、新聞に掲載された案内を見つけて応募した個人もあった。また中には電車や保護者が送迎する自家用車で 1 時間以上かかる遠方からの応募者もあった。

これらの応募者を対象に 9 月 4 日に「入学試験」を実施した。うち 1 名は体調不良で欠席し、残りの 13 名のうち合格としたのは 11 名であった。選考基準は、募集要項に明記した応募条件（知的障害があり、高等学校あるいは特別支援学校高等部を修了していること）を満たしており、かつ本人の学ぶ意欲が明らかであることとした。11 名の合格者のうち 1 名は、プログラム開始まもなく参加する余裕がなくなったため、修了者は 10 名となった。

合格者は、入学までの短期間に聴講生としての応募申請手続きを行った。応募に際して必要となる高校あるいは特別支援学校高等部の成績証明の取得に際して、困難が生じるケースが散見された。特別支援学校高等部の多くは成績証明を発行した経験がなく、成績欄の記述方法が不明だったためである。そこで、私たちは成績証明書のフォーマットを準備し、円滑に成績証明書が発行されるように条件を整えた。

入学式は 10 月 1 日に、連携協議会委員や神戸大学人間発達環境学研究科長、神戸大学国際人間科学部発達コミュニティ学科長らが見守る中、実施された。入学式に続き、授業第一回目も兼ねたガイダンスが行われ、一般学生たちやメンター学生との顔合わせをした。

一般学生とは知的障害学生（プログラムの中では KUPI 学生あるいは KUPI 生と呼ばれた）と一緒に授業を受講する学生たちであり、またメンター学生とは知的障害学生をサポートする学生である。メンター学生は、火・水・金それぞれ 3 名～6 名配置された。

この日から 2 月 5 日の修了式までの約 4 か月間、授業を実施した。火曜日は通常の大学の授業に KUPI 学生が聴講生として参加するという形をとった。授業名は「社会教育課題研究（障害共生支援論）」である。水曜日は KUPI 学生を対象としたオリジナルな授業で、授業担当者の専門の講義を行った。コンセプトとしては、大学 1 年生の最初の授業 1 時間分を 3 時間に分けて話すというものとした。金曜日は先述の「のびやかスペースあーち」を会場とし、立地を生かしたフィールドワークやボランティア体験などを行った。またその他にも、ESD をテーマとしたワークキャンプに課外活動として参加する道をつくったり、KUPI 学生の自発的な活動（誘い合って遊びに行ったり、卒業旅行を企画実施したりなど）を見守るなどした。

修了式には、入学式よりもさらに多くの関係者が集まったが、笑顔と感動に溢れた会となった。神戸大学人間発達環境学研究科長名の修了証、メンター学生が自発的に作成したサブライズの卒業アルバムが手渡された。

本冊子は、以上のようなプログラムの足跡を資料として残しておくこと、またプログラムに関与した人たちからの視点から見えたことを、なるべく形にして残しておくことを目的

として編集した。成果や課題についても、さまざまな形で提示し検討する。本冊子が、神戸大学の来年度以降の取り組みの礎にするとともに、こうした取り組みを試みようとする全国の同志たちの参考になれば幸いである。

【参照文献】

- 安藤忠、建部久美子、安原佳子編著（2001）『知的障害者のオープン・カレッジ・テキストブック』明石書店
- 金丸彰寿、大山正博、川手さえ子、張主善、和田仁美、岩崎陽、塩田愛里、高寅慶、金明淑、金英淑、金榮喆、津田英二（2017）「障害学生の「学び」から見るインクルーシブな大学教育の意義と課題～韓国ナザレ大学卒業生のインタビュー調査を踏まえて～」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第11巻1号、pp.19-36
- 近藤龍彰、柴川弘子、森本彩、赤木和重、津田英二（2013）「知的障害のある青年が大学生になることに関する一考察：韓国ナザレ大学リハビリテーション自立学科の調査を通して」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第7巻1号、pp.135-152
- 村田観弥、近藤龍彰、張主善、盛敏、柴川弘子、金鐘敏、赤木和重、津田英二（2015）「学生間の相互性に着目したインクルーシブ教育のケーススタディ：韓国ナザレ大学におけるドゥミ制度及び寄宿舎共同生活」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第9巻1号、pp.29-43
- 津田英二（2003）「セルフ・アドボカシーの支援をめぐる基本的視点」『神戸大学発達科学部紀要』第10巻第2号、pp.91-106
- 津田英二、末本誠、張明順、小林洋司（2006）「知的障害者の親による社会的排除経験の語りに基づく相互教育～神戸大学公開講座の教育的ライフストーリー実践～」日本社会教育学会編『社会的排除と社会教育』（日本の社会教育第50集）東洋館出版社、pp.200-213
- 津田英二（2005）「知的障害者のエンパワーメント実践における当事者性」『神戸大学発達科学部研究紀要』第13巻第1号、pp.59-70
- 津田英二（2006）『障害のある成人の学習支援論』学文社
- 津田英二（2012a）「「場の力」を明らかにする」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』Vol.19、pp.34-43
- 津田英二（2012b）『物語としての発達／文化を介した教育』生活書院
- 津田英二（2017）「都市型中間施設の効果と課題～「のびやかスペースあーち」10周年調査の質的データ分析から～」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第11巻1号、pp.111-119
- 山本道子、余田卓也、八木八重子、李義昭、松岡広路、津田英二（2004）「知的障害のある成人への大学における学習プログラム提供～2003年度公開講座『大学で自分の世界を広げよう』をめぐる～」『神戸大学発達科学部研究紀要』第12巻第1号、pp.13-37
- ゆたかカレッジ・長谷川正人編著（2019）『知的障害の若者に大学教育を』クリエイツかもがわ

2. 神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラムの準備、活動の経過

文科省は生涯学習政策を打ち出し、全国の14ヶ所での委託事業を進めながら2018年に有識者会議を開催し「障害者の生涯学習の推進方策について」という報告を2019年3月にまとめた。ひきつづき、2019年度の委託事業の一つとして5月末に神戸大学における当事業も認められた。

また、2019年7月には「障害者の学びに関する当面の強化策」を提起したが、その中で「大学等における知的障害者等の場づくりに関する研究」をあげ、「知的障害者等の学びの場を継続的につくるにはどのような準備が必要か、大学等に設けることでどのようなメリットがあるのか、社会的な効果としてどのようなことが考えられるのか」という実践的な研究の位置づけがなされた。プログラムの趣旨を次のように確認して募集要項を記載した。

趣旨（募集要項に掲載した内容）

「障害者の生涯学習推進の機運が高まる中、大学もその一翼を担うことができるのではないかという期待が生じています。そこで、神戸大学人間発達環境学研究科では、文部科学省からの委託を受けて、大学の知へのアクセスから最も遠ざけられてきた知的障害者の学びに貢献する方策を求めることとなりました。具体的な事業として、大学の資源を無理なく効果的に活用することで、言語によるコミュニケーションが可能な知的障害のある青年が、学ぶことの楽しさを感じ、自己理解や他者理解、社会認識を深め、人格を陶冶するプログラムモデルの開発を行います。

このプログラムに参加する知的障害学生は、対話的環境の中で大学の知の世界に親しみ、仲間や一般学生と共に学ぶ機会を得ます。困った時には相談役の学生の支援を受けることができます。また、十分にこのプログラムの学びに参加した学生には、修了証が交付されます。」

プログラムを進める上で、①大学の教室を使うこと、②大学の先生方から専門性を活かした授業をしていただくこと、③神戸大学の学生さんと一緒に学ぶあるいはメンター生として協力してもらうこと、④神戸市と神戸大学の連携協定に基づく活動拠点「のびやかスペースあーち」を利用しての地域社会との交流も図ることをコンセプトとした。とりわけ、大学の先生方にはプログラムを進めるにあたって、知的障害青年たちにわかりやすく、しかも専門的な質を落とさない学びを考慮してほしいという難しい注文をしたが、多くの先生方の協力が得られ多彩なプログラムが準備できた。

1) 募集要項作成

5月中旬に事業の認可があり、スタッフが集合して会議できたのが5月29日だった。まずは、学生募集の要項を作成し、合わせてイメージがわかりやすいように日課や、プログラムのわかるチラシを作成した。もちろん、授業をしていただける先生方に対して依頼と趣旨説明、プログラム内容の確認作業も並行して行なった。

(資料) 募集要項全文、募集チラシ

2019(令和元)年度

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム

～知的障害青年のための大学教育の創造～

入学者募集要項

【プログラムの趣旨】

障害者の生涯学習推進の機運が高まる中、大学もその一翼を担うことができるのではないかと期待が生じています。そこで、神戸大学人間発達環境学研究科では、文部科学省からの委託を受けて、大学の知へのアクセスから最も遠ざけられてきた知的障害者の学びに貢献する方策を求めることとなりました。具体的な事業として、大学の資源を無理なく効果的に活用することで、言語によるコミュニケーションが可能な知的障害のある青年が、学ぶことの楽しさを感じ、自己理解や他者理解、社会認識を深め、人格を陶冶するプログラムモデルの開発を行います。

このプログラムに参加する知的障害学生は、対話的環境の中で大学の知の世界に親しみ、仲間や一般学生と共に学ぶ機会を得ます。困った時には相談役の学生の支援を受けることができます。また、十分にこのプログラムの学びに参加した学生には、修了証が交付されます。

実施期間 2019年10月～2020年2月

場所とアクセス 火・水曜日 神戸大学大学院人間発達環境学研究科（神戸市灘区鶴甲 3-11）
神戸市バス 36 番系統 鶴甲団地行

「神大人間発達環境学研究科前」下車すぐ

（36 番系統のバスは、阪神御影、JR六甲道、阪急六甲の各駅を通ります）

金曜日 のびやかスペースあーち（神戸市灘区岸地通 1-1-1 灘区民ホール 3 階）

神戸市バス 90、92、100、102 番系統「水道筋 1 丁目」「將軍通」下車すぐ JR 摩耶駅徒歩 10 分

【プログラムの内容】

火曜日 「障害共生支援論」

神戸大学国際人間科学部の授業に参加をして、本プログラムに参加するみなさんと一般学生が話し合いながら共に学び、あるいはお互いに学び合う授業を創っていきます。

水曜日 「よりよく生きるための科学と文化」

教育学、哲学、音楽学、心理学、自然科学などを専門とする大学教員が、本プログラムのための特別授業を行います。

金曜日 「話し合う！やってみる！」

やってみたいことを話し合っ計画を立てます。外にも出かけます。神戸大学生も一緒に研究や創作活動を行います。

課外活動 神戸大学が主宰するいくつかのプログラムに参加をすることができます。(任意)
それぞれのプログラムについては随時お知らせします。

一日の流れ (一例)

	火曜日	水曜日	金曜日
集合場所	神戸大学	神戸大学	のびやかスペースあーち
16:30~	ホームルーム (夕食も兼ねて)	ホームルーム (夕食も兼ねて)	話し合い活動
17:00~	授業 「障害共生支援論」	授業 「よりよく生きるための科学と文化」	夕食の相談・買い物
18:00~	休憩	休憩	夕食・ホームルーム
19:00~ 20:00	ふりかえり 終了	ふりかえり 終了	あーちの活動に合流 ふりかえり 20:00 終了

入学から修了までの流れ

2019年10月1日(火) 入学式
2019年10月2日(水) 授業開始
2020年2月4日(火) 授業最終日
2020年2月5日(水) 修了式

【募集について】

募集人数 5~6人

入学条件

- ・高等学校あるいは特別支援学校高等部を卒業していること
- ・療育手帳をもっていること
- ・プログラムの方針を理解し、学ぶ意欲があること
- ・言語によるコミュニケーションをとる手段があること
- ・実的な読み書きの力があること
- ・プログラムに対する家族の理解があること
- ・期間中、火・水・金曜日の5時までに来られること
- ・自力通学が可能なこと

必要経費

- ・授業料 (52,800円) 修了までの全額です
- ・授業により教材費、活動費 (実費) を徴収することがある
- ・食費 (5時から始まる授業の前に学内施設で食事をとることができる)
- ・参加任意の課外活動費 (実費)

見学説明会 日時 2019年8月7日(水)、8月21日(水) 16:30~17:30
場所 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 (神戸市灘区鶴甲3-11)

神戸市バス 36 番系統 鶴甲団地行「神大人間発達環境学研究科前」下車
正面 A 棟 3 階 A347 室にお越しください

*申込みは不要です

【入学選考について】

- 選考方法 ・書類選考
・面接（本人）
・簡単な作文
- 出願書類 ・願書
・保護者同意書
- 出願先 〒657-8501
神戸市灘区鶴甲 3-11
神戸大学大学院人間発達環境学研究科 ヒューマン・コミュニティー創成研究センター 黒崎宛て **願書在中**
と、ご記入ください
*願書送付の封筒と切手はご準備ください。出願書類は三つ折り可です
*普通郵便で郵送してください
- 出願期間 2019 年 8 月 23 日（金）消印有効
応募者多数の場合、面接の前に書類選考を行うことがあります
- 選考日時 2019 年 9 月 4 日（水）夕方～ 面接と作文があります
- 選考会場 神戸大学大学院人間発達環境学研究科（神戸市灘区鶴甲 3-11）
- 合否発表 2019 年 9 月 5 日（木）発送

入学説明会（合格者のみ） 2019 年 9 月 25 日（水）夕方～

【問合せ先】

〒657-8501
神戸市灘区鶴甲 3-11
神戸大学大学院人間発達環境学研究科
ヒューマン・コミュニティー創成研究センター 黒崎まで
電話 078-803-7970 （火曜日 13:00~19:00）
FAX 078-803-7971
Mail : krsksck@people.kobe-u.ac.jp



以下のホームページから、本要項、願書、同意書をダウンロードできます。

<http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/KUPI.html>

※本事業は、実践的研究として実施するものですので、個人情報等の点で細心の注意を払った上で、プログラムの様子などについて学会等で発表する場合があります。

Q&A

1. 入学したいけれど、私にはむずかしいのでは？

大丈夫です。大事なのは学びたいという意欲です。たしかに大学の先生の授業ですのでレベルは高いですが、ゆっくりとわかりやすく進めてもらいます。また、神戸大学の学生さんに協力してもらい手伝ってもらいます。

2. 授業でわからないことがあると、どうしたらいいのでしょうか？

このプログラムは、初めての試みですので一緒に取り組んでいきます。なんでも質問してください。また、付いてくれる神戸大学の学生さんにも気軽に相談してください。

3. 曜日によっては、4時半に間に合わないことがありますか、大丈夫ですか？

大丈夫です。仕事や用事で遅れる場合など事前にわかれば、授業内容の説明や途中からの出席に合わせてサポートします。

4. 修了したら、何か資格がとれますか？

このプログラムは、神戸大学の聴講生制度を利用します。修了しても資格や卒業認定にはなりません。KUPIとしての修了証は修了式でお渡しします。

5. 入学選考は、面接や作文もあってむずかしそうですが？

入学者の選考にあたっては、まず大学で学びたいという意欲を知りたいと思います。自分のできる範囲で気持ちを伝えてください。簡単な作文ですので、書ける範囲でけっこうです、また、パソコンで書きたいという場合は申し出てください。

6. お金がかかりそうで心配です。

授業料は総額で 52,800 円がかかります。それ以外には活動費の実費(たとえば、金曜日の活動で出かけた場合の交通費や食事に行った際の食事代など)が必要です。それ以外には基本的にはかかりません。

7. わからないこと、不安なことはどこに相談したらいいですか？

新しい事業ですので、不安があると思います。何でも遠慮なく問い合わせ先(募集要項に記載されている)に電話して聞いてください。

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム

～知的障害青年のための大学教育の創造～

Kobe University Program for Inclusion (KUPI)



■プログラムの目的■

知的障害や発達障害のある人たちに高等教育卒業後の学習機会をつくる文部科学省委託研究の事業です

■プログラムの特色■

- 神戸大学の資源（設備・人）を活用
- 大学教員の専門性を活かした体験的な学びを提供
- 神戸大学の学生と共に学ぶ事ができる

■連携協議会の構成団体■

- ・神戸市教育委員会
- ・兵庫県教育委員会
- ・神戸大学附属特別支援学校
- ・神戸大学大学院人間発達環境学研究所

学習プログラム 週3日(火・水・金)16:30~20:00



<火曜日> 神戸大学
 16:30 HR (カフェ「アゴラ」で夕食を兼ねて)
 17:00 「障害共生支援論」：津田英二先生の講義
 神戸大学生と一緒に受けます
 18:40 授業のふりかえり
 20:00 プログラム終了



<水曜日> 神戸大学
 16:30 HR (カフェ「アゴラ」で夕食を兼ねて)
 17:00 「よりよく生きるための科学と文化」
 神戸大学の渡部、赤木、伊藤、稲原、大田、
 岡原、松岡先生による体験型講義
 18:40 授業のふりかえり
 20:00 プログラム終了



<金曜日> のびやかスペースあーち
 16:30 「話し合う！ やってみる！」
 やってみたいことを話し合って計画を立て
 ます。外にも出かけます。神戸大学生も一
 緒に研究や創作活動をしませう
 18:00 買い物、夕食
 19:30 一週間のふりかえり 20:00 終了

- ◆E.S.D学び隊 ワークキャンプ
- ◆ボランティア体験
- ◆神戸大学でのイベント参加など



【場所とアクセス】

火・水曜日 神戸大学大学院人間発達環境学研究所 (神戸市灘区鶴甲 3-11)
 神戸市バス 36 番系統 鶴甲団地行 「神大人間発達環境学研究所前」下車すぐ
 (36 番系統のバスは、阪神御影、JR 六甲道、阪急六甲の各駅を通ります)
 金曜日 のびやかスペースあーち (神戸市灘区岸地通 1-1-1 灘区民ホール3階)
 神戸市バス 90、92、100、102 番系統 「水道筋1丁目」「将軍通」下車すぐ
 JR 摩耶駅徒歩 10 分

【問い合わせ】

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 3-11
 神戸大学大学院人間発達環境学研究所
 ヒューマンコミュニティ創成研究センター 黒崎まで
 電話 078-803-7970 (火曜日 13:00~19:00)
 FAX 078-803-7971
 Mail:krsksock@people.kobe-u.ac.jp
 http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/KUPI.html
 ホームページから本要項、願書、同意書がダウンロードできます



*以下のホームページから、本要項、願書、同意書をダウンロードできます
<http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/KUPI.html>

3) プログラム内容づくり

○火曜プログラム

火曜日は、津田英二教授の「障害共生支援論」の授業で、一般学生も履修する授業と一緒に受けるという形式で進める難しさが予想されたが、「共に学ぶ」実践の場でもあった。一般の履修学生、KUPI 学生、メンター学生と一緒に学ぶ初の試みだけに、学びの質を堅持しながら、途中で「ボッチャ」ゲームを挟み、最後には「ライフストーリー」を語り合う展開を計画された。KUPI 生も履修できる聴講生の制度を活用しての授業に位置付けた。

○水曜プログラム

水曜日は、神戸大学人間発達環境学研究科教員の中で、この事業を理解して協力していただけの教員と相談しながら授業づくりをしていった。まず、協力していただける先生方は津田教授と赤木准教授からの呼びかけで募り、応諾して下さった教員との相談、打ち合わせから始まった。学びの大きなテーマを「よりよく生きるための科学と文化」として、それぞれの先生方の専門性と日程的な調整をして概要を決めた。

(資料；水曜日プログラム)

○金曜プログラム

金曜日は、神戸大学のサテライト施設「のびやかスペースあーち」を会場にして、学生の話し合いと主体的な取り組みを大事にしようという趣旨で計画した。フィールドワークを中心にして、商店街での散策や聞き取り、ボランティア活動、話し合いを通じて学生のやりたいことを実現するといったプログラムを構想した。

4) 入学者募集の状況と応募、選考

プログラムが週3日、夕方からの授業、神戸大学まで通うという通学の問題もあり、当初5~6人の学生募集もままならないのでは考えていたが、予想以上に反応がよく説明会(8/7と8/21の2回)に計17名の参加があった。応募者は神戸大学内で障害者雇用されている人や福祉型「専攻科」エコール KOBE の卒業生、「あーち」で活動している人などが中心で14名だった。9月4日に選考会を実施した。当日は1人欠席で13名の受験だったので、選考検査は7名の集団面接と6名の筆記検査、作文を交互に実施した。その結果、選考基準に合わない人を除く11名の合格を発表した。

5) 神戸大学学生メンター募集

神戸大学の学生と一緒に学び、支援をお願いするメンター募集を行った。その結果、火曜日は5人、水曜日は6人、金曜日は3人のメンターが集まり、それぞれに活動してもらった。メンターとしての役割は、KUPI 生(以下、「学生」)に授業内容の解説や補足をしてもらおうと共に同世代として友達感覚で接してもらえるようお願いした。メンターは神戸大学と雇用関係を結び、責任をもって働いてもらうようにした。

6) 聴講生制度の活用、事務当局の協力

一般学生の履修授業を同じように受けるために聴講生制度を利用した。聴講生制度の利用にあたっては、大学事務の方に制度改正も含めてたいへん御苦勞と御協力をいただいた。履修生としての願書を提出してもらい、聴講生費用を納めてもらうことで神戸大学の学生として認められる。大学の教室を使用できること、図書館も自由に利用できること、健康診断を受けることができるなどのメリットがある。なによりも、大学の制度にのっとり入学し、正式に大学生として認められたことにある。デメリットは、履修費用がかかること、願書提出にあたり卒業証明書や成績証明書が必要になることなど短期間に手続きを進めないといけないことだった。

平成 31 年度

神戸大学国際人間科学部 科目等履修生・聴講生 募集要項

1. 出願資格

- (1) 大学（短期大学を含む。）を卒業した者
- (2) 外国において、学校教育における14年の課程を修了した者
- (3) 本学部において、前各号に規定する者と同等以上の学力があると認められた者
- * (3) の出願資格により出願しようとする場合は、出願開始の1ヶ月前までに国際人間科学部鶴甲第二キャンパス事務課 教務学生係(078-803-7924)まで事前に連絡して下さい。

2. 出願手続

出願書類に虚偽が判明した場合は、入学を取り消すことがあります。

- (1) 科目等履修生・聴講生願書（所定の用紙）
- (2) 履歴書（所定の用紙）
- (3) 最終出身学校の卒業（見込）証明書又は修了（見込）証明書及び成績証明書
- (4) 写真1枚（願書に貼付、出願前3か月以内に撮影したもの 縦4cm 横3cm）
- (5) 検定料払込証明書（郵便局の受付日付印のある郵便振替払込受付証明書）
- (6) 返信用封筒（角形2号 140円切手貼付、郵便番号・住所・氏名を明記したもの。）

会社等（官公庁を含む）に在職している者は、上記のほか、次の（7）の書類が必要です。

- (7) 在職のまま入学することについての所属長の承認書（願書裏面）

日本に居住している外国人の場合は、上記のほか、次の（8）の書類が必要です。

- (8) 住民票の写し（提出日前 30 日以内に作成されたものに限り。）又はこれに代わる書類

* 証明書に記載された氏名が卒業等の後、婚姻等により変更した場合は、それを証する公的機関の発行した証明書等を添付してください。その書類は、確認後に返却します。

3. 在籍期間及び受講単位数

- (1) 在籍期間 1学期
 - 【前期（1・2クォーター）】 4月1日～9月30日
 - 【後期（3・4クォーター）】 10月1日～3月31日
- * 科目等履修生及び聴講生の在籍期間は、当該授業科目の開講学期とします。
- ただし、授業科目を履修後、更に履修を希望する場合は、在籍期間の延長を認めることがあります。延長は通算して2年を限度とし、その都度、出願手続、教授会の承認が必要です。
- (2) 受講単位数 1学期 6単位以内
- * 集中講義、実験、実習及び演習は受講できません。また、授業科目によっては受講できない科目もあります。
- * 科目等履修生及び聴講生用の時間割は、決定次第、国際人間科学部 Web サイトに掲載します。

4. 選考方法

書類審査及び面接。ただし、面接は省略することがあります。

5. 出願方法等

検定料の振込は出願期間初日の1週間前より受け付ける。
出願書類は、書留速達郵便で封筒表面に「国際人間科学部科目等履修生・聴講生願書在中」と朱書き、期間内に国際人間科学部鶴甲第二キャンパス事務課教務学生係に郵送すること（期間内必着）。持参での出願はできません。

(1) 出願期間

入学時期が 4 月の場合 平成31年2月13日(水)～2月15日(金)
10 月の場合 平成31年8月16日(金)～8月20日(火)

(2) 宛先

神戸大学国際人間科学部鶴甲第二キャンパス事務課教務学生係
〒657-8501 神戸市灘区鶴甲3丁目1-1 (TEL: 078-803-7924)

6. 検定料、入学科及び授業料

- (1) 検定料 9,800円
- (2) 入学科 28,200円
- * 科目等履修生又は聴講生として、神戸大学の複数の学部又は研究科に同時に出席する場合は、最初に手続きをした学部又は研究科でのみ入学科を徴収します。
- (3) 授業料 1単位 14,800円
- 在学中に授業料の改定が行われた場合は、改定時から新授業料が適用されることとなります。
- * 上記の金額は平成30年度のもので、平成31年度入学者の納付金額については、別途通知します。

7. 合格通知

願書締切日の約1か月半後に郵便により通知します。なお、電話・メール等による照会には一切応じません。

8. その他

- (1) 科目等履修生は、受講した授業科目の試験を受けることができます。試験に合格した場合は、単位修得証明書を交付します。
- (2) 本学部の科目等履修生及び聴講生制度を利用して、在留資格「留学」を取得することはできません。
- (3) この募集要項に関する質問は、国際人間科学部鶴甲第二キャンパス事務課教務学生係まで連絡してください。

麻疹、風しんのワクチン接種（予防接種）・抗体検査に関する書類の提出について

神戸大学では「麻疹風しん登録制度」を定め、入学後のキャンパス内での麻疹、風しんの流行を防止するため、全ての新入生に次の①、②、③のいずれかを提出していただいています。

- ① 麻疹と風しんのワクチン接種を、満1歳以降にそれぞれについて2回ずつ受けたことを証明する書類
- ② 過去5年以内（平成26年4月以降）に麻疹と風しんのワクチン接種を、それぞれについて1回ずつ受けたことを証明する書類
- ③ 過去5年以内（平成26年4月以降）に受けた麻疹と風しんの抗体検査の結果が、「麻疹と風しんの発症を防ぐのに十分な血中抗体価（次頁の表を参照）を有していること」を証明する書類

- * ①、②のワクチンは、麻疹・風しん混合ワクチン（MRワクチン）等の混合ワクチンでもかまいません。
- * ①、②では、接種したワクチンの種類と接種年月日が記載されている必要があります。医療機関等から発行される証明書その他、平成20年4月1日から平成25年3月31日まで実施されたMRワクチンの第3期予防接種（中学校1年生に相当する年齢時）や第4期予防接種（高校3年生に相当する年齢時）に伴う「予防接種済証」でもかまいません。
第3期・第4期予防接種の「予防接種済証」は①の1回分として使用できます。
- * 母子手帳も、接種したワクチンの種類と接種年月日が記載されていれば①、②の書類として使用できます。既往歴（かかったことがある旨の記載）のみで、診断性態として確実な検査結果などが記載されていない場合は、③を提出するか、ワクチン接種を受けて①か②を提出してください。
- * ③では、次頁の表の血中抗体価の測定方法と測定値が記載され、測定値が同表の判定基準を満たしている必要があります。血液検査結果票そのものの提出でもかまいません。血中抗体価が不十分な場合には、必要なワクチン接種を受け、①か②を提出してください。
- * ①、②、③の書類の組み合わせ、例えば麻疹については①、風しんについては③を提出してもかまいません。
- * 麻疹、風しんの血中抗体価が不十分にもかかわらず、病気や体質等やむを得ない事情によってワクチン接種を受けられない場合には、その旨を記載した文書（医師による証明書等）を提出してください。
- * 上記のいずれの書類も入学試験の可否判定に用いるものではありません。

提出期限：4月入学者は新入生健康診断実施日、10月入学者は10月入学者健康診断実施日
提出先：保健管理センター

麻疹と風しんの発症を防ぐのに十分な血中抗体価の測定方法と判定基準

区分	測定方法	判定基準	備考
麻疹	IgG-EIA法	8.0以上の陽性	3つの測定方法のうち、いずれかで陽性
	PA法	128倍以上の陽性	
	NT法	4倍以上の陽性	
風しん	HI法	32倍以上の陽性	2つの測定方法のうち、いずれかで陽性（HI法を推奨）
	IgG-EIA法	8.0以上の陽性	

血中抗体価の測定は、この表の方法によってください。
発症を防ぐのに十分な血中抗体価は、測定方法によって異なります。また、単に抗体陽性とされる値よりは高い値なので注意してください。

- * 医療機関を受診する際には、必要なワクチン接種や抗体検査を受けることができるか、予め確認してください。また、この学生募集要項を医師に提示するなどして必要な証明書を発行してもらってください。（特に、抗体検査を受ける場合は、測定方法と判定基準を確認していただってください。）

この感染予防措置に関する問い合わせは
神戸大学保健管理センター TEL. 078-803-5245
神戸大学学務部学生支援課 TEL. 078-803-5219

特に、特別支援学校の中には成績証明書の発行した経験がない学校もあり、その場合、「学ぶ楽しみ発見プログラム」事務局が特別支援学校用の成績証明書フォーマットを提示し、それに基づいて急遽各学校に作成してもらった。

7) 連携協議会の開催と内容

この事業は、行政や地域の関係機関との連携協議会を設置して進めることになっていて、企画段階から連携協議会の構成団体には依頼していた。具体的には、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、神戸大学附属特別支援学校、神戸大学国際人間科学部、神戸大学人間発達環境研究学科によって構成し、年間4回の連携協議会を開催した。

なお、この事業を推進する事務局は、神戸大学人間発達環境学研究科教員2名、コーディネ

ネイター2名、県教育委員会からの研修生で構成し、メンター学生の協力も得て事業を推進してきた。

○第1回 連携協議会（7月10日）

事業の概要、プログラムの趣旨説明、募集要項の提案などを行い、委員より意見をいただいた。具体的な学生募集の方法や、メンター募集について、またプログラムの内容等について意見交換した。

○第2回 連携協議会（10月1日）

入学式の始まる前に開催し、募集の状況や選考の経緯などを報告、入学する学生のことやプログラムの内容、聴講生制度なども報告し、意見をいただいた。

○第3回 連携協議会（12月11日）

入学式以後のプログラムの進捗状況や学生の様子などを報告し、途中からプログラムの実際の様子を見学していただいた。保護者見学も併せて実施したため授業見学後の意見交換は合同で実施した。その中で出された意見を紹介する。

<授業見学の感想およびプログラムに対する意見>

- ・ルミナリエに学生とメンターとで行った話を聞くと、関わりを楽しみにしているのだなあ、安心できる場なのだなと思う。10人が休まずに来ていることに、学ぶ意欲を持っているなど感じる。
- ・校長会の代表が保護者にも事業のことを伝えてくれている。これからも参観もできるのですね。近畿・中国のカンファレンスも県教委で取り組みをしている。ところで、他大学の取り組みの動きはあるのか？
- ・文科省はいくつか声をかけて断られている。神戸大が引き受けた。時期尚早という意見が多く今のところ取り組んでいる大学はない。
- ・文科省の委託は来年で終了する予定。制度づくりに委ねられている。生涯学習の位置づけで高等教育課の予算で何とかできないかと考えているようだ。
- ・高等教育のお金がからむと、先行事例としてアクセスすることが期待できる。
- ・今回10名だけど、ニーズは高いのでは？
- ・ニーズは高い。次年度は文科省の動きをみて、公開されたら募集について検討する。
- ・2月の報告と次年度の方向性をみての判断になる。

○プログラムの内容や学生の反応など報告（全専研のレポート活用）

○授業見学について感想

- ・授業は面白そうだけど、本人は仕事終わってからの活動だし、どうかなと心配していたが、全然休まずに行けている。高校時代はずっと休みがちだったのに・・・。
メンターとニコッとして話しているのを見て、楽しそうで、青年らしい姿だと思った。
- ・いつも楽しくやっている。内容は分かっていないのでは、いっぱい話してくれるけど、さっぱり授業内容はわからない。本人自身は楽しく参加できている。
- ・一般就労しているので、「がんばりなさい」と言う声かけになる。まわりに同じ年齢の子がいて安心感があるのでは。ルミナリエに行かせたが、一人でだすことはなかったので、友だちやメンターと一緒に良かったことがすごくよかった。若者同士でふれあう機会がなかったもので、うれしかった。
- ・メンターに連絡してもらったなど、安心感があった。

- ・Tさんの小学校の担任で津田教授の教え子。この事業にTさんが参加し、こうしてめぐり合えたのは奇遇。こういう居場所があればいいなと思う。
- ・今後、この人たちがどうすごしていくのかが気になる。
- ・楽しそうな様子が見られた。プログラムは専門性の質が担保されていて、知的好奇心や学ぶ意欲を感じた。発問やキーワードが落としこまれているので、学びの場になっている。その意味では居場所だけではない。学習の場が楽しみながらルールがつくられ、記憶に残るものになっている。メンターの役割も大きいなと感じた。私としては、現場の先生方に見てほしい。
- ・楽しんでいるのが、にじみ出ている。それでいいと思う。大学に来てチャレンジするだけで、勇気がある。休まずに来ているのはすばらしい。学びの価値が伝わる。
- ・あとのことも考えてどうつなげていくのか。コミュニケーションをとりたいという願いにどうつないでいくのか考えてほしい。
- ・次年度もやる方向で、同じような形で少し改善したい。

○第4回連携協議会（2月26日）

事業全体のまとめと意見交換、報告冊子作成、次年度に向けてなどを協議

- ①最初に津田教授より委託事業の全体のまとめ、成果と課題について報告があった。次年度の継続した事業として認められるだろうという見通しが報告された。ただ、事業全体が兵庫県の広域で受け、その中で神戸大学の取り組みを位置付ける方針の説明があった。3年間の事業で、広い視野で方向性を考えていくことになるという説明を受けた。
- ②今回の事業全体の報告冊子について、骨子を説明しまとめ方や内容等について意見交換をした。3月中旬をめどに作業を進めていくことを確認した。
- ③近畿・中国地区ブロックコンファレンスと関東・甲信越ブロックコンファレンスの報告をし、意見交換した。近畿・中国ブロックは行政関係者の参加が多く、全体で200名規模になり成功した。ポスターセッションは会場の関係で聞き取りにくかったことや、分科会での報告が短く消化不良の面はあったが、シンポジウムをはじめ、学びのイメージを変える素晴らしい会になったという報告だった。関東・甲信越ブロックも分科会、ワークショップと充実しており、シンポジウムも魅力的だったという感想が出された。
- ④事業全体についての意見では、KUPI学生が何を期待して学び、学生の変化はあったのかという問いに対し、アンケート結果での学生の「大学に来てよかった」という感想をはじめ印象に残った授業内容が記されていたこと、「コミュニケーションの力を付けたい」という願いに対して学生間、メンターとの交流や話し合いが上手になったことなどの変化が紹介された。なにより、学生やメンターと一緒に掛けるなど人間関係の広がりが見られるなど充実した学びになったという意見が出された。ただ、保護者の受け止めや感想は十分に把握できていなかった。
- ⑤その他、次年度に向けた課題（学生募集、メンター募集、プログラム担当者や内容づくり、聴講生制度など）や、この事業が他大学に波及していくのかといった点についても意見交換をした。

8) 記者発表とメディアの反応

8月6日に神戸市役所で記者発表を行った。地元の神戸新聞社をはじめ4社が興味を

持ち、津田教授の概要説明に耳を傾けた。8月7日に神戸新聞社、8月21日に産経新聞社がプログラムの記事を掲載した。掲載後は電話の問合せが増えて、それがきっかけで受験をした学生もいた。遠くは名古屋からも問合せがあり「今、子どもは中学生だが将来を考えると興味がある」など関心の高さを実感した。プログラムが始まると大阪のテレビ局からの問合せや新聞社からの取材があり丁寧な対応を行った。

9) 入学式の様子

10月1日、津田教授、吉田教授（発達コミュニティ学科長）、学生の井上氏による音楽セッションで入学生を迎え、和やかな雰囲気での入学式が始まった。学生は一人ずつ宣誓をしっかりと伝え、来賓の方々の温かい言葉に耳を傾けていた。入学式は平日の17時から始まったため一人で参加をする学生もいたが、書類を提出して受付を済ませ、保護者向けの連絡事項もしっかりと聞いていた。入学式の写真を見るとたった4か月なのに懐かしく感じた。この時、学生たちの表情や関係性がこうなるとは想像ができなかった。

入学式が行われた大会議室は図書館や総務部の横にあり、多くの学生が通りかかる。受付の準備に追われていると通りかかった神戸大学生が「お手伝いをしましょうか？」と声をかけてくれた。申し訳ないと思ったが人出が足りず手伝ってもらった。すると説明はほとんどしていないのに状況を察知してテキパキと会場案内や受付を見事にしてくれた。驚きと感謝でいっぱいになった。そして「このプログラムは聞いたことがあります。入学式の見学をしてもいいですか？」と、たくさんの学生が興味を持って入学式を一緒に祝ってくれた。ありがたい。初日から神戸大学生の行動力や優しさに感動をした。



10) 修了式と打上げの様子

修了式も入学式と同じように演奏から始まった。今回は KUPI 生のマリンバと岡崎先生のピアノ伴奏による「愛のあいさつ」である。

修了証は聴講生として正式に大学から発行された。とても立派な修了証を青木先生からしっかりと受け取った。神戸大学で働く学生が 3 名いるが、彼らが所属をする部署で支援をする仲田氏には入学式と修了式に列席をお願いした。学生募集の時からプログラムに興味を持ちそうな青年にパンフレットを渡して声をかけて大変お世話になった。職場でも KUPI の話しをしていたと聞き、彼らの成長を一緒に見届けてくれた。



打上げは修了式のあとにみんなで準備をした。2名の学生が司会を務めたが、彼らはいつも積極的である。軽食は神戸大学生協でオーダーをした。(会費制)

プログラムが終わってしまう寂しさはあるが、あの場にいた全員がほっとした表情をしていた。学生や彼らを支える保護者の皆さま、津田教授をはじめとする神戸大学の関係者やスタッフ、そしてなにより学生と一番近かったメンター生が素敵な笑顔で見送ってくれた。軽食や会話を楽しんだあとは、一芸を披露したい学生が歌を歌い、マリンバを再び演奏してくれた。事前に伴奏用の楽譜を岡崎准教授に渡していたので準備をしていただいた。2～3曲の予定がレパートリーを次々と演奏。津田教授(サクソ)とメンター学生の井上氏(ドラム)も参加をして立派な演奏会になった。最後は「believe」を全員で歌った。

メンター生が自身のテスト期間中にもかかわらず、サプライズで卒業アルバムを作ってくれた。スタッフやメンター生からのメッセージを集めるにはかなり時間がかかったと思われる。10冊のオリジナルアルバムはメンター生から一人ずつ手渡された。1人のメンター生は1か月半前から動画ムービーを作ってくれていた。膨大な数の写真から個人の笑顔やベストショットを探し、メッセージや曲を入れたものを流してくれた。本当に温かい思いが伝わり感動をした。時間がかなり延長をするくらい、いつまでも楽しい会話は続いた。



3. プログラムの内容

1) 火曜日プログラム

社会教育課題研究 「障害共生支援論」(担当教員：津田英二教授)

○授業回数 : 16回

○授業参加者 : KUPI 生 10名、一般学生 9名、メンター4名 合計 23名

○授業の流れ : 17:00~18:30 授業

18:30~18:50 休憩

18:50~20:00 KUPI 学生、メンター、黒崎でふり返しを行う
ふり返しシートの記入

20:00~21:00 津田教授、メンター、黒崎でふり返しを行う

○表示の仕方 : KUPI 学生→K 一般学生→S

テーマ	日付	授業	内容
1	10月1日	ガイダンス	入学式、授業概要説明、自己紹介
2-1	10月8日	ユネスコ文書	現代社会の問題
2	10月15日	ユネスコ文書	学習とは何か
3-1	10月29日	ボッチャ	準備と練習、ルールの把握
2	11月5日	ボッチャ	トーナメント「つだっち杯」
4-1	11月12日	民主主義について	レクチャー 「私たちにとっての民主主義」
2	11月19日	民主主義について	グループワーク
3	11月26日	民主主義について	グループワーク
4	12月3日	民主主義について	発表会
5-1	12月10日	ライフストーリー	ライフストーリーの説明 津田教授のライフストーリーを聞く
2	12月17日	ライフストーリー	KUPI 学生と一般学生は別々に授業 K : グループに分かれて語る (練習) S : 津田教授の講義
3	12月24日	ライフストーリー	① KとSでペアになって語り合う
4	1月7日	ライフストーリー	② 〃
5	1月14日	ライフストーリー	③ 〃
6	1月21日	ライフストーリー	KUPI 学生と一般学生は別々に授業 K : メンターとふり返しを行う S : 津田教授の講義
6	1月28日	ライフストーリーのまとめ 全体のふり返し	お互いの学びについてふり返る 全体のふり返し、感想

〈テーマ1〉 入学式、ガイダンス

・入学式の様子は2. 9)に記載の通りである。一般学生にとっては、授業の初回が「入

学式参列」という始まりだった。入学式後のガイダンスは全員が丸くなって顔が見えるように座り、自己紹介が始まる頃には少し肩の力が抜けて笑顔が見られるようになった。



【授業の記録】

以下は、黒崎（サブコーディネーター）の視点からまとめた授業の記録である。なお、KUPI 学生は「学生」と表記し、[授業の内容、学生の様子] [学生のふりかえりシート] [メンターの感想] の構成で内容を記す。

〈テーマ2-1〉 ユネスコ文書 「現代社会の問題」

- 全員の顔が見えるように机を配置。座席は自由。学生、一般学生、メンターが交じって着席。メンターは学生のサポートを意識して隣に着席をした。
- 授業はプロジェクターに映し出される資料と津田先生の講義で始まった。ユネスコ文書について一般学生は理解をしているが、学生はさっぱりわからない（知らない）様子。津田先生が分かりやすく生活に密着した例えで説明をするのを聞いて頷く学生もいた。知らない言葉をスマホで調べて納得したり、発表につなげる学生もいた。
- 学生が一つの言葉（地球温暖化や環境問題）について発言をすると意見が飛び交って理解が深まるが、そうなる一般学生は待つ状態が続く。学生の発言に興味を示して聞いている一般学生もいるが、そうでない人もいる。津田先生は学生の発言をなるべく聞いて次に進む。
- 学生寄りの授業が進む中、一般学生は難しい言葉を学生にわかりやすく説明をしてくれた。しかし一般学生の発表は内容も言葉も難しいので相互の学びになるのだろうかと思うこともあった。仕事帰りに来る学生は眠くて寝てしまうこともあった。
- ふり返りでは発言が飛び交った場面を思い出して、その時に発言がなかった人にどう思ったかを尋ねて参加を促す。難しい言葉や忘れた内容はメンターがフォローした。逆にメンターから学生に質問が出ることもあった。
- ノートを取る学生は2名。タブレットに打ち込む学生は1名。タブレットの学生は授業後に毎回、黒崎に送信をして見せてくれた。
- 黒崎は「どう思ったか？」と、ざっくりした質問になりがち。これでは学生は答えにくい。「何がどうなのか」が、そもそもわからない人もいる。「私はこう思ったけどみんな

はどう?」、又はピンポイントでの質問をするなどの工夫が必要であった。

[学生のふり返しシート]

- ・今日の授業を受けて社会が困っていることを学びました。
- ・教育で排除、戦争、抑圧、貧困はなくせる。持続可能な社会（生活・世界）を作る。
- ・人は誰でも学ぶチャンスはいくらでもあるし、仕事でも授業でも学べる事は違うけど達成感はある。
- ・自然災害が今年・去年は多かったのでそういう事についてしっかりと学べたと思います。
- ・日本は災害が多い国なので、いつどこで何が起きるのかもわからないので、災害でたくさんの人と命が奪われるのは辛いなと思いました。
- ・聞いて難しかった。
- ・難しいので解決するような話をしたいです。少し寝てしまった。
- ・地球温暖化が問題視されている背景には、私たちの日常生活においての小さな積み重ねが問題解決の鍵だと思います。
- ・今回の授業を受けて自分自身障害を罹患しながらも障害がある方に対する教育についての知識をより向上したいなと思いました。
- ・環境に関する内容でしたが、それは前から問題されています。
- ・このまま汚れなく、平和で美しい環境になってほしいです。
- ・地球温暖化の話になった際、僕の話と津田先生の話のスケールに大きな差が出ていた。
- ・「5つの負（貧困、排除、無知、抑圧、戦争）を減らすには」というテーマの時に、なかなか思いつかず、普段の日常であることについて話したら先生が納得してくれた。

[メンターの感想]

- ・学生と一般学生の温度差、距離感を感じるがあった。
- ・答えて終わりだけでなく、相手に応じるコミュニケーションのことも意識してサポートしていきたいと思います。
- ・声の大小や発言回数の差をいかに留意するかを考える必要があると感じた。
- ・学生は疲れているようだったが真剣に授業を聞いていた。
- ・メンターとしてできることはないかと思いながら授業を受けた。
- ・学生の理解度が高いと感じた。

〈テーマ2-2〉 ユネスコ文書 「学習とは何か」

- ・プロジェクターの資料と津田先生の講義で授業は進んだ。ユネスコの「世界が平和になりますように」の願いを受けて教育の大切さを学ぶ。「教育=子どもや若い人」ではなく、みんなの問題だと津田先生は伝えた。教育はなぜ大切なのかを皆で考えた。
- ・「民主主義を取り戻そう」→教育が大事だよ、教育によって平和が作られているよね、
民主主義のあり方が昔と今では変わっている、などを学んだ。民主主義って言葉は聞いて

たことがあるけど説明は難しく、最後まで理解は難しかった。

- ・授業中に音が気になって別室へ移動する学生がいた。他の学生が水筒のお茶を飲む時に氷がカラカラと音を立てるため気になるという。授業後に帰宅を促すが最後（20時）まで別室でメンターと過ごした。メンターがずっと一緒にいる必要があるのか。大学生だから一人で休憩できるのではないか。しかしまだ慣れていないからサポートは必要か？など悩むことは多い。メンターやスタッフは話し合ったが考えが様々で正解がないため、その都度状況を考えて対応をするしかなかった。寄り添い方については距離感を考えながら過剰にならないように配慮をした。

[学生のふり返しシート]

- ・前回もむずかしくて今回もむずかしかったです。でもべんきょうになりました。
- ・今日は環境の変化の事を学べてよかったです。最後に海外で仕事をする子供のVTRを見てかわいそうだなと思いました。
- ・民主主義は平等な社会をつくるはずなのに、国どうしの争いとかデモがその国で増加していること。
- ・今日の授業で全ての人が教育を受ける権利があるのと、民主主義でみんなを平等に受け入れる社会は出来ると思う。
- ・今日は映ぞうでいろいろ見て分かる所もあれば？のところもありました。世界の国々の人達はたいへんな思いをして生きているけど私たちはこうして普通に生活できていることにもっと感謝しなければいけないなと思いました。
- ・難しすぎた為、空だか追いつかないのもっと簡単に教えてください。楽しくボッチャをやりたいです。
- ・本日の授業で社会人になってからは勉強からかけ離れており、改めて教育と言うキーワードに重きを入れた。今日行きは生涯に渡り切り離せないものだと痛感しました
- ・グループで話し合う手段が非常に良かった。
- ・よく聞いた。ねむたかったけど。せんそうとかきょういくとかとてもむずかしいと思った。
- ・教育とは一言で説明するのはむずかしいと思うし、みんしゅしゅぎとはあまり聞きなれないので全く意味がわかりません。すこしいねむりをしてしまいました。

[メンターの感想]

- ・学生と一般学生のペアワークの際に、会話が進まない時にどの程度サポートに入ったらよいのか少し悩んだ。
- ・今日の授業内容は難しかった。そんな中で全ての学生が一緒になれるには、、、を考えた。
- ・音に対してしんどそうな学生がいた。補聴器を付けている人や聞こえにくい人がいる、という情報を一般学生にも伝えた方が良くも思えないと思った。

〈テーマ3〉 ボッチャ 「練習、つだっち杯」

- ・学生にとって難しい講義が続いたあとは、広いダンスホールでボッチャを楽しんだ。ボッチャをきっかけにお互いの名前を知り、待ち時間は雑談を楽しみ、あだ名をつけて呼び合う学生もいた。練習を重ねるうちにかなり上達して盛り上がる。ふり返りではルールを確認した。
- ・つだっち杯では試合の様子を実況中継する学生がいて、決勝戦は大いに盛り上がった。津田先生手作りの表彰状が手渡された。「またボッチャをしたいなー」の声が飛び交った。
- ・同じチームの人と自然な流れでハイタッチなどのボディタッチをしていたが、それらが苦手な一般学生がいた。しかし断るのは悪いな〜と話す。してほしくないことは学生に伝えてください、と伝えたが言えないという。同じ授業を受ける一般学生にも配慮が必要だと感じた。

[学生のふり返りシート]

- ・初めてボッチャをやって、いろんなコツ（力の入れ方、ボールの投げ方等）があることを知れました。もう少し練習をすればコツをつかめると思う。楽しかったです。
- ・難しかったけど、メンターの人が優しく声をかけてくれたので楽しむことができました。
- ・勝ち負けより楽しむのが良い。
- ・最強は力なり。
- ・競技の存在は知っていたので比較的イメージしやすかったです。カーリングと似ている。
- ・ボッチャに参加をして負けるか勝つか不明でしたが、精神を落ち着かせ白いボールめがけて軽く転がし、ぶじ勝利出来たことが印象に残りました。支援学校時代にやったことがある。
- ・コントロールショットが意外と難しかったです。自爆してしまったりなどいろいろな安定しませんでした。
- ・今までの授業の中で一番「心・技・体」を使ったと思います。

[メンターの感想]

- ・ボッチャが良いレクリエーションになってどんどん学生と一般学生の垣根がくずれて、和気あいあいとした空気になっていたと思う。この空気が学びにもつながると良い。
- ・なんとなく異性への気持ちが表れる場面があった。
- ・学生に対して一般学生やメンターが優しすぎることについて、果たしてそれがよいのかどうか、を考えた。
- ・座学と違って身体の動きや特徴を知ることができた。学生はとても上手で驚いた。
- ・活動をすることで、自然と会話や関わりが生まれていた。
- ・メンターという立場を忘れて楽しみました。活発な人と静かな人の差に留意しつつ、プログラムを運ぶことを考えたいと思った。



〈テーマ4-1〉 民主主義について 「私たちにとっての民主主義」

- ・津田先生は学生が民主主義について理解が難しかった様子を見て、23名を4グループに分けてグループトークを実施した。内容は「王様や殿様はいた方がいいと思いますか？ いない方がいいと思いますか？ なぜそう思うかをグループで話してください」
リーダーは学生、書記は一般学生、メンターはサポート、時間は30分間。
机の上に模造紙を置いて話し合いの様子をどんどん書いた。会話だけだと忘れてしまうが、目の前に書いてあると思い出しながら話し合いを進めることができた。
- ・会話が得意な学生のグループは意見が飛び交うが、ゆっくり考えながら話す学生のグループは、スローテンポに合わせるため話し合いは進まない。メンターがサポートの仕方について焦っていたが、津田先生はその葛藤が大切だと伝える。先生がメンターにグループのメンバー変更を提示するが、メンターは「やってみます」と答えた。その後このグループは、うまく役割を分担して会話を楽しみながらペープサートを作り上げた。
- ・別のグループで一般学生同士が難しい内容で話し合いが盛り上がっていた。学生は全くわからず聞くのみ。メンターが間に入って全員での話し合いに戻す。あとで一般学生からこんな話を聞いた。「学生にわかる言葉を選びながら話すけれども、時々それがすごいストレスになる。さっきは話したいことがどんどんあふれてきたから、もういいや！」と、学生を置き去りにする話し合いになってしまった。あとで考えると申し訳ないことをした」と。神戸大学生同士の会話はレベルが高く、おそらく一般学生全員が同じようなストレスを感じていたと思われる。この頃から、「一般学生がこの授業で学ぶべきことは何か？」を皆が考えるようになった。この件に関しては報告の最後に記述する。
- ・学生は一般学生やメンターの配慮のおかげで話し合いを進めた。口数が少ない学生もいるが、ふり返しシートにはしっかり気持ちや感想を書いている。表現の仕方は自由。話さなくてももしっかり参加をしている、とメンターは理解をしていた。

[学生のふり返しシート]

- ・きょうはみんなしゅしゅぎについてべんきょうしました。ねむくならなくてよかったです。
- ・いいリーダーとわるいリーダーがいるとどうなるのか？民主主義とはみんなが仲良く平等でゆたかになること。国民みんなの事を考えられるリーダーが必要かも、、、
- ・今日の授業は分からないことだらけでした。私は社会は嫌いなのでちょっと苦労しまし

た。でもメンターさんがいたからなんとか最後まで聞けました。

- なかなか難しい話題。
- ぼくは社会や歴史が大好きです。
- 普段の日常生活において深く考えることが無いので身近でシンプルな問題に対して焦点を当てて改めて深く考えさせられる事を痛感しました。
- 王様はいてもいなくてもどちらでもいいと思います。民主主義の勉強は僕には少しわかりにくかったです。
- リーダーを務めたはいいのですが、お題である「民主主義」がよくわからなかった。

[メンターの感想]

- 人の話を聞くことに難しさを抱えている場合には、対話が難しくなってしまうことがある。しかし対話を促すためのサポートをしようとして、それがまたプレッシャーになってしまう可能性を感じて葛藤している。
- メンターが積極的に関わっていくことが良いのかどうか難しい。一般学生の学びを奪うことにならないか？相互の関係の中で声をかけ合ってもらう方が良いのか？などを悩む。
- 一般学生同士の活発な議論中に学生にどのくらい説明を入れたらよいのか、どこまで介入すべきなのかを手探りの状態です。
- 一般学生の言葉を理解できている時と、そうでない時があった。その都度確認できればよいのだが、話しの流れもあるため難しいと感じた
- 学生は自分の意見を話すのに時間がかかるので、話し合いが進まなかった。



〈テーマ4-2~4〉 民主主義について「グループワーク」

- 「民主主義を表現しよう」
世の中でおかしな事、嫌な事、こうなってほしい事を寸劇で表現をする。
- 内容を決めてシナリオを作り、配役、練習、、と進めた。
- 内容は一般学生が中心となって決めるグループが多かった。
- 学生から「津田先生、トロフィーがほしいです！」の声があり、津田先生は学生たちが劇を作る横で4つのトロフィーを自作（アカデミー賞、お笑い賞、物語賞、グランプリ）

- ・A グループ「国会」。居眠りする議員、スマホをさわる議員、など
シナリオの作り方は、始めに出た文章（内容）の続きを次の人が自由に語る。そしてまた次の人が自由に語って物語を作っていた。思わぬ方向に話しが進むことを楽しんでいて。劇の解釈は観た人に任せる。
- ・B グループ「避難所」外国の人、車いすの人、障害のある人は不自由だよね
リーダーが積極的で、あっという間にシナリオや配役が決まり、練習を始めるのも一番早かった。リーダーが効果音を作って USB で持参した。
避難所で不自由に過ごす様子がうまく表現されていた。練習をしっかりとった成果あり。
- ・C グループ「歩きスマホ、歩きタバコ」勇気をもって注意をしよう
シナリオ作りに時間がかかったがノリツッコミも入っていた。身近なテーマゆえ、観た人の感想が一番多かった。歩きスマホの危なさ、自転車に乗りながらスマホを使っている人も多くて危ないよね、事故をした時の損害賠償も大きい、など。
- ・D グループ「新しいことにチャレンジをしたい！」ペープサートを作って表現
授業中になんとか内容を決めて、一般学生が自宅でシナリオを作成してくれた。ペープサートは絵を描く人と色を塗る人を分担して発表直前まで作っていた。絵が得意な学生は集中して取り組んだ。作りながら会話をする姿はとても楽しそうだった。練習をする時間はなくぶっつけ本番だったが、完璧なシナリオのおかげで発表ができた。

[学生のふり返しシート]

- ・今日は劇のネタ作り（話しのながれ、おち等）をグループで考えました。
1つの劇を作るのにけっこうな時間とか準備、リハーサルをへてできていると知りました。
- ・前回、どういう内容で話していたのか忘れてしまっていました。でも時間が過ぎていくと少しは思い出せたので良かったです。
- ・意外と早く進んでよかったです。
- ・リーダーをしたけど次回はもう少し効率良く進行できれば良いと思いました。
- ・話し合いの途中で疲れが出て、何をしゃべればいいのか分からなくなってしまいました。
- ・歩きながらどんな危険を招くかというのをネタにして、どんな内容にするかを考えたいなと思っています。どう笑いを交えてネタにするのかということ、これから頑張ってみようと思います。
- ・すんげきのれんしゅうをしました。来週はせりふをまちがえずにいえるとおもいます。
- ・今日は劇の配役やセリフ等を決めました。決めるのは楽だけど、いざやってみるとなかなか難しかったです。（とくにタイミングがつかめなくて）大変だけどがんばります。
- ・国会中に居眠りする議員に対して追及したり批判の声をかけたりする劇をします。
- ・学生時代以来にクレパスやクロッキーを使用し非常に懐かしさを感じました。又今回の制作活動や個々でチャレンジしたい事が多種多様に捉えられて居る事が印象的でした。
- ・アドリブってできる人とできない人がいるんだなと感じ、難しいものだと分かりました。
- ・自分のセリフは1つだけだったけどとても緊張しました。そしてその1つのセリフが覚

えられず、メンターの人に教えてもらいとても感謝しています。

- ちょっとつかれました。
- 人形劇を演じて手を挙げている間がつらかったけど最後までがんばった。
- 急ぎすぎて人物と小道具を逆にしてしまったことに息がつまっていまいそうだった。

[メンターの感想]

- 学生と一般学生で話しのつじつまが合っていないことが何度かあり、対話の難しさを感じた。グループワークが進んでいない時の見守り方や声かけが迷う。
- 一般学生は学校教育の中で様々な場面で鍛え抜かれているので、学生のスピードにフラストレーションを感じるのではないかと思う。
- グループに補聴器を使用している学生がいるが、声の大きさだけでなく声質によっても聞こえにくさがあると感じた。
- シナリオ作りが進まないで自分の意見を積極的に出してみた。一般学生やメンターが学生に気を遣って言いたいことが言えない状況は配慮なのかどうかがわからない。
- 一般学生の学びについて、双方の温度差、を実感した。学生と一緒に空間がしんどいと感じる一般学生がいることをわかっておく必要がある。
- 授業中に学生のスマホの通知音が鳴るので消してねと伝えた。嫌な顔をせずに聞いてくれた。
- 学生にとって難しい部分は他一般学生やメンターがサポートをして進めるが、それはそれで学生ができない事と向き合うことやチャレンジする機会を奪っている可能性があると思った。
- 1つの物を作り上げるという共通の目的があったので、話し合いや準備がとても意義のある時間になった。



〈テーマ5-1~2〉 「ライフストーリー」グループで練習をする

- 6回シリーズの初回は「ライフストーリーとは何か」「人生を語ることは歴史を語ること」
- 「自分の経験を語って人生の価値に気付く」について考えを深めた。
- 大切な人生を語り合うけど、その前にルールがあることを知る。

*聞く人：人の話は真剣に聞こう

話したくないことを無理に聞き出したりしない

人が話してくれたことは他のひとにぺらぺらしゃべらない

*語る人：語りたい事を語ろう

語りたくないことは、語らなくていいよ

いつでも「いやだ」と言ってもいいよ

*みんな：気分が悪くなったときは、がまんしないで中断しよう

- ・全員で津田先生のライフストーリーに耳を傾けた。先生と同じ経験をしたと感じた人、自分の人生と比べた人、人生を語れるかな？と不安に思った人、様々な思いで聞いたと想像する。
- ・語り合いの練習は学生とメンターが4グループに分かれて行った。
- ・一般学生とメンターの中で「語りたくないです」と津田先生に伝える人がいたので聞き役になるよう配慮した。
- ・「6歳くらいから今までの人生を曲線で表す」という宿題が出た。語ってもいいなと思うことと、語りたくないなと思うことをしっかり分けるために準備をしましょう、というもので人に見せたくないときはそれでよい。
保護者に手伝ってもらいながら記入をした人、グラフだけでなくその年齢の時のことを言葉で詳しく記入する人、記入をしたけど語るのには高校卒業後の内容のみと決めている人、グラフを書いたけど見せたくない人、と様々だった。
- ・あるグループに入ったが、全員が学校時代にいじめられた経験があった。思い出したくないことだが、いつの時代の出来事かをきちんと記憶しており、語ってくれた。



[学生のふり返しシート]

- ・宿題を出されてドキドキしています。
- ・今日の授業はちょっと頭に残る部分があり分からなくて、授業内容が分かっていなかったです。眠かったです。
- ・今日の授業は人によって苦手と言う人が多そうな授業でした。
- ・若い時のことを思い出してあらためて見つめ直すのもいいかもしれませんね。
- ・小さい時の自分の記憶など思い出せないと答えた。
- ・たぶんしゃべりたくない事の方が多いけど、働き始めた頃の話ならしゃべれます。
- ・昔の自分をふり返ってみて、そういえばあーいうこともあったとなつかしさとムカツキがよみがえってきましたが楽しかったです。
- ・ライフストーリーを語って気持ちがスッキリした。他の人の語りを聞いて共通の悩みがいくつかあった。
- ・ナイーブになるのかなと思いきや意外と和気あいあいとした雰囲気だった。
- ・自分で勇気を出してメンターさんに様々な話をした。
- ・学生から「〇〇さん（メンター）と話りたい」「知っている人と話りたい」と、希望があった。津田先生はできる限る配慮をして組み合わせを考えます、と学生に伝えた。

[メンターの感想]

- ・語りの練習（導入）は学生と一般学生を分けておこなったところは良いと思いました。
- ・「語る」ということはみんな理解していた。
- ・実際にいじめられた話を聞くと、来週からのサポートが少し不安になりました。
- ・語ってくれる内容が分からなかったのなんで？ どうして？ と聞くと、「どうして分かってくれないんだ」と少し興奮していた。
- ・思ったよりも自分の人生についてつつみ隠さず話してくれる姿が印象的でした。
- ・もう少し深くまで聞いていいのかどうか迷う。
- ・学生と一般学生の温度差はいまだにあると思うし、今日なんかは広がってしまった印象もある。
- ・いじめを受けたことを話してくれました。あまり話すことに対して抵抗はなさそうです。
- ・いつも気を遣っている学生は、やっぱり自分のことを中心には考えられないみたいです。

〈テーマ5-3~5〉 「ライフストーリー」 1対1で語り合う

- ・プログラムが始まって半分が過ぎたが、実は一般学生の名前を知らない、まだ話したことがない、という学生が多かった。メンターと違って一般学生とは授業中しか接していないし、グループワークで別グループだった場合は「はじめまして」となる。ペアが発表されると空いている部屋に移動をして語り合いはスタートした。2人が苦手な場合は4人グループになって語ることもOK。どのペアも緊張しながら始まった。
- ・学生から語るペアがほとんどで一般学生は真剣に耳を傾けた。一般学生は質問をしながら

ら話しを聞いていた。掘り下げて良い内容かどうかは学生の様子を見ながら話したと聞いた。ペアによっては途中で沈黙が続いたり、笑い声が聞こえたりと様々だった。次に一般学生が語ったが、その時間は意外と短かった。なぜかと言うと学生から質問が出ないからだ。学生に尋ねると、何を聞いたらいいかわからない、聞きたい事がない、興味がない、と答えた。話すことは得意だが相手の話を聞くのは苦手、相手の話を聞いた上で自分の考えを伝えるのは苦手、というのがよくわかった。

- ・3回語り合う中で、津田先生は学生の様子をみながらペアを組んだ。毎回希望を伝える学生もいた。学生から「次回は違う性別の人と語りたい、性別が違うと語り方が違ってくるかも」と鋭い意見があって、それらを考慮しながら毎回ペアが発表された。
- ・2回目が終わったあとに学生から「毎回同じことを話すのは疲れます」と意見が出たが3回目も行った。津田先生は相手の経験を引き出してほしい、深く掘り下げて聞くことはできるか、また掘り下げて語ることはできるか、学生と一般学生の学校生活は違う経験が多いが差異で学べることはないか、を学生に期待していた。
- ・一般学生は学生からいじめられた学校生活の話聞いたあとに、自らの楽しく充実した部活の話やその他の経験を語りにくい、又は語れないと話した。
- ・最後に2回目の宿題が出た。内容は「ライフストーリーを語り合っただこと」を文章にしてみましょう。

[学生のふり返しシート]

- ・最初は2人とも緊張してました。いままで苦労してきた事（人間関係等）や、今の生活とかこの自分をくらべて、どっちがよかったかなって話しになったけど、やっぱり今の方がいいなあって事になりました。自分と共感できることが多かったと思います。
- ・今まで生きてきた21年間の中にはこんなにもひどいことや楽しいことがあるのだと思いました。今まで生きてきたのしかったことといえば指で数えるほどしかないと思っていたけど、話しにしてみればいろんなところにも連れていってもらっているので学校生活を除けば充実していると思います。
- ・その人の過去を知ると自分よりしんどい事やつらい経験などあってすごく大変だったと思いました。
- ・もしよければ〇〇さん（メンター）とはなしたいなと思います。
- ・自分の人生のふり返しをメンターの1人と話し合い、いつも以上に答えられて納得出来ました。
- ・先週よりスムーズにしゃべれたのでよかったです。言葉で説明するより、文章で説明した方が楽だと思ったし、いい人間関係を作るんだったら手紙（メールとか）でも気持ちはつたわと思う。
- ・今日は〇〇さんのはなしをききました。れんあいのはなしもきけてよかったです。
- ・男性同士だと共感できることが多かったです。
- ・〇〇さん（異性メンター）とかたりました。きよりがちかくてきんちょうをしました。
- ・僕みたいに運の悪くてダメな人もいることが分かりました。
- ・中盤あたりから鉄道や美容と話しをして楽しかったです。

[メンターの感想]

*基本は学生と一般学生がペアで語り合ったが人数が足りない時はメンターも参加をした。

- ・ライフストーリーが KUPI プログラムの後半にできて良かったと思う。お互いにある程度の信頼関係、承認関係ができていたからこそライフストーリーについて対話がしやすかったのだと思う。
- ・苦手な他者との関わりについて挑戦する部分もあれば撤退する面もあるようで、それはそれで自然なことだが、少しでも対話的な空気にするにはという点に留意する必要があると思った。
- ・やさしさは時としてきびしさよりも冷たいというようなことを思うところがありました。
やさしすぎる支援は逆にディスパリーを生むというケースも往々にしてあることについて吟味したいと思います。
- ・3回の語り合いをそばから見ていて、会話を楽しめるようになっていと感じました。みんなの話を聞いているとしんどくなることがありました。
- ・自分の話を学生にわかるようにかみ砕いて話すことが難しいと感じた。
- ・1人の人の話しをゆっくり聞ける機会はなかなかないので、とても貴重な経験になりました。その中で感じたことは、完全に2人の世界になってしまうので難しさも感じた。意識して質問をしていかないと、結局表面的な話しになってしまうのではと思いました。

〈テーマ5-6〉 「ライフストーリー」 メンターとふり返る

- ・まず始めに宿題（語り合っただけを文章にしましょう）をやってきたかを確認。していない学生のために記入の時間を取った。
- ・全員で輪になって座り、ふり返りが始まった。輪に入らない学生がいたが、みんなの話は聞こえる距離。コミュニティボールを使いながら丁寧に対話をした。
輪に入らない学生は「もうすぐ KUPI が終わってしまうことが淋しくて参加したくない」とメンターに話していた。（授業を受けたら終わってしまうと考えたらしい）
- ・3回の語り合いを経験した感想、話してみてもうどうだったか、相手の話を聞いてどう思ったか、などを順番に話した。宿題で書いたことを読んでもいいし自由に話してもよい。質問がある人は聞いてよい。以下、学生の感想。
- ・若い時に嫌な事を経験したり失敗をしたら、その時は嫌だけでもっと大人になったときに役に立つと思った。今は不得意なことは逃げがちで対応がわからないが、嫌な状態でも頑張ってみようと思った。
- ・今までは人生を語ろうと思っても価値観が違うことが多かったが、今回は同じような環境や文化を持つ人と話せたので、ライフストーリーだけでなく経済や教育などの話ができてよかった。
- ・ライフストーリーを話していると、話しが混乱してくる。
- ・「3回語った感想を聞かせてね」と伝えるが、もう一度ライフストーリーを話す学生が数名いた。意味理解が難しい人、感想が思いつかない人など様々だ。
- ・一般学生の話聞いて自分もやってみようと思ったことを話す学生がいた。何度もその

話をしていたので、とても印象に残ったと思われる。又、将来したい事を話す学生もいた。趣味を活かしてやりたい事があるようだ。ライフストーリーを語ることによって過去をふり返し、そして今ある現状を把握し、先の未来を考える学生がいることが素晴らしいと感じた。未来の話が出た時に、将来はどこに住みたいか、一人暮らしをしたい、そのために掃除や料理の練習をやらなきゃいけない、などの話も出た。実際、週末は家の掃除をしている学生もいた。

- ・全員でふり返しをしたあとに4グループに分かれて最後のふり返しを行った。

[学生のふり返しシート]

- ・〇〇さん（一般学生）の話がきおくにのこりました。
- ・とうとう津田先生の授業がラストです。泣
- ・思った事はメモとかノートに思いつくまま書こうと思います（ぐちとか）
- ・自分は障害者というだけでさけられるのがとてもいやだなと思いました。自分の障害は目に見えないものというか、身内にしかわからないものしかないので、とても残念というか嫌だなとおもいました。先日バスに乗って障害者手帳を見せると「あなた、障害者じゃないやろ」と言われとてもかなしくなりました。
- ・〇〇くん（学生）はやりたい事が多くて、けど人に打ちあける事が苦手やけど打ちあける事ができれば〇〇くんは今後の人生が楽になるんじゃないかな？と思いました。
- ・未来のことについて話すというのは時に大事だと感じました。

[メンターの感想]

- ・今日はかなり丁寧に対話ができた。「言いたいことを言える」空気の変化を感じた。今までは自分の言いたいことを一方的に話す学生が多かったが、今は伝える相手を見て、言いたい事を話す、に変わってきたと感じる。
- ・いつも楽しそうに会話をしている学生が、人の話を聞いて質問をするのが苦手だと知り、意外だった。
- ・今日のふり返しは全体と小グループと両方をしたが、やはり全体（15名）だと緊張して話せない学生が多い。小グループで話す方が深く思いを聞くことができる。
- ・誘導にならないように、と考えながらその人の考えていることに干渉しないようにするのが難しいと感じました。話しの途中で内容をまとめるとその後の話がスムーズに進むが、その時に私の主観が入らないかな？と考える。
- ・話す内容をある程度考えていても、大人数（10名ほど）で対話をするのは難しいし、言いたいことや聞きたいことを十分に話すことができないと感じた。



〈テーマ6〉 ライフストーリーのまとめ、全体のふり返り

- ・最終回に初めて一般学生の感想を聞くことができた。

ライフストーリーの語り合いでは、支援学校のことは知らないで学校の様子を聞くことができた。僕の話も聞いてほしかった（質問をしてほしかった）。働いている人が多いので社会人の話が聞けた。こんなことを聞いたら傷つくかな？興味があるけど聞いてもいいのかな？と迷った。など、学生に気を遣いながら質問内容を吟味して対話をしてくれたと知った。その他は共通の内容が多かったのは友達の事、人間関係、いじめなど。受験や成績の話はピンときていない。

一番初めにライフストーリーの曲線を書いたが、書いたことによって語りをはめてしまうのではないか、線を先に書くのと内容を先に書くのとでは違ってくるのではないか、など深い考えを聞くことができた。

* 津田先生が最後に学生に尋ねたことは、

「学生と一般学生と一緒に学んだ意味はありましたか？」

「学び合った感覚はありますか？」

それに対して、

- ・通ってきた学校が違うから知らない世界を知った。
- ・考えが同じでもやり方が違うってことを知ることができた。
- ・学びを通して一緒にいる。 と、学生は答えた。

* 先生→学生ではなく、23名が互いに学び合う、横の情報交換が大切。

* マイナスの経験→プラスになる、それはとても意味があることです。

その場にいた全員が、それぞれの立場で、それぞれの思いでライフストーリーをはじめとする相互の学びを感じ取った。

[学生のふり返りシート] (プログラム全体の感想を含む)

- ・授業が終わってしまうのはさみしい。
- ・ライフストーリーの語り合いを学生同士で話してもよかった。
学生同士は近いようで遠い、遠いようで近い存在。
- ・この仲間は安心感がある。嬉しかった。
- ・授業は17時から始まるため職場を早退しないといけないので迷惑をかけた。もう少し遅く始まった方がよい。
- ・仕事が13時まであって少し昼寝をしてから授業に来たが、しんどい時があった。
- ・90分授業がしんどかったので休憩をはさんだ方がよい。
- ・今日で火曜日の授業は終わってしまうけど、とても意味のある授業だったし、さみしくなるけど、また本格的に学びたいと思いました。
- ・KUPIでの学びを今後の就職や人生に活用していきたいなと思いました。

[メンターの感想]

- ・学生と一般学生が共に学ぶことの意味を考えさせられた。
- ・学生から「ふり返りで思ったことがあっても話せない、話しだせない」と聞いた。
- ・メンターとして何ができるのかを考え続けた時間でした。そして学びや教育の意味も考え続けた時間でした。
- ・授業に対して肯定的に思っている学生が多く、それぞれに学びがあったのだと感じた。



＜一般学生に聞いてみた＞

- ・プログラムが半分ほど過ぎた頃、一般学生に困ったことはないですか？知的障害青年たちと学ぶ授業はどうですか？と尋ねたところ、2名の一般学生が話しを聞かせてくれた。
- ・気になることは、学生に遠慮がちになっていること、学生主体の授業運びになっていること、自分たちの学びはどこにあるのか？と答えてくれた。そしてメンターの役割がいまいち明確でないのが気になる、と話してくれた。
- ・授業中に気になることは学生のスマホ音が授業中に鳴ること。メールなどの受信音やスマホで写真を撮る時の音。学生のスマホ音についてはマナーモードを知らない学生がいたので、メンターが操作方法を教えて授業中は音が鳴らないように何度も練習をした。「電車やバスの中もマナーモードだよ」と教えた。
- ・私たちの学びは何だろう？この授業で何を学ぶのか？について常に考えると話した。「障害共生支援論」の内容を学ぶのであれば物足りないと感じるが、「知的障害青年と共に学び合う」ことを学びとするなら学んでいると話した。話しを聞いてから更に2か月間授業は続いた。考えは変わっただろうか。一般学生にとってこの授業の学びはどこにあったのかを聞いてみたい。最後に答えは出ただろうか？

文責：黒崎幸子

2) 水曜日プログラム

「よりよく生きるための科学と文化」

〈担当教員にお願いした文書〉

1. 水曜日プログラムの趣旨

- ・「よりよく生きるための科学と文化」を柱に、今期は人間と生活、社会、自然、文化といった視点で構成しました。
- ・神戸大学の教育学、哲学、音楽学、自然科学、心理学などを専門にする教員による特別授業として実施します。(協力いただく教員とその専門性については別紙)

2. プログラムに取り組む基本スタンス

- ・KUPI での学びは、「神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム」と名付けてるように、学生が楽しく学べることを大切にしていきたい。
- ・神戸大学の教員の協力を得て、大学での学びにふさわしく質的にレベルを落とすことなく学べるように工夫していただきたい。つまり、むずかしいことを障害のある学生にもわかりやすく教えるようにしていきたい。

3. 授業をしていただくにあたっての留意事項

- ①一人 3 回連続の授業を基本にします。(個々の事情により 2 回でも 1 回でも可)
- ②対象の学生が知的障害青年ということを配慮して、通常 1 回とする授業を 3 回ぐらいで進めるテンポを心がけてください。
- ③授業するにあたってはシラバスを作成してください。
シラバスは、メンターなど関係者の共通理解のツールでもあります。この事業の資料としても活用します。
- ④学生にわかりやすくするために、パワーポイントを使用するなど、視覚的にわかりやすくしてください。(ただし、文字にルビを打つことは必要ありません。)
- ⑤専門用語を使用する場合などは、できるだけわかりやすく解説するなど、工夫をお願いします。
- ⑥授業には基本、学生一人一人にメンターがつきます。メンターは授業が理解しやすいように丁寧に支援しますので、安心して協力を要請してください。

〈授業の概要と展開〉

(1) 人間と発達～自分のことを話し合おう！当事者研究のススメ～

赤木 和重 准教授

【授業科目名】 よりよく生きるための科学と文化	【曜日・時限】 後期・水曜日・5 限
【テーマ】 人間と発達「自分のことを話し合おう！ : <small>とうじしやけんきゅう</small> 当事者研究のススメ」	【先生】 赤木 和重
【授業をする日】 10 月 2 日 (水) 17:00～18 : 30 10 月 9 日 (水) 17:00～18 : 30 10 月 16 日 (水) 17:00～18 : 30	【場所】 A347

【授業の内容】

自分の困っていることや悩んでいることを、みんなで考えるという「**当事者研究**」をします。みんなで知恵を出しあいながら、悩みを解決したり、その悩みはどこからやってくるのかについて考えましょう。

【授業の計画】

10月2日（水）：お互いのことを知ろう
10月9日（水）：自分の悩みを研究する（その1）
10月16日（水）：自分の悩みを研究する（その2）

【みなさんへのメッセージ】

みんなで楽しく自分（たち）のことをかんがえましょう！

【授業の概要】

「コミュニケーション」「自分の悩みを研究する」を柱に話し合いをベースに授業が展開されました。学生の多くは「コミュニケーションが苦手」「人と話せるようになりたい」という悩みや願いが面接等でも出されていました。そこに焦点をあて、コミュニケーションの1つの手法としてYes and（相手の話に肯定=Yesして、つけくわえる=andという聞き方）を実際にやってみて学びました。それは、関西の「ノリ、ツッコミ」に通じるということで、さっそく吉本新喜劇風の実演し盛り上がりしました。

「自分の悩みを研究する」では、「当事者研究」がキーワードで、グループごとに自分の悩みを出し合い、それに名前をつけていきます。不思議と、悩みが軽くなる感じがして、みんなで「どうしたら解決できるか」を考えていきます。学生の中から「自分の悩みが出せた」「解決策が見えてきた」「赤木先生の授業は楽しい。あっという間に時間がすぎた。」という感想も出ました。

【授業の記録】

○「当事者研究」の進め方、手順を一度Tさんモデルのやってみる。

Tさんの悩み「やらなければならないことを先延ばしする」

「悩み」に名前を付けてみよう。

*いきなりその場で出てきた意見

・さきのぼし病　・ギリギリボーイ　・延長休　・滞之助

*グループで討議をしよう。

Bグループ 「ちょうちょギリギリ」

Cグループ 「延長忘れ」「延長魔」「ギリギリ現象」「ギリギリ男」「なまけ病」「さぼり病」

Aグループ 「スターウォーズ病」「ガリガリダラダくん」

本人が気に入ったのは？ 「延長休」

*「延長休」に決定！

○赤木先生 「研究する」には、テーマ設定が大事。タイトルを決めた次は研究の手法に入ります。

「どうしたら」系・・解決したい

「なぜ」 系・・原因を明らかにしたい

○練習として、Tさんの悩みを受けてグループ討議を。

テーマは「どうしたら「延長休」はなくなるのか」グループで討議

○グループ討議

Cグループ ・メモをしておく ・時間で区切りタイマーで知らせる

Aグループ ・ごほうびを用意する。終わったらシュークリームを。

ただし、2つ用意して 1つはおいしいの 1つはワサビ入り
終わらない場合はわさび入りにする

Cグループ ・メモをする 1つは締め切りメモ 1つはいつやるか計画メモ (いつ、何時に)

○学生のふりかえりで出た意見

・おもしろかった

・「動画をみてしまう」などの悩みを出せてよかった

・自分の悩みを出せた。自分で消化してきたが、他人の意見を聞き、何かしら解決策が見いだせた。焦点をあてて一つの解決をした

・今までかかえてきた不安を出せた

・悩みを出すことで解決策をみつけた

・声優が広がらないという自分の悩みをわかってもらえた。

・自分の仕事への悩みが、出すことでスッキリした。

・はっきり言えてスッキリした。

・赤木先生の授業は楽しみにしていた。時間があつという間にすぎた。大好きな授業で集中した

○メンターのふりかえりで出た意見

・Yさんがしきりたがる。よくしゃべる。悩みの名前を出し、解決策までできた。

思いついていないのに手を上げる人もいた。

・バランス良く、時間配分ができた。3人ともしゃべるのはいいけれど、切り上げるのがむずかしい。

・Oさんにどう加減していけばいいのか、迫りすぎると良くないし。

・Nさんは「関係ない」という感じだし、Tさんは「どんどん進めるタイプ」だし、

Uさんは、悩みの時にはガンガンくるし、集団としては難しかった。

・先回りして行ってしまうのがいいのか、話すのを待ってあげるのがいいのか。待っている間に勝手に言われたりで、むずかしい。

・私は自分の言葉で話すのを待つのがいいと思う。

【授業が終わって】

水曜日プログラムのトップバッターとしての難しさや、人間関係ができていない段階での授業だったが、さすがに赤木先生の魅力ある授業展開で学生もメンターも話しやすい雰囲気になった。授業のねらいの、コミュニケーション力をつけること、当事者研究に沿った展開でグループ討議も盛り上がった。この先の授業を予定している先生方の見学もあり、学生の様子や授業の進め方の参考になった。

メンターの感想にもあるように、学生の個性や学力、コミュニケーション力のわからない中での話し合いの難しさは感じつつも、上手にかかわってくれたので、一気に学生とメンターの中の壁がとれて親しくなる様子がうかがえた。



(2) 人間と宇宙

伊藤 真之 教授

【授業科目名】 よりよく生きるための科学と文化	【曜日・時限】 後期・水曜日・5限
【テーマ】 人間と宇宙	【先生】 いとう まさゆき 伊藤 真之
【授業をする日】 10月23日(水) 17:00~18:30 10月30日(水) 17:00~18:30	【場所】 A347
【授業の内容】 ① 現代科学が描く ^{えがく} 宇宙の姿について学ぶ。	

② 宇宙の中の生命、生命が住む天体、宇宙の中の人間、宇宙における人間の活動などについて学ぶ。
<p>【授業の計画】</p> <p>10月23日 宇宙の姿 <広がってゆく宇宙、^{ぎんが}銀河、星、^{わくせい}惑星></p> <p>10月30日 人間と宇宙 <宇宙の生命、人間と宇宙（宇宙の利用、宇宙の^{たんさ}探査）></p>
<p>【みなさんへのメッセージ】</p> <p>科学の^{はってん}発展によって、宇宙の理解が大きく深まりました。現代科学が^{えがく}描く宇宙の姿について学び、私たちにとっての意味について考えてみませんか。</p>

【授業の概要】

伊藤先生の授業「人間と宇宙」は、①宇宙の姿<広がってゆく宇宙、銀河、星、惑星>②人間と宇宙<宇宙の中の生命、生命が住む天体、宇宙の中の人間、宇宙における人間の活動>とさすがに学生には難しいテーマかなと思いましたが、とても熱心に学ぶ姿が印象的でした。興味のある学生からは質問がドンドン出て、それに身近なたとえ話しも交えて丁寧に答えてくださり興味深く学べました。とくに宇宙は膨張している話しや、50億年後には地球は太陽に飲み込まれる話、地球以外に生命体が存在するかの問いかけ、人類はすでに惑星探査にのりだしている現在科学の話など大学ならではの楽しい授業でした。もちろん付いていけず、居眠りする学生もいましたが、その姿にも大学の学びを感じました。

【授業の記録】

1回目 「現在科学が描く宇宙の姿について学ぶ」

授業展開と説明の一部（途中略）と、学生の質疑応答、感想を紹介する

1回目 10月23日 宇宙の姿<広がってゆく宇宙、銀河、星、惑星>

○まず、今日の授業で学ぶこと

宇宙のさまざまな天体 惑星、恒星（星）、銀河

宇宙は広がっている

宇宙には始まりがあった

生命を作る材料は星の中でつくられた

○宇宙のさまざまな天体の大きさ

天体	およその大きさ	
惑星（地球など）	10^7 m	恒星（太陽など） 10^9 m
恒星系（太陽系など）	10^{13} m	銀河 10^{20} m
銀河団	10^{23} m	「宇宙」 10^{27} m

○冥王星

他の惑星の軌道はほぼ同じ平面内にあるのに、冥王星の軌道は大きく傾いている（17度）
（略）

○大局的な宇宙一宇宙論

ハッブルの法則（E. Hubble 1929年）

遠方の銀河は地球からの距離と比例する速さで遠ざかっている

$$V = H_0 \cdot V \quad H_0 = \text{ハッブルの定数} \quad \text{現在の観測値} \quad 67.80 \pm 0.77 \text{ km/Mpc}$$

○大局的な宇宙

ハッブルの法則

⇒ 宇宙は時間とともに広がっている（膨張している）

⇒ 宇宙は始まりがあった（138億年前）

人間が知ることのできる範囲は限られている（138億年で光が届く距離）

*人は物をみる

離れていても物がわかる 光が伝わって目で見えるから

しかし、光が届くのに少し時間がかかる

同じように宇宙の星を見ると、光が届くまでに時間がかかる

人間が観測できる星は138

億年前が限度、それ以上のことは人間にはわからない。

*宇宙は膨張している

○KUP I 学生の質問

・なぜ爆発したのか？

伊藤：今の科学では説明できない

・138億年前は分からないということだが、その外が気になる

伊藤：人間にはわからない。ただ、科学者の信念として、その外も同じだと考えている

・それぞれの星の名前の由来は

伊藤 ギリシャ神話から付けたものです

○KUP I 学生のふりかえり（感想）

・難しすぎて入って来なかった。だけど冥王星の軌道がはずれている、歪んでいることを知った。

・星の大きさ 宇宙にある星の数がすごく多いとわかった。

・なんか宇宙は広すぎてわかんない

・途中眠くて爆睡していた ほとんど聞いていない

・星のことは好きで、ハワイで見た星を思い出した。マウナケア山で見た。

・宇宙のことは人間の進化する前から人類が知っていたのはすごい

・正直ねむかった。がんばって、宇宙と人間の関係を知ることができた。

・やっぱり何も考えていない。ビデオを見て、すごいと思った。ちょうちょ見たいに人間が見た範囲で残っている部分があったが、まだ先があると思った。

○メンターさんの意見

・Mさんの質問について、先生が聞き逃したのかスルーしたのかがあった。

しゃべれる2人が聞いてしまう。もう少し他の人にも聞くべきか。

・工夫して伝えようと言われていた。わかりやすい例えでよかったが、例えと本筋の話し
がずれることがあった。

- ・レジュメ的なものがあればよかった。
- ・視覚的な説明でよかった。
- ・発言量の多い子にペースを乱されることも。
- ・座学の授業でも質問がとんで盛り上がったのはよかった。
- ・専門的授業することにこだわられたのか？授業中に記入するプリントなどを用意するの
も必要

2回目 10月30日 <宇宙の中の生命、生命が住む天体、宇宙の中の人間、宇宙におけ
る人間の活動などについて学ぶ>

伊藤：「宇宙人はいると思いますか？」 約半数が挙手

- ・「本当かどうかはわからないけど、マンガで見た」

伊藤：「いるという人も、いないという人も、手を上げていないけど考えている人もいま
した。考えてみてください。」「宇宙人はどんな姿か、人間と同じ感じか、全然違うか、いない
と思う人も想像してみてください。」「

- ・「CDで作った物や、着ぐるみでしか見たことないし、信用できない。」
- ・「何となくいると思う」
- ・「多分アニメもみすぎ、小説のみすぎや」

伊藤：「地球以外にも何らかの生物がいる星があると思う人？」

ほとんどの人が手をあげる。

○地球のような星と宇宙の生命

地球以外に生命は存在するか？

「私たちはひとりぼっちか？」 Are we alone?

地球と同じような環境を持つ星（惑星）は他にあるか？

○地球環境の特徴

- ・水がある
- ・生命により大気中に酸素がつくられている（光合成）
- ・酸素からオゾン層が生成 ⇒ 有害な紫外線をさえぎっている
- ・惑星環境の存在 ⇒ 宇宙からの放射線をさえぎる . . .

○地球のような惑星を探す ー太陽系外惑星探査ー

- ・最初の発見 1995年 ペガサス座 51 番星
- ・探査方法 ドップラー効果を使う ・前をよこぎる 直接見る

(途中 略)

○Kepler-186f の発見 (2014年4月)

・kepler 衛星により、パピタブルゾーン内に、それまででもっとも地球に近い惑星 kepler-
186f が発見された。(質量は地球の約 1.1 倍、公転周期 130 日)

・太陽にあたる星は、太陽より小さく、温度が低い。このような星は、数が多く、比較的
近くに存在するため、今後の地球型惑星探査の重要な探査対象になる。

○第2の地球を探す ここまでのまとめ

- ・ 太陽以外の星の周囲の惑星の探査（太陽系外惑星探査）がすすんでいる
- ・ kepler 衛星などにより、生命が居住可能（液体の水が存在する可能性がある太陽系外惑星の探査が進んでゆくと期待される。

- ・ 水の存在の確認、生命の存在をどのように調べるかなどが課題となる

○最も近い星 プロクシマ・ケンタウリ b をまわる 地球に近い惑星の発見
(ヨーロッパ南天文台 2018 年 8 月)

- ・ 地球からの距離： 4.2 光年
- ・ 質量： 最も軽い場合で 地球の 1.27 倍
- ・ 公転周期： 11.2 日
- ・ 中心星との距離： 太陽—地球の約 1/20
- ・ 中心星： M型 赤色矮星
- ・ ハビタブルゾーン内に位置
- ・ 中心星からの強い X線 (地球の 400 倍)

○ブレークスルー・スターショット計画

- ・ 地球から最も近い星 (恒星) プロクシマ・ケンタウリ
(ケンタウルス座 α 星、α Cen) に、超小型宇宙船 (スターチップ) を送る計画
- ・ 支援者・参加者：Y・ミルナー、s・ホーキング、F ダイソン、S・パールマッター、Mr・リース、M・ザッカーバーグ他
- ・ 2016 年 4 月 発表
- ・ 切手大の宇宙船 1m程度の帆、地球からのレーザー光で加速、写真を撮影して地球に送信

○生命をやどす条件としての水

地球のような惑星 (第 2 の地球) 研究は急速に進んでいる

○氷でおおわれた太陽系の衛星の地下に海があり、生命が存在する可能性がある。

- ・ エンケラドス
- ・ エウロパ
- ・ 熱水噴出孔

○地球のような星と宇宙の生命

- ・ 太陽以外の星のまわりの惑星の探査が急速に進んでいる。
- ・ 私たちに一番近い星プロクシマケンタウリにも地球に似た惑星に似た惑星が発見された。
宇宙船を送る計画ブレークスルー・スターショットがある。
- ・ 太陽系の中の、氷におおわれた衛星などで、近に海があり、生命が誕生している可能性がある。探査の計画が進められている。

○質問

- ・ お月さんにくぼみが見えるけど何かな？

伊藤：月には穴があって中が大きなくぼみになっている。

- ・ 太陽電池というのはどんな役割をしているの？

伊藤：探索衛星のカギをにぎっている。

- ・ 火星の地面の下には生物がいるのか？

伊藤：火星の土をとって分析しようとしている。

- ・ 火星に移住はできるのか？

伊藤：地球に一番近い惑星。人間が火星に行くのに片道で 5 年はかかる。空気が薄く窒息す

る。テラホーミングといって、惑星の環境を変化させ、人類の住める星に改造する計画もある。火星の地下にドライアイスがたくさんあるので、二酸化酸素を爆発させて植物ができる環境にしようというテラホーミング作戦もある。月に基地を作る計画もある。

・太陽に地球がのみこまれたら、別の星に移住できないのか？

伊藤：人類が生き延びるために移住することもあるのでは。

映画ピクサーは「ワープ」する、空間を飛ぶという話。

・冥王星は軌道がずれているが、直撃する事はないのか？

伊藤：ぶつかることはない。軌道に規則性があるので。

・ガンダムの話でコロニーをつくって住む話があるが。

伊藤：宇宙ステーションを大きくするとできるでしょう。畑を作って人間が食べれるような空間をデザインすることができるかも。

・人間が進化するとどうなっていくのか？

伊藤：進化した人間がいろんな事がやれるので、人間から枝分かれしたそちらの方が強くなることもあるかもしれない。

<KUP I 学生の感想> (メンター交えて感想出し合うグループ討議)

・明と暗がある。太陽系が明るいと、地球温暖化と関係してくるのか。

難しい内容だったが、ドップラー効果についてわかった。

・50億年後に地球がのみこまれるのがこわい。

・全然わからなかった。

・いろんな質問ができ、たとえ話を聞いて、よかった。

・地球に近いよく似た惑星があつて、将来どこに住むのか、何が住んでるのか興味がわいた。

・全然わからなかった。頭が痛い。

・父がガンダム好きなので、話しをしたい。

・ドローンが進化してきたように、宇宙の開発も進化していき人類の夢が叶うのは楽しみ。

そのうち、ドローンで宇宙に行くことも、進化すればあるかな。規制や基準が大事になってくる。学生時代は授業らしい授業がなく期待していなかったが、ここではわからないことを学ぶことができる。知は力だと感じる。

・宇宙はけっこうスケールが大きいなと感じた。まだわからないことが多すぎる。だけど楽しかった。

・いろんなことが難しかった。ドップラー効果など言葉もむずかしい。

・どんな時代も生物が進化した。終わりが近づくと次の対策を立てることが大事だと思った。

<メンターの感想>

・プログラムの難しさを感じた。こういう援助がうれしいとか、援助がしてほしいということが経験できよかった。

・KUP I で一緒に学ぶ中で距離が近づいてきた。スムーズに質問したりしてくれるようになった。だけど、逆に距離感についていいのかなと思う面もある。

(距離感のことについて意見交換)

・「後ろから膝でコンコンする人がいて、本人は親しみの表現だと思うけど「いや」と言え

なかった。」どう考えるか？

→ 「いや」と感じたということ传达了方がいい。そうでないと、わからないことかもしれないし、「してもいいんだ」と思ってしまう。

・Tくんがうつ伏せたままになった。休憩時間がれば気持ちを切り替えられたかも。

→ 本人は聞いてはいた。ポーズの面もある。

・質問していない子や理解に苦しむ子がいた。授業は対話型と座学型とフィールドワークがある。学生に授業の受け方について知る機会を持ったらよかった。座学の場合、メモをとるとか、受け方について教えた方がいい。授業中にメンターが学生にしゃべるのはむずかしい。記録として残せるようなものを作る方がいい。

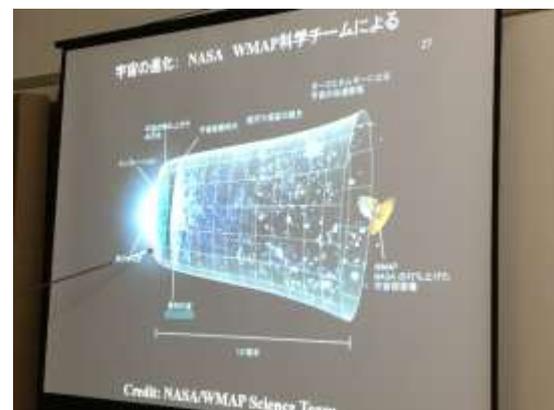
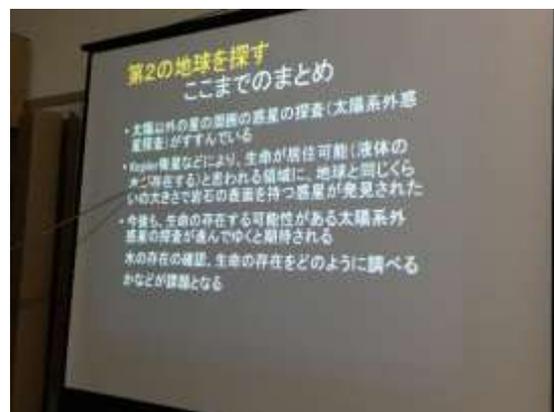
・2人ともねているのかどうか判断するのがむずかしい。Aさんはやる気があった。

Nさんは研究室に興味をもったようだ。見学や研究室での学習もあっていいかな。

・Tさんがスマホで写真をとるのや、Aさんがスマホで撮る音が変わっていたので気になった。スライドを印刷して配布するとかした方がいい。発言する人としらない人がいる。言えない子に対してどうアシストしたらいいのかむずかしい。

【授業が終わって】

宇宙についての学習で、確かに内容的にはむずかしかったが、大学で学んでいるという実感が持てる授業だった。想像以上に学生からの質問が出され、それに先生が丁寧に答えてくださる展開で飽きることがなかった。メンターからの意見もあったように分かりやすい資料提供や授業の進め方の工夫は今後検討が必要かと感じたが、スライドや映像も交えた授業で興味深い学びになった。先生の豊富な知識と宇宙に対する深い関心を元にどんな質問にも答えていただき、身近な生活に結び付けて理解ができた。



(3) 人間の発達 「赤ちゃんの月齢をあてる眼力を身につけよう」

渡部 昭男 教授

<p>【授業科目名】 よりよく生きるための科学と文化</p>	<p>【曜日・時限】 後期・水曜日・5限</p>
<p>【テーマ】 第6回目 人間の発達「赤ちゃんの月齢をあてる眼力を身につけよう」</p>	<p>【先生】 渡部 昭男</p>
<p>【授業をする日】 11月6日(水) 17:00~18:30</p>	<p>【場所】 A347</p>
<p>【授業の内容】 街で子どもと出会うことがあります。歩いていけば一歳をこえているな・・・などと判断しますが、あなたは抱っこされている赤ちゃんの月齢がわかりますか？ 人間の発達には法則性があると言われていました。今回は、一歳になる前の赤ちゃん(乳児期)の発達を学びます。</p>	
<p>【授業の計画】 5分：導入 30分：乳児期前半(0~6か月)の赤ちゃん 30分：乳児期後半(6~12か月)の赤ちゃん 15分：演習(枕草子「うつくしきもの」の赤ちゃんの月齢を推理する) 10分：ふりかえり</p>	
<p>【みなさんへのメッセージ】 講義が終わって街に出ると、電車やバスに乗っている赤ちゃんが何か月なのか、見抜くことができるようになっていくはずですよ。お楽しみに！</p>	

【授業の概要】

渡部先生の授業「人間の発達~赤ちゃんの月齢をあてる眼力を身につけよう~」は、1回きりの授業でしたが、乳児期前半と後半の発達についての専門的な内容を学生にもわかるように写真や映像を使った授業展開をされました。学生の中には0歳から1歳のアルバムを月齢ごとに作成されてきた家庭もあり、先生の準備されたスライドと呼応・共鳴して盛り上がりました。また、「葵徳川三代」の子どもが誕生するシーンを準備されて、その赤ちゃんの月齢を当てるクイズと清少納言の枕草子「うつくしきもの」の赤ちゃんの月齢を当てるクイズなど、学生がメンター生と一緒に考える授業にもなりました。学生の月齢を当てる視点が髪の毛の濃さや、身体のむっちり具合などで新鮮さを感じました。感想には、奇数月で階段状にぴよんと進む発達についての説明に対し「偶数月はどう変化するのか気になった。」という鋭い指摘もあり、驚かされました。

【授業の記録】

11月6日 担当は
渡部昭男（わたなべ あきお）です。

神戸大学 学際融合的発展プログラム

赤ちゃんの月齢げつれいをあてる
眼力めいり力を身につけよう

◎今日のまなび
その1
乳児期にゅうじき前半ぜんはん
の赤ちゃん
0～6か月げつ

赤ちゃんの発達はつたつは
階段かいだんを上の上るイメージ
田中豊人・杉原（1983）「スライド版 子どもの発達と診断」

乳児期前半		2つの法則				
月齢	1か月ころ	2か月ころ	3か月ころ	4か月ころ	5か月ころ	6、7か月ころ
静かな法則	発達第1の段階		発達第2の段階		発達第3の段階	
なま前	多動性		誕生	新しい力の		後半への



【1か月】

- ・顔がよこを向いている
- ・おや指がとじている

【3か月】

- ・顔がうえを向いている
- ・おや指がそとに出ている

【5か月】

- ・首がすわっている
- ・手を出してモノをとろうとする

◎演習えんじゆう その1
◎NHKドラマ 葵あおい
徳川三代とくがわさんだい
「葵あおい 徳川三代とくがわさんだい」
◎誕生たんじょうシーンの
月齢げつれいあてクイズ

- 渡部：赤ちゃんの頃のことを覚えていますか？
- ・ベビーカーの横のふわふわがお気に入り、好んでさわっていた。
 - ・0歳から1歳のアルバムを持ってきました。現在22歳です。
 - ・全く記憶にない。写真はアルバムでみた。どこでもころがっているイメージ。
 - ・産声をあげなかった。耳が聞こえていないかと思われた。泣くように強制的にされ、「オギャー」と息を吸って声を出したようだ。
 - ・小さい頃の記憶はあまりない。写真はあるけど。
 - ・記憶にない。写真で見ると、重たそうに抱っこされている。ラグビーボールのような持ち方をされていた。
 - ・覚えていない。飛行機に乗る時に泣いた。シートベルトがいやで泣いて、1時間ぐらい出発にかかり、出発時間がのびた。

- ・おまんじゅうみたいなほっぺをしていて、良くしゃべる子だった。今もですけど。
- ・赤ちゃんの頃のことは覚えていない。初めての言葉が「ママ」なのか「マンマ」なのかかわからない感じだったそう。
- ・あんまり記憶にない。よくTVを見ていたそう。小さい頃、楽しいところに行ったように覚えている。
- ・よく爺ちゃんがお茶会につれていってくれた。
- ・3歳ぐらいは覚えている。良く寝る子で、あまりにも静かで息してるのか確認したそう。
- ・保育園の運動会で、上唇を切って、水道で洗ってもらった。さみしがりやで誰かいないと眠れない子だった。
- ・幼い頃の記憶はあまりない。三田に住んでいたけど、4歳で川西に住んだ。
- ・若くて2才までの記憶がある。弟が生まれる前、お腹に居る時、病院に入ったことを覚えている。
- ・全くない。病弱で入退院をくりかえしていた。5歳ぐらいの記憶がある。変人で人とかかわらない子だった。

- 渡部：発達は階段登るようにピョンとのびる時期がある。1ヶ月から5ヶ月の発達
たとえば、「手」でみると1ヶ月だと親指が中に入っている。3ヶ月になると親指が外に出る。5ヶ月だと、指が広がる。「顔」の位置でみると、生まれた時はまっすぐ上を見ている。1ヶ月になると弓矢を引いているような感じになる。3ヶ月になると上を向いて手が広がる。5ヶ月で首がすわり、自由に動かせるようになる。

渡部：写真を見て、指と顔をよく見て何ヶ月の赤ちゃんかグループ討議を。

- ・3ヶ月だと思う。手がパーになる5ヶ月ではない。1ヶ月だと親指が中に入っているから、消去法で3ヶ月だ。
- ・3ヶ月。理由は1ヶ月だと毛が生えていない。こちらの写真は体の肉月がよく太っているので5ヶ月。それで、写真は3ヶ月。
- ・自分のアルバムと照らし合わせてみると、3ヶ月だ。親指の位置でわかる。

渡部：NHK大河ドラマ「葵徳川3代」のビデオで、赤ちゃんの誕生シーン3場面を見て、何ヶ月の赤ちゃんか当ててみてください。徳川三代誕生シーンをクイズ。

1 場面

- ・消去法で3ヶ月。1ヶ月だと横向いている。5ヶ月だと親指が出ているはず。
- ・時代劇はにせものだ。生まれた時で泣く3ヶ月の子だ。
- ・5ヶ月はでかいはず。3ヶ月だ。

2 場面

- ・5ヶ月と思う。毛がはえている。
- ・首が横を向いているので5ヶ月
- ・消去法で5ヶ月。首を支えていると1ヶ月だけど。
- ・アルバムでみると、僕の5ヶ月は「くまおどり」している。このときと一緒に5ヶ月。

3 場面 家光誕生場面 生後すぐの赤ちゃん

- ・首が横向いたままなので、1ヶ月
- ・首が横向いている。消去法で1ヶ月。
- ・左手をよくみると指を開いていない。親指が中に入っている。首が横を向いている。ので1ヶ月だ。

●渡部：次は6ヶ月から1歳までの発達

外 世 界 と の 結 び 目 を 増 や し て 自 由 に な っ て い く

乳 児 期 後 半 2 つ の 法 則

月齢	7か月ころ	8か月ころ	9か月ころ	10か月ころ	11か月ころ	12〜18か月ころ
静かな法則	発達段階		発達段階		発達段階	
活発な法則				誕生	新しい力の	幼児期への

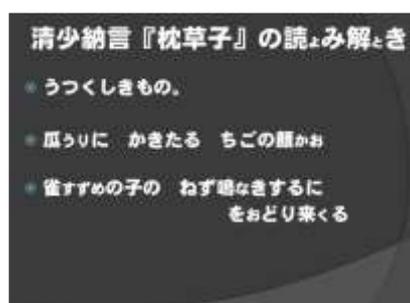
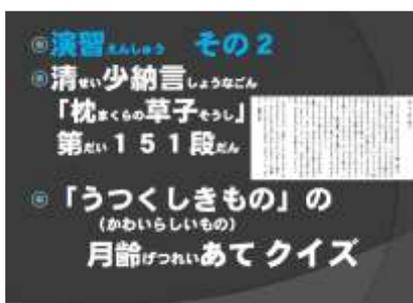


7ヶ月 アメを手にして、頭にハンカチをかけられると、アメを落としてハンカチをとる。つまり「結び目が一つ」

9ヶ月 アメを両方の手にして、頭にハンカチをかけられると、一つの手のアメを落としてもう一つの手にはアメ、もう一つのアメを落とした手でハンカチをとる。つまり「結び目が二つ」

11ヶ月 アメを両方の手にもって、頭にハンカチをかけられると、アメを両手にもったままで親指と人さし指で挟んでハンカチをとる。つまり「結び目が三つ」

●渡部：清少納言の枕草子より「うつくしきもの」を読み解く



- 二ふたつ三みつばかりなる ちごの、
- いそぎて はい来る道みちに、
- いと ちいさき塵ちりのありけるを
- 目めざとに見みつけて
- いと をおかしげなる および細にとらへえて
- 大人おとななどに 見せたる、
- いと うつくし。



今日から **赤ちゃん博士** はかせ！！

- ふりかえり
- おもしろかったですか

クイズ1 「二つ三つばかりなる・・・」とは、

昔は生まれた時が1歳で良く年は2歳と数えていたので、1・2歳になったばかりという意味になる。

生後7カ月は ズリズリ進む ズリばい

生後9カ月は ハイハイ

生後11ヶ月は 高ばい

・急いで行く感じがする 9ヶ月

・9ヶ月だと思ふ。急いでハイハイしてくる感じがする

・9ヶ月だと思ふ。11ヶ月だと手をつないで歩いているので、急いでいけるわけがない。

渡部：クイズ2 「いとちいさきもの・・・」とは？

・11ヶ月だと思ふ。僕のアルバムだと壁紙をやぶっているのが11ヶ月。指で挟んで破いていのがこの時期だと思ふ。

- ・7ヶ月はない。9ヶ月はつかめそうにない。11ヶ月だと思う。
- ・やっぱり11ヶ月 完全につまんでいる
- ・パス

●渡部：クイズ3「大人などに見せたる・・・」とは？

7ヶ月 手だし 9ヶ月 志向の指さし 11ヶ月 定位の指さし

7ヶ月 ひっくり返す 9ヶ月 ちらかす 11ヶ月 入れる、わたす、のせる

- ・11ヶ月 消去法で
- ・11ヶ月 大人などにみせる 相手の人に興味示さないとできない
- ・アルバムでみると11ヶ月でふうせんを持っている。12ヶ月でハブラシもって自分でたいたいる。だから、11ヶ月だと思う。

○学生ふりかえり（感想）

- ・自分の赤ちゃんの時を知った。渡部先生とアルバムをみながらできてよかった。11ヶ月で家の壁紙をやぶっている写真があった。
- ・月齢の後半はなぞなぞみたいだった。トリックもありヒントが出て細かくみると枕草紙のこともわかった。
- ・赤ちゃんの月齢がわかるということだったけど、なるほどとわかった。
- ・赤ちゃんのこと勉強になりました。
- ・赤ちゃんの乳児期前半、後半を学んだ。前半では顔の向きや親指の入り具合、首のすわりでわかる。時代劇の赤ちゃん月齢当てクイズはびっくりした。後半では11ヶ月で立てるのがわかった。
- ・1ヶ月で顔が横を向き、親指が内に入っている。3ヶ月で顔がまっすぐ向き、親指が外に出る。5ヶ月で首がすわり、手のゆびがひらくことなどを考えて答えることができた。
- ・正直むずかしい。赤ちゃんのことを知れたのはよかった。
- ・2ヶ月4ヶ月6ヶ月は1ヶ月3ヶ月5ヶ月とどっちがうのか？
- ・赤ん坊の時の記憶はあやふやだ。なつかしいものを思い出した。1ヶ月3ヶ月5ヶ月とずいぶん変わるものと思った。
- ・外見上で発達段階がわかるということを知った。勉強になった。歩くのも段階で個人差のあるのがわかった。より深く学びたい。学校時代の性教育で学んだことを思い出した。

○メンターのふりかえり

- ・Oさんにはむずかしい感じ。
- ・Aさんは少し風邪気味で気持ちのがのっていなかった。携帯を見る時間が多い。携帯の音でいえば、Iさんが鳴っていた。Mさんは音の消し方を聞いたのに覚える気がない。
- ・Tさんとメールして「どれぐらいの時期の写真がいますか？」と聞かれて、1歳までとお答えしたら、今日のためにアルバムを作ってくださいました。
- ・今日のためにアルバムを持参されて、「オー」となったのでうれしそうだった。身近なテーマで感情移入しやすく感想も深い。
- ・Iさんは先生の意図を汲み入れ答えることができる。正解がすぐに出てくるし、話し合

いは進まずだった。スマホ見ている、すぐに手を挙げて答えることができる。

- ・Uさんは終わってから意見を言うので、授業中に発言しないけど大丈夫かな。偶数月の発達について気になって言ったんだな。じっくり聞いて質問する人だ。笑う回数が増えてきた。
- ・今日は全体に興味ある内容で、写真見て楽しそうに取り組んでいた。
- ・身近なテーマで体験をつないでできてよかった。体験メインにあきずに参加できていた。自分の小さいころの体験をもっていたので学びやすい。
- ・Yさんは、彼の中に答えが出来ている。人の話を聞くのが苦手、そこが彼の課題。人の話しかぶせて言う、僕はこう思うと自分の意見が言える。
- Tさんは聴覚過敏で拍手がしんどい様子。ザワザワしてさわがしいところが難しい。人間関係がわかってきてペアリングがむずかしい。

【授業が終わって】

渡部先生の授業は1回きりだったが、とても学生にとっても興味深い入りやすい授業だった。しかも人間の発達についての基本的な理解を必要とする内容をクイズ形式で学生に取り組みやすく授業を組み立てられていただいた。特に徳川葵三代の赤ちゃん誕生シーンを取り上げて、準備していただいたことは驚きであり、さすがと感心した。

学生の中には自分の誕生から1歳までの写真を月齢ごとに揃えたアルバムを準備していただいた家庭もあり、大変授業を理解するうえで参考になった。また、学生も月齢を当てる際に、髪の毛の量や肉付きを見て判断をするなど、彼らなりの着眼点で意見を発表するなど、楽しい学びにもなった。

(4) 音楽が語る歴史 — 音楽文化史&音楽対話型鑑賞実践

大田 美佐子 准教授

【授業科目名】 よりよく生きるための科学と文化	【曜日・時限】 後期・水曜日・5限
【テーマ】 音楽文化 「音楽と対話してみよう」 音楽対話型鑑賞実践	【先生】 大田 美佐子
【授業をする日】 11月13日 (水) 17:00~18:30 11月20日 (水) 17:00~18:30 11月27日 (水) 17:00~18:30	【場所】 C101
【授業の内容】 みなさんには、好きな音楽がありますか？自分が好きな音楽には、どんな特徴がありますか？まずは、様々な音楽を感じて、観察してみましょう。そして、みんなで分かち合い、対話してみましょう。これは「対話型鑑賞」の音楽の実践の試みです。	

音楽を観察すると、どのような違いがわかるのでしょうか？その音楽はどうやってうまれ、どのように聞かれてきたのでしょうか。感じつつ、考えてみましょう。

【授業の計画】

- 11月13日(水)：好きな音楽はどんな音楽？
- 11月20日(水)：対話型鑑賞音楽編(その1) テーマ：自然
- 11月27日(水)：対話型鑑賞音楽編(その2) テーマ：感情

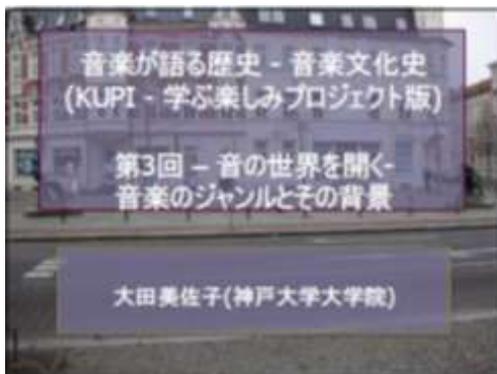
【みなさんへのメッセージ】

みんなで楽しく音楽を聴いて、感じて、観察してみましょう！

【授業の概要】

学生の好きな音楽を尋ねるところから入り、ウィーンフィルのニューイヤーコンサートに始まり、絵画と音楽の関係や、ワルツや行進曲、オペラに至るまで音楽の歴史的背景を紐解く内容を3回の授業で構成された。中には、学生の知っている曲「サトウキビ畑」や「翼をください」「Lemon」も一緒に歌うことも入れて対話的音楽鑑賞の試みになった。

【授業の記録】 (レジュメの一部を掲載する。)



ウィーン・フィルの ニューイヤーコンサートから

- ・演奏している人たちは**どんな人**? どんな服装をしているか? : 日本人? 正装?(普段着?)
- ・オーケストラの演奏者は**どこを見ているか**? (指揮者を見ている?)
- ・どんな**楽器**があるのか? (どんな響き聞こえる)
- ・**指揮者**はどのような動きをしているのか? (なぜ、指揮をしようとしていないのか?)
- ・**ワルツと行進曲**がなぜ演奏されるのか?

ワルツや行進曲はなぜ演奏されるのか?

- ・演奏会のプログラムには「**目的=理由**」がある。
- ・ヨハン・シュトラウスはウィーンを代表する「**芸術的**」かつ人々に親しまれる「**娯楽的**」作曲家である。
- ・ワルツも行進曲も人々の生活と結びつきが強い
聴くためだけでなく、「**踊り**」「**行進する**」ための音楽
= **実用音楽** (じつようおんがく)
- ・音楽は、「**音楽特有の言葉**」を持っている。

音楽という表現と背景 (多様)

音楽には**言葉**がないが、独自の表現がある。

楽器の音色
演奏者のスタイル (演奏会の目的・聴衆)
音楽のかたちとスタイル (伝えるために選ばれた)
様々な行進曲 (シュトラウス / ショスタコヴィチ)
歌の言葉を表現する (さとうきび畑)

⇒ 歌で**歴史**を記憶する
(文化的記憶 by アライダ・アスマン)



- ざわわ ざわわ ざわわ 広いさとうきび畑は / ざわわ ざわわ ざわわ かげが通りぬけるだけ
1. 今日も見渡す限りに 緑の波がうねる
 2. 昔、海の方から 船がやってきた
 3. あの日、鼓の雨に打たれ、父は死んでいった
 4. そして、私の生まれた日に 船の終わりが来た
 5. 風の音に途切れて消える 母の子守りの歌
 6. 知らないはずの父の手に抱かれる夢を見た
 7. 父の声を探しながら 走る畑の道
8. お父さんって 呼んでみたい お父さん、どこにいるの / この赤い糸の道に 敷き詰めてしまおう
 9. ざわわ ざわわ ざわわ けれど さとうきび畑は / ざわわ ざわわ ざわわ かげが通りぬけるだけ
 - 今日も見渡す限りに 緑の波がうねる
 10. ざわわ ざわわ ざわわ 忘れられない 恋しみが / ざわわ ざわわ ざわわ 涙のように 押し寄せる / 風よ 恋しみの歌を 海に 送ってほしい
 - 夏の日差しを なかで
 11. ざわわ ざわわ ざわわ 風に 涙は 乾いても / ざわわ ざわわ ざわわ この 恋しみは 消えない

**「歌」で歴史を考えてみよう、
感じてみましょう**

- ・歌は何を物語る?
- ・歌が運ぶもの (感情だけでなく、**歴史、記憶**)
- ・言葉と音楽との関係 (たとえば、「さとうきび畑」の8番/**伴奏**はどのような変化をするか?)

「さとうきび畑」にみる音楽の言葉

- ・**たんたん**と、感情をおさえて
- ・A-B-A **三部形式** F-Dur
- ・**繰り返しの意味**
- ：ざわわ 66回 (さとうきびの揺れる音?)
- ：叙事的 (cf. 感情をおさえて / 叙情的)
- ：オリジナル版で9番の伴奏に出てくる**ブルー・ノート** (**進駐軍の暗示**)

では、音楽は、「**笑い**」を
どう表現するでしょうか?

「**笑い**」はどう仕掛けられるか?
オペレッタ = 喜歌劇
ヨハン・シュトラウス《こもり》の一場面

登場人物: アイゼンシュタイン(夫) / ロザリンデ(妻)
アデーレ(お手伝いさん)

状況: 三人とも、内緒でパーティーに行こうとしている。

内容: 自分の本当の気持ちを隠す
音楽特有の言葉で、「**笑い**」はどのように表現されているでしょうか?

授業の一部を紹介する。

1回目 11月13日 「音楽と対話してみよう」

大田：「対話型鑑賞」の授業です。音楽が変化した形をみんなで楽しめるものにしたい。

アンケートをみると、それぞれ好きな音楽がある。新しい世界、聴いたことのない世界をしりましょう。自分の中に記憶としてもあると思うし、その経験によってもちがう。これから聴く音楽が新しいかどうかはそれぞれだと思う。

第1回目は「音の世界を開く」です。聴いてみましょう！

1曲目

ウィーンフィルハーモニーオーケストラの「ニューイヤーコンサート」より
ヨハンシュトラウスの「美しく青きドナウ」

2曲目

行進曲「ラディク将軍」

大田：何が聞こえたか。何が見えたか。どんな気分か。などグループで話し合っ

- ・あんまり聴かない曲。
- ・よかったです。
- ・運動会で流れる曲 いろんな楽器がでてきた。
- ・手拍子の大小 楽しいけどねむくなった。
- ・ねむくなった。波のようで、ゆるやかなイメージがした。行進曲なのにゆるやかな感じ。
- ・ゆったりした曲が多かった。テンションが上がった。しっかり観客が聴いていた。指揮者は最後まで仕事してるのかな。泊まっていた。
- ・2曲目の方が盛り上がった感じ。
- ・やっぱりクラシックはおだやかで、おとなしい。心が落ち着く。2曲目が盛り上がった。
- ・舞踏会で踊る雰囲気

大田：クラシックて何？クラシックは「古典」という意味。

では、この絵を見てください。音楽と絵と私たちの関係はどうちがうのか？

この絵はタイトルが「酒、女、音楽」とそのまま絵はその場でみる

音楽は何かイメージしたり、音の記憶 絵は直線的、音楽は聴いてどう感じるか

名曲の背景にある世界

作曲家はどう聴かれているのか気にする。絵は演奏者がいない、解釈は見る人による。

120年前の音楽はどんなイメージがあるか

音の風景を想像してみましょう。

同じ曲を別の音楽と比べて聴くと、どんな感じがしたか？19世紀に演奏された歴史的な録音を聴いてください。

「音の風景」を聴く 革命の時代の曲 靴の音 どんな風景が浮かびますか

- ・暗い所で足ならして行進している 国が危機でたいへんで、学生が行進しているのを想像できる

大田：「美しき青きドナウ」を聴いてどうか

ヨハンシュトラウスのサロン風景

エキゾチックなシュトラウス像 時代によってとらえ方がちがう 1つではない

絵の中の楽譜は踊っている。人々の中にある音楽とその仕掛けがある。

(途中 略)

大田：「さとうきび畑」の曲を聴いてください。

- ・沖縄の戦争の曲 8番だけがそれまでと違う。

大田：よく知ってるね。どうやって作られたのかな？

- ・何かを守るため

大田：楽譜のはじめに何て書いてあるかな？ だんだんと感情抑えてと書いてありますね。

- ・暗い感じ

大田：11番まである 最後まで聴いてもらったが、この曲は作曲家寺島さんの娘に特別に歌ってもらったもの。「ブルーノート」に書いてあります。

大田：これは誰が歌っているの？

- ・戦争で父を失った子ども

大田：1番から7番までと8番とはどう違うの？

- ・全然ちがう、悲しい曲に。父を呼んでみたい

大田：9番からだんだんと落ち着いてくるが、8番だけ自分の心を吐きだす感じがするね。

2017年 さとうきび畑から50年 沖縄が米国だったころ、寺島がさとうきび畑の風景を見て「きれいですね」と言ったら「このさとうきび畑の下にはたくさんの亡きがらがある」と聞いて、それから10年かかって、「ざわわ」に行きついた。祈りのような子守唄のように歌っている。

「ざわわ」という言葉が66回でてくる 感情を押さえて7番まで歌い、8番で少しジャズの曲調が入る。歌には歴史が刻まれていること、それを追体験ができる 表現することで共有して記憶や歴史、時をこえて分かち合うことができる。

○ふりかえり

ウィーンフィルハーモニーのヨハンシュトラウスの曲 「ざわわ」の曲について感想を出し合ってください。

○学生の感想

- ・最初はワルツ 貴婦人の踊る様子を想像した 次のジャズ風のワルツは赤いドレスで踊るスペインみたい。それぞれ楽しかった。「さとうきび畑」はおもしろかった。それはIさんが大きなあくびをしたから
- ・最初の曲はウィーンでコンサートしているところ 後半はけっこう悲しい歌で、8番がちがうのを知っていた。思い出した。
- ・前半の軍隊行進曲は野球のようで、投げる打つポーズを思い浮かべた。後半は腹式呼吸で歌った。指揮棒の手が震わせていたのがビブラートだと知った。
- ・ワルツはパートごとのイメージや舞台のイメージがついた さとうきび畑は今の戦争を知らない私たちに本当の戦争を教えている
- ・さわやかな感じ
- ・さとうきび畑は歌詩が多すぎてどこを歌っているのかわからなくなる。ゆるやかな歌でねむくなりそうだった。
- ・音楽は時代と歌詩によって意味がちがう 音楽の時代背景と一致しているところがわかった。時代や気持ちを忠実に表現している
- ・ウィーンに父と母が言ったことがある
- ・楽譜の使い方と現在風にできると知った。戦争の歌はけっこうイメージが伝わってきた。
(途中 略)

大田：「つばさを下さい」「レモン」を歌いましょう。

大田：音楽は独自の形をもっている。音楽を聞いた時にどんな仕掛けがあるのかを考える。

いつの時代か聴き比べてみる。どんな演奏か聴く。いつの時代の音楽か考えると、音楽は広がりがあることがわかる。

音楽を聴いた時に、どんな仕掛けがあるのかを考え、いつの時代か、聴き比べてどんな演奏かと考えると音楽は広がりがある。音楽史の前提になる。

「Lemon」はむずかしいけど、自分で表現することでアプローチできる。自分で歌うことで楽しみは倍増する。

○学生のふりかえりが出た感想

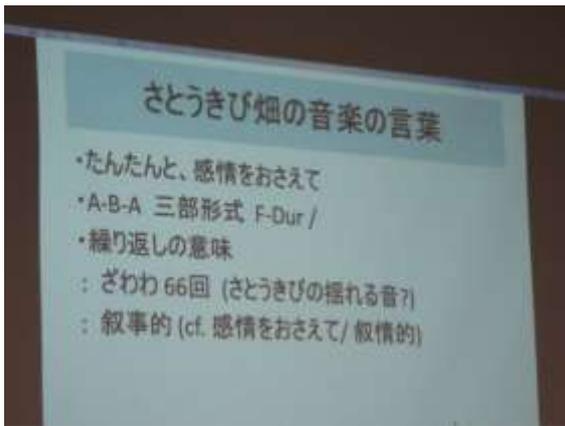
- ・音楽には表、裏がある。「ハイそれまでよ」は途中で急変する。
- ・オペレッタはおもしろかった。だんなが手をひっぱる場面があり、オペラは一度見に行きたい。
- ・キリスト教 カトリック 歴史が好き フランシスコ教皇が広島、長崎にきた。
- ・演劇で音楽をやっていた。音楽と演劇の表現する
- ・洋楽を広めたのが軍楽隊だとしり、軍楽隊の存在を初めて知った。
- ・知っているのがあったので歌えてよかった。
- ・外国の教会に行ったことがある。ねむくなった。歌えてよかった。
- ・途中ねむくなった。集中がとぎれた。レモンは知らなかった。
- ・行進曲は選抜や消防団の行進曲のイメージがした。
フィギアスケートで流れる曲がクラシックのイメージ
- ・最初の絵 晩さん会の絵
- ・「翼をください」は歌ったことがある。

○メンターのふりかえりが出た意見

- ・「よりよく生きる・・・」のテーマからすれば、彼らが人生生きていく上で音楽を楽しむと思うけど、この授業はテーマとあまり趣旨が合っているのかなと思った。
- ・この授業でふれた視点で「おもしろい」と思って広がることもあるのでは。レモンは楽しかったようだ。歴史的背景よりも印象の方が強いのではないか
- ・誰か一人でも残る者があれば、タイトルとちがってもいいのでは。大学に来てむずかしい音楽を聴いた、「さとうきび畑」を歌ったという経験だけでもいいのでは。
- ・むずかしいことです。音楽好きな人が多くて楽しめたのでは。先生の質問の意図がつかみきれないところがあった。
- ・KUP Iの意図を明確にする必要がある。一緒に学ぶことなのか？「よりよく・・・」は実生活に生きることだけなのか？大学で学ぶことは「知る」ことにある。いったい、何のためにKUP Iがあるのか？
- ・授業の内容は何でもいいのでは。あらたな視点や見方をすること、思ったことを交流できたらKUP I学生と対話できたらいいのでは。

【授業が終わって】

対話型音楽鑑賞というものがどういうものかはじめはわからずに授業が展開したが、学生の音楽を聴いたままの感想をもとに、音楽のもつ時代背景や歴史を理解する授業展開で、徐々に引き込まれていった。交響楽や軍楽隊による行進曲、古典と言われる曲から現在の曲まで幅広く鑑賞しながら、時には一緒に歌い、楽しく授業が進んだ。「サトウキビ畑」の曲がどうして生まれたのか、8番で曲のテンポも歌詞も変化するところをよく知っている学生がいたり、オペラのように途中で大きな曲調の変化をみせる音楽を聴いて驚いたりと変化に富んだ音楽の世界を知ることができた。



(5) 表現者としての人間 「音楽がもたらす効果を体験しよう！音楽療法の紹介」

岡崎 香奈 准教授

【授業科目名】 よりよく生きるための科学と文化	【曜日・時限】 後期・水曜日・5限
【テーマ】 表現者としての人間「音楽がもたらす効果を体験しよう！音楽療法の紹介」	【先生】 岡崎 香奈
【授業をする日】 12月4日(水) 17:00~18:30 12月11日(水) 17:00~18:30 12月18日(水) 17:00~18:30	【場所】 C101
【授業の内容】 私たちは、なぜ歌をうたったり、楽器を演奏したり、踊ったりするのでしょうか。音や音楽がもたらす効果に気づき、それを活用する仕事「音楽療法(おんがくりょうほう)」について勉強してみましよう。	
【授業の計画】 12月4日(水): 人と一緒に音楽する 12月11日(水): 色々な楽器を体験する 12月18日(水): 音楽の効果を活用する	
【みなさんへのメッセージ】 楽器や歌を体験しながら、音楽のもつ効果について考えましよう。	

【授業の概要】

座学中心の授業が続く中で、身体を動かしたり、楽器を演奏したりと活動的な音楽を体験しながら、音楽のもたらす効果を体験する授業。3回の予定が先生の体調不良で2回の実施

になった。

一緒に体を動かして音楽を楽しむ、楽器を使って音楽を楽しむ、トーンチャイムを使用してコミュニケーションをとるなど、授業に変化もあり学生にとっては入りやすい構成になっている。

【授業の記録】

1回目 12月4日(水)

岡崎：音楽療法についての紹介 音楽療法って知っていますか？

- ・学校時代に聞いて知っている。重度の人対象というイメージ
- ・職場(老人ホー)に来てくれて知っている

岡崎：音楽療法の紹介(プリント)

自己紹介します。私は嵐というジャニーズのグループが大好き 来年解散と聞いてショック。デビュー以来応援しています。

こんな風に日常聞いている音楽や好きな音楽を紹介してください。

- ・Jポップが好きです。喜怒哀楽を表現する音楽。怒っているのか、悲しいのかずれがある音楽 忌野清志郎とか歌詞の内容が悲しい曲とか
- ・アニメソング 特撮の主題歌 デジモンが好き
「バタフライ」という曲 デジモンアドベンチャーのオープニングの曲
ほかには一応動揺も好き お母さんと一緒に「星空カーニバル」
- ・アニメ好き 忍玉乱太郎 ジャニーズが歌っている曲
- ・アニメ好き お母さんと一緒に「どんな色が好き」「虹の向こうに」
「だんご三兄弟」 20年前の林しげもり時代
2004年からアメリカに行って、リアルタイムで見ていたドラえものの曲が好き
サンリオの曲も好き 8年前キティちゃんの曲も好き 今はユウチューブ
- ・倉木麻衣 髭男 ヘイセイジャンプ FNS 歌謡祭が好き
- ・ゆず 米津さん 元気な歌が好き
- ・あまり聞かない 音楽にトラウマがある 先生に「音痴」と言われたことから
- ・パス
- ・島倉千代子 中島みゆきの「糸」「時代」 槇原敬之 尾崎カナ
大音量で聞くのが好き
- ・近所迷惑じゃないですか 家族に叱られませんか
- ・耳がおかしくならないか イヤホンつけたら
- ・補聴器をつけて聞く 車の中だとマックス
- ・いろいろ聞いている アニソンとか 「パプリカ」とか TV やスマホで
- ・とくにないけど ワンオクロック キートーク
たまに歌詞聞いて人の人生がわかる はげまされたり、そんなこともあるかな
- ・たくさんある グレイが好き
- ・洋楽 何言ってるかわからんけど曲が好き
- ・Jポップ ロックが多い 椎名林檎
- ・じめじめして明日死ぬような曲 ブルーグラスという曲

西岡きょうこ ビートルズ グレイも好き

・売れる法則を知った歌が好き 「愛は勝つ」 ゴールデンボンバー 前の曲調

岡崎：好きな曲を紹介してどう感じましたか？

・AKB48 僕はカフオンをたたいています。持ってきていいですか？

岡崎：その人について違う面を知れたでしょうか？他の人の何かがわかりましたか？

・人間に快感があることを知る。「なるほど」と思う 他の面がわかる 音楽トリビアがわかる 楽しかったか、つまらなかったか？

・共感することも 同じだと感じた 新しい発見もある コミュニケーションツールにもなる

○音楽コーナーに移動し、音と足ふみで表現

手拍子 動作つけ (Nさん入れず)「準備できたら入る？」と声掛け

○トーンチャイム

・一人ずつ音を届ける ・アイコンタクトで伝える ・Nさん入る ピアノの音が入る

○トーンキャッチ

音の違いは？ 低い音 大きい音 「さくら さくら」の音も入れて

○声を出したい 楽器をさわりたい → 楽器にさわりながら声を出す

・小さい音から だんだん大きな声に ・声「エーオ」「ハ ハ ハ」など

岡崎：楽譜のない音楽をみんなで作っていったって体験をした

音や体で表現することがどんなにたいへんだったかということです。

○KUPI 学生のふりかえり

・足のタップなどいろいろ動きがあり、声を出していておもしろかった

楽器がいろいろで、低い音もあった

・自己紹介のこといろいろ言ってみただけで3代目ブラザーズ 君の瞳の恋してる

岡崎先生にカフオン持ってきていいと言われた

楽符のない曲 トーンチャイムハ誰に当てるかむずかしかった Nさんに送った

・はじめて身体をつかって自分の名前を言った トーンキャッチでコミュニケーションが取れた すべての人にふった カエルの音のようで むずかしかった、でも楽しかった

・身体で表現するのに手も足も追いつかなくて

・オレは最初自己紹介で

音楽の好みとかそれぞれとらえ方がい、考え方が様々だと思った 音楽がトラウマで体を使うのはどうしたらいいのかなと、苦手だ。

・頭が痛かった。いつもの調子が出なくて ボーとしていた 足も上がらなかった

前から気になっていた授業で何するのか期待していた

・途中 トーンキャッチ楽しかった 誰を選ぶのがむずかしい 好きな曲を紹介した

・音楽を聴くのはいいけど授業となるとむずかしい。参加はでききた。ほぼ全部に

・自己紹介でこの曲聞いているんやとか、共通点がわかった。身体を動かすのはむずかしい。トーンキャッチは楽しかった。

・トーンチャイムをやっていて松本君がしつこく何回もしてきたので、うんざりした。

一気打ちで笑ってみんなにうけてうれしかった。

・久しぶりの音楽だった。それぞれの聞いている曲がわかった。何となく聞いている曲も

あり、よかった。ピアノの音が入り、リズムよくキャッチできた。

2回目 12月11日(水)

(前の授業のふりかえり)

- ・トーンチャイムをバランスよくいろいろな人に当てることができた。
- ・中学校から支援学校まで使ったことがあるのでなれていた
- ・トーンキャッチでコミュニケーションがとれた
- ・同じです
- ・音だけでのコミュニケーションでしたね
- ・なつかしい トーンチャイムは高校時代にやっていたので

学校のチャイムのように音が似ていた

岡崎：学校の音に聞こえた 実際、4つでチャイムの音は作れるよ。音から思い出すこともあるよね。

- ・好きな曲を紹介して 聞いたことのある曲だとか、こういう曲が好きなんだとかわかった。

岡崎：嵐やアニソン、洋楽などいろいろとこういう曲をこの人は聞いているのかという情報が入った。打楽器や民族音楽みたいな音もあったね。自分の楽器を持ってきた人？

○丸く円になってすわる

トーンチャイムでトーンキャッチ

- ・誰に来るかわからないのがミステリーだ

岡崎：決まっていないのがミステリアスやね

○順番が来たら

トーンチャイムを同じ人にくりかえすとか、はげしく振るとか変化をつけることも

○一人が真ん中に入って指揮者のように当てていく

同じ人にくり返し当てることも

○ふりかえり

- ・音楽2回目 トーンチャイム2回目 楽しかった
シンバル、タンバリン、両方楽しかった 弟に大学に来てほしかったので、来てくれてうれしかった。指揮面白かった。
- ・ジャンベをもっていない フリースタイルのグループ活動のコーナーでフリースタイルでできた。指揮はふり、幅はおまかせで腰を使って振った。
- ・カフォン持ってきて楽しかった。もってきてよかった。みんなと楽器合わせてよかった。
- ・音楽やっている人、楽器持っている人
指揮はもう少しわかりやすくした方がよかった。みんな楽しく指揮できた。
- ・トーンチャイム楽しかったけど バンド作ったら楽しかった。
- ・指揮は何が何かわからなくなった。制約がないからこそむずかしい。どのタイミングで入るのかとまどった。
- ・トーンチャイムも指揮もした。足とか腕とか使ってやった。全身でやった。やりすぎたかなと。
- ・ねむたい。ボーとしていて話を聞いていた。何とかみんなの様子がわかった。

- ・楽しかった。楽器も前よりも楽しかった。自由の方がやりやすいかも。
- ・トーンチャイムも楽器もそこそこやれた。少しうるさかったので少ししんどくなることも。

○メンターの意見

- ・音楽の楽しくできた。
- ・机はなくてもいいのでは
- ・座学でなく、アレンジもあってよかった。
- ・即興音楽の良さが発揮された。

【授業を終わって】

学生にとっては、一番なじみやすい動きのある授業で楽しく参加できた。3回の予定が2回になったのは残念だった。2回目の授業は見学者も多くやや緊張する場面だったが、楽しんで取り組んでいた。楽器を使ってグループで演奏したり、即興的に音楽を楽しんでいた。

トーンチャイムを使っての「トーンキャッチ」は、ゲームのような感覚で相手とのコミュニケーションがとれた。音楽療法について、体験的に学ぶことができていた。

(6)「よりよく生きるためのてつがく」

稲原 美苗 准教授

【授業科目名】 よりよく生きるためのてつがく	【曜日・時限】 後期・水曜日・5限
【テーマ】 自己と他者「いろいろな差異や関係性について考えよう。」	【先生】 稲原 美苗
【授業をする日】 1月8日(水) 17:00~18:30 1月15日(水) 17:00~18:30 1月22日(水) 17:00~18:30	【場所】 A347
【授業の内容】 ほんの少しだけ自分の周囲のことに目を向けてみませんか。自己と他者、こころとからだの関係について考えていきます。みんなでゆっくり対話をしながら、「みんなが異なっても良い」共生社会について考えましょう。	

【授業の計画】

1月8日（水）：自分とは何か

1月15日（水）：人間の多^{たようせい}様性とは

1月22日（水）：対^{たいわけいしき}話形式で考える

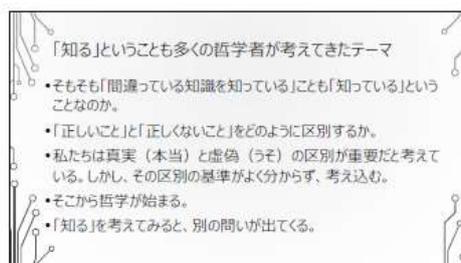
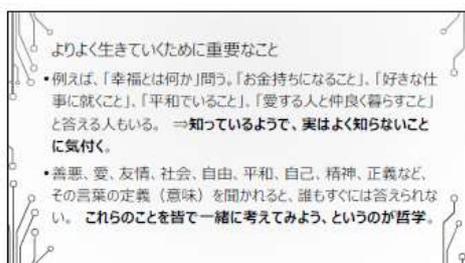
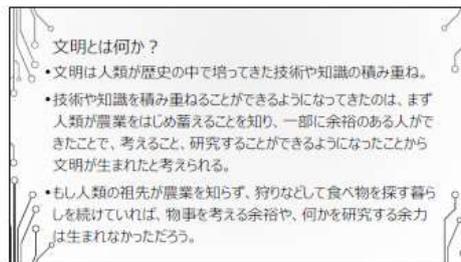
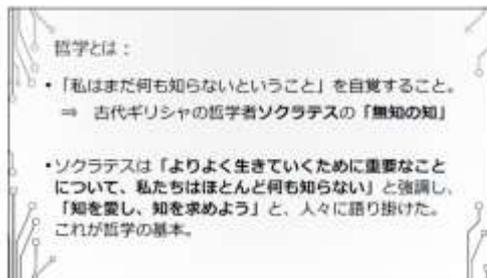
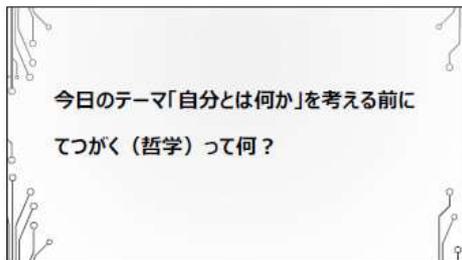
【みなさんへのメッセージ】

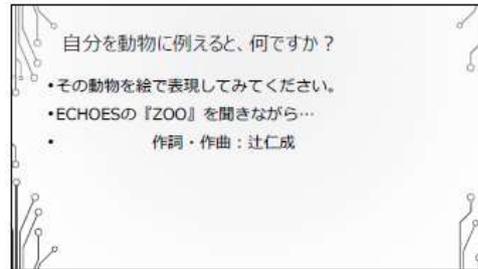
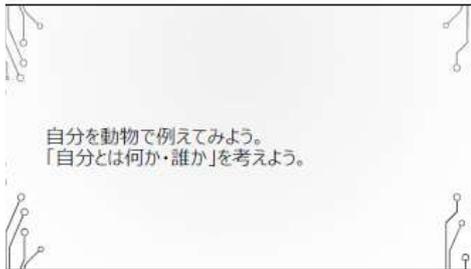
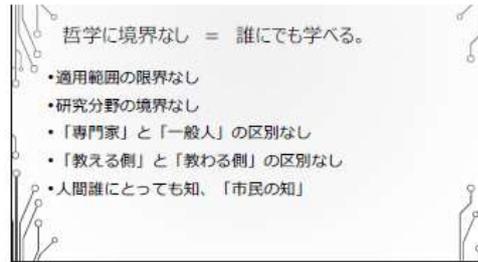
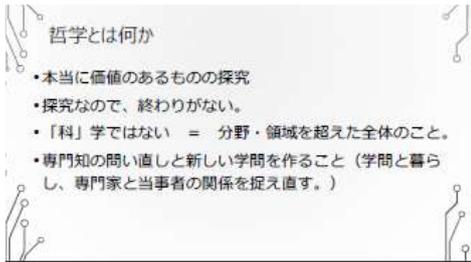
みんなでゆっくり楽しく考えましょう。

【授業の概要】

哲学という一見難しい授業を、1回目は「自分とは何か」をテーマに「自分を動物に例えてみよう」という切り口で、2回目は「人間の多様性とは」をテーマに「自分を植物、花に例えてみよう」と、花の絵を描くことで表現するなどわかりやすく工夫された授業になった。3回目は前回までをふまえて「自分ってどんな人なのか」を3つの文に書き、また「ふつう」ということについて好きな色にも例えながら考える授業になった。ねらいとしては対話形式の授業を構想されていたが、やや対話になりづらい感じがした。

【授業の記録】





1回目 「自分とは何か」

稲原：「哲学って何？」

「私はまだ何も知らない」ことを自覚する

「無知の知」知らないことを知ること

文明とはどうして生まれたのか？

農業が生まれたから、植物が育つまで期間があるので余裕ができた。そこで、研究したり、考えたりするようになった。それが文明のはじまり。

稲原：「幸せって何？」

- 気持ちがいいこと うれしい生活が続くこと
- 平凡な日々を過ごすこと。戦争とか災害がないこと。

稲原：このように、一緒に考えようとするのが哲学

哲学とは、終わりが無い、科学ではない。専門「知」の問い直しである。

稲原：それでは、自分のことを「動物」に例えると何かな？

ちなみに、私は「ペンギン」です。友だちが付けてくれた。とべない、でも海の中では泳げる。いつも違う方法をみつけるところなどが「ペンギン」です。

- 僕は「犬」です。追いかける、顔芸する、しゃべる、顔が少し長い、特定の人に対し良く話をするところかな。
- ハイエナ。食べ残ったものを食べる。食欲があるから。
- ねずみ。ものをよくかじるから。
- オオカミ男。自分が気に入らない物や目の前で急なことが起こるとパニックになり、物にぶつかる場所があるから。男とつけたのは、人間が動物になったようなものだから。
- サル。考えながら動くから。頭よりも身体が先に動くから。
- カラス。論理的に考えるところ。カラスは理論的だから。
- ハムスター。体が小さく、チョコチョコと動く。元気で全力で食べる場所。
- ねずみ。小さいし、せわしなく動き、さわがしい。

- ・1つはネコ。気ままで家事をしない。もう一つはトド。休日にはいえでゴロゴロしているので、「トド」みたいと言われるから。

稲原：自分のことを客観的に見ているね。「自分とは何か」を考えることが「てつがく」です。自己は持続的に存在しているが、10年前の私と今の私は違います。昨日の自分と今日の自分を考えたことありますか？

次に、「自分はどこにあってと思いますか？」「身体でしょうか、心でしょうか、脳でしょうか？」

- ・自分は自分であると自覚している。見た目で見えるので、身体。
- ・疲労すると精神的に弱くなる。だから脳だと思う。
- ・心だと思う。直観です。
- ・信念が大事。信じて願うと叶うので、心かな。
- ・脳だと思う。調理の素を買っているとき、アレンジレシピを考えるから。

稲原：日本の有名な哲学者「西田幾太郎」という人を覚えておいてください。京都の「哲学の道」を散策しながら考えたということです。彼は「絶対的矛盾的自己同一」ということを言いました。その意味は、過去は変えることができないが、未来は生き方を変えることができるということです。世の中にはほとんど問題に正解はないのです。いろいろな人がいて、いろいろな考え方があるということを、これからの2回で学びます。

○学生のふりかえり

- ・話の意味がわかりづらい。おぼえにくい。チンプンカンプンだ。
- ・動物に例えるところがよかった。むずかしいことがあってよかった。簡単なことの方がむずかしい。
- ・自分ってこんなだとはっきり表現できた。おもしろかった。
- ・授業はおもしろくて、考えた。先生に障害があることにびっくりした。聞き取りにくかった。でも脳性麻痺だから仕方ない。外国人と結婚してうらやましい。
- ・普段考えたことがないので、むずかしい。例えはいろいろありすぎて書けなかった。
- ・むずかしい。ほとんどわからなかった。
- ・ふつうでした。
- ・自分を動物に例えるのがおもしろかった。むずかしいのはむずかしかった。
- ・単純だけど深い。正解がないからこそおもしろい。自己を客観的にとらえたことがよかった。個々のとらえ方がすべてだと思う。普段から本をよく読んでいたので入りやすい。

○メンターのふりかえり

- ・自分に感心のあることで、入りやすかった。動物に例えたりしてわかりやすい。
- ・直球の声掛けにドキッとすることもある。
- ・グループでの話し合いが進まなかった。
- ・レジュメで文字化されているので、話が聞き取りにくい面は解消される。
- ・学生へのアシストの仕方がむずかしい。
- ・人を傷つけるような言い方や命令口調などにどう対応したらいいのか？その場で注意する方がいいのかむずかしい。

2 回目 「人間の多様性とは」

「同じ」と「違い」の「良いところ」と「悪いところ」

座席の近い人4人ぐらいで話し合ってください。

1. 同じ点が多いと感じる人ってどんな人？
2. 違う点が多いと感じる人ってどんな人？
3. それぞれについて感じているのはどのようなことですか？

多様性

- 社会の偏見と差別の入り組んだ状態を理解するためには、「差別する側 vs 差別を受ける側」という考え方をずらすよりは、**多様性**の考え方で捉えたほうが良い。
- 世界には「多様性」がたくさんある。
- 「多様性」の時代は「対立」の時代でもある。
- 衝突（分かり合えないこと）も多い。

多様性（森田ゆり『多様性トレーニングガイド』）

- 横の円（図2）は色々な「多様性」を示している。
- 人種や国籍、性別、年齢、障害のあるなし、といった自分の意志や努力では変えることが難しい違い（中円）。
- 学歴、収入、地位、外見、宗教の違い（外円）。

差別される時...

- あなたがそれらの構成要因の一つだけで判断され、その一つ要因があなたの個性として周囲から強調される時、あなたは差別されたと感じるだろう。
- ➡ ペンギンの場合：障害があるということだけで判断される。

差別って...

1. あるものと別のものとの間に認められる違い。また、それに従って区別すること。
2. 取り扱いに差をつけること。特に、他よりも不当に低く取り扱うこと。

「差」とは、物事と物事の間の性質・状態・程度などの違い。へだたり

差別の具体例

- 「この人は障害者」、「この人は日本人だから」、「この人は中卒」、「この人は外国人」などと、しばしばこの線は人に対してレッテルを貼り、差別する。
- 「あの人は話せないからダメだ」、「日本人だからバーガーの味が分からない」、「外国人だから信用できない」、「ホームレスだから怖い」、「障害者だから仕事ができない」など、**偏見（差別的な考え方）をもつことで自分はこの人たちとは違うと一線を引く。**

多様性の構造（仕組み）

- 自分は、あの人たちとは違う「普通の（正常な）人間」だと思ふことで優越感（自分の方が彼らより優れているという感覚）を得たり、安心感を得たりする。
- 平均的な人間という幻想（イメージ）があって、そのイメージから外れる人は生きづらくさせられてしまう。

多様性 自分の尊さを知ること

- すべての人の存在の価値の重さは平等だが、人はみな同じではない。私たちは一人一人みな違う。
- 違うからこそ尊い（価値がある）。あなたという個性は、二度と再び現れることがない唯一の存在だからこそ、尊いのだ。オンリーワン。

多様性 自分の尊さを知ること

- この自分の尊さという内的価値の自覚を持ち得ないと、人はしばしば自分より地位が、学歴が、容姿が、能力が劣ると思える人を見つけ出して、優越感をもつことでしか、自分の尊さ、自分の価値を自覚できなくなってしまう。

稲原：「あなたのユニークなところは？」

- ・ダラダラするところ。朝起きるとき体調がよくないとダラダラする。
- ・声優のしたくなる。アニメのキャラクターよりも好きのところ。
- ・クールなところ。お金を持っていて、なんでもできる。
- ・自分らしさ。
- ・テキパキと仕事をするところ。指示を守りながらチャントするところ。

稲原：近いところで話し合ってください。

1. 同じ点が多いと感じる人ってどんな人？
2. 違う点が多いと感じる人はどんな人？
3. それぞれについて感じているのはどのようなことですか？

(グループでの話し合い)

- ・同一で同等のとらえ方がちがう。共感性が問われる。
- ・趣味が同じ。遊びたくなる。会話がはずむ。何を話したいか、その場で知りたい。
- ・寒いのが苦手。
- ・ホラーが好き。話が一致する人。同じ趣味を持っている人。

稲原：同じ趣味というと、たとえばゲームが好きでも1台しかないケンカになるよね。

趣味が同じだといいいとは限らないこともある。

違う点があると、「意見が合わない」が、「考え方が広がる」「いろんな考え方がある。」ともいえる。多様性という考え方。世界に多様性がたくさんある。多様性の時代は対立の時代でもある。衝突も多い。

多様性トレーニングガイドを見てください。(別掲)

「差別」とは、私の場合アメリカでこんなことがあった。脳性まひの後遺症で動作や言葉から見た目知的障害と思われたのか、レジでおつりを渡されなかったことがある。おつりを返してほしいと言ったことがある。差別と区別はちがう。差別とは？

- ・見下すこと。
- ・格差。差別の例はたくさんある。
- ・イヤホンと間違えて、「補聴器をはずせ」と言われたことがある。

○学生のふりかえり

- ・オンリーワンの意味がわからない。イメージからはずれるところがある。
- ・差別するのは人間だけ。差別と区別はむずかしい。
- ・「世界に一つだけの花」の曲が流れて「オンリーワン」といっている。オンリーワンはたった一つ、唯一無二ということ。
- ・メンターさんといっぱい話ができた。僕ってどんな性格か話した。僕の花の絵は、主人公ぽくないですか？
- ・海外に行った時の経験でバーガーの絵のような「日本人お断り」のようなことがあった。
- ・花に例えるとすぐに描けた。先週の動物はすごく悩んだ。
- ・多様性とは何か。2年前の会社の研修で受けたことと重なった。イメージしやすかった。抽象的だからこそ、考えさせられた。授業はむずかしくなかった。

3回目 「対話形式で考える」

稲原：これまでの授業を振りかえろう。1回目で自分を動物に例え、2回目で自分を植物や花に例えてもらったが、それらをふまえて「自分ってどんな人なのかを3文で説明してください。

- ・犬に例えた。何でも挑戦する。お出かけが好き。
花はバラにした。丸くなったりとがったりするから。
知識が特定の物に限定されているが、すぐれている。
- ・ネズミとしたのは、かじる人だから。鉛筆をかじる。
花はひまわりにした。明るい人だから。
優しくておだやかなところ。
- ・自分はいねいでおとなしい性格
気に入らないことや絶対絶命のときに物にあたる。パニックになる。
インパクトのあるものが好き。熱くなる。たとえば特撮、ウルトラマン。
- ・ものごとの根拠を知りたい。
ものごとにこだわりがある。がんこである。
固定概念をくつがえす。(目立ちたいとは全くちがう。)固定概念とは、女なのに「おれ」と呼ぶのはおかしいといった考え。

稲原：「ふつう」ってなんだろう？「ふつう」になりたいですか？

喋ってみたい人をお願いします。

- ・日常生活がふつう。日々のくらしが幸せなこと。
- ・鉄道の普通は、各駅停車のこと、ローカル電車もそうだ。ふつうはまともな人間、まじめな人間のこと。自分はなりたくない。

稲原：最後に私（ペンギン9からのお願いを書いています。

『私たちが問いかける「なぜ」の答えをあらかじめ知っている人など誰もいません。私たちはどのような立場にいても、同じように、その問いについて何も「知らない」のです。その同じ地点から、みんなが同じ立場で、誰も知らない答えを探っていくことを目指しているのが、「てつがくする」ことです。

不思議だと思ったことを大切に、ゆっくりと安心できる居場所のコミュニティの一員として、誰も知らない「本当のこと」を探っていきませんか。今後も、考えること・てつがくすることを続けてください。』

○ふりかえりでの学生の意見

- ・稲原先生の授業が最後だと思うときみしい。やっぱり「てつがく」は一緒に勉強する場所だなと思いました。むずかしかったけど楽しかった。
- ・僕はふつうでなくていい。色でいうと混色で、個性を出したい。
まじめでなくてもいい＝個性を出したい。色でも混ぜると色や量でいろいろ変わってくるものだと感じました。
- ・今日はちょっとむずかしいようでした。でも、勉強になりました。
- ・ふつうってなんだろうと考えました。今日で水曜プログラムが終了し、明日で終わると思うときみしいです。

- ・ふつうって何・・・？今日で最後の授業。

今日の授業では、自分の性格や個性を自分の中で考えました。私も言葉や絵や文字で表現しやすいので、とくに理由はないですが・・・。また、今回のような授業を受けてみたいと思います。

- ・哲学について学んだけど、難しすぎて何を言っているのか分からなくなっている時がありました。でも、メンターの森田さんや秦先生が声をかけてくれたのでとても分かりやすく授業を受けることができました。
- ・頭が痛くて授業は半分聞いてダウンでした。
- ・自分を花にたとえるとどうなるかのふりかえりをした。
今日で最後のプログラムになるので、ここに来る習性がなくなってしまうので息がつまりそうです。

○メンターの意見など

- ・内容がむずかしかった。
- ・対話にするのは難しかった。考えることはできたが、しゃべろうとするとむずかしい。
- ・学生は肯定的に自分を見ていてとらえている。3文で説明する分の中に使われる言葉がポジティブなものが多く肯定的に自分をとらえていると感じた。
- ・稲原先生の授業なのに河南先生が進めようとするのを感じた。稲原先生の自身の言葉で伝えるからこそ稲原先生の授業としての意味があるのになと思った。対話は強要するものではないはずなのに、喋らせようとする感じがこの授業に合っていないと思った。KUPI生にとってむずかしい問いが多く、言葉で表現しづらかったと思うが、考えることができたことに価値があったと思った。
- ・「ふつうって何？」の問いの時に、「色にたとえると何色？」から入って、グループで話し合うところから入るとわかりやすかったかなと思った。
- ・メンターを入れた小グループで話し合う場面をつくる方が理解しやすいと思った。
- ・動物や花や色に自分を例えることは理解しやすく、入りやすかった。
- ・考えることはできるが、しゃべらせようとするむずかしい。
- ・間違った方向や、問いと違う意見がでたときに修正するのがむずかしい。間違いを正すのがいいのか、上手な突っ込み方が結局できなかった。

【授業を終わって】

メンターから指摘があったように確かにコーディネーターが進める場面が多くなりがちだったことは反省点である。稲原先生の言葉を学生に分かりやすいようにと考えたのと、対話形式で考えるところをもう少し打ち合わせして展開を相談すべきだった。

先生の問いに対して、かみ合わない答えや的を得ない答えがあったが、それはそれで学生の力であり、受け止めだといえる。「てつが



く」という考える授業で、答える学生よりも考えていて話さない学生の方が深く理解している場合があった。言葉で発表させることの難しさを感じた。学生にとってはやや難しい内容だったが、わかりやすくプリントを作り授業を展開されたのと、自分を動物や花に例えたりすることを取り入れて入りやすく工夫されていたのが良かった。

(7) 人間と言語表現 「人はなぜ書くのか」

川地 亜弥子 准教授

<p>【授業科目名】 よりよく生きるための科学と文化</p>	<p>【曜日・時限】 後期・水曜日・5限</p>
<p>【テーマ】 人はなぜ書くのか</p>	<p>【先生】 川地 亜弥子</p>
<p>【授業をする日】 2020年1月29日（水）</p>	<p>【場所】 A347</p>
<p>【授業の内容】 みなさんは、文章を書くことが好きですか？ 今回の授業では、人が文章を書くことの意味について考えます。みなさんにも、授業で書いてもらいます。何人かの作品をみんなで見たり読んで、人はなぜ書くのか、一緒に考えましょう。</p>	
<p>【授業の計画】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 今までどんなときに文章を書きましたか？ 2 みんなと一緒に書いてみよう 3 書いているときの自分をふりかえってみよう 4 作品を読みあおう 	
<p>【みなさんへのメッセージ】 どんな作品が生まれるか、楽しみにしています！</p>	

【授業記録】

川地：どんな文を書くのかな？

- ・話が終わった時、話したことすぐに忘れるから、覚えておくために。
- ・KUPIに入るとき、入る前、選考の時に書いた。

川地：自己紹介の時とか。書くことは好きですか？

- ・就労移行のところで書いた。目標作文や実習感想文を書いたけど、しんどかった。

川地：文章の書き方には、書く手順がある。主題を決めること、何を書くのかを決める、書き手の関心、読み手の関心、分量などを考えて書くとよい。

でも、もっと書くことは自由なものということを実践した人がいる。「つづり方は人を自由にすると」言った高知の教員だった小砂丘忠義（ささおか ただよし）です。彼は、戦争前の当時印刷技術が貧困な中、手作りで雑誌を作って発行していて過労で若くして亡くなった人です。

書くこと、描くこと、語ること、身振りが一緒になって表現する子どもの作文は、大人がイメージする「かく」よりもとても自由で「かきたいことを、かいたいように、かきたいときに、かけるだけかく」という表現になっている。

<いろいろな作文の例を紹介>

○相手がいるから書く（書いたら読んでほしい。読んでほしいから書く。）

○好きなことを思いっきり書く

○思いがあふれる、書きながら心が動く

●「書くことは自分を見つめること」

- ・過去のことを思い出し、心の中でもう一度経験する。
- ・楽しい経験は思い出してもう一度楽しくなる。
- ・つらい経験は、書きながら思い出してつらくなるけれど、心が整理され、少しすっきりする。

●日本で長く続いてきた作文教育（生活つづり方・事故表現としての作文）

- ・書きたいことを、書きたいように、書きたいだけ書く。テーマも長さも自由
- ・みんなで読むことを大事にする。（書く・読む・話し合うのサイクル）
- ・みんなによまれるのはいやだな、という時は「先生だけに読んでほしい」「○○さんのお返事がほしい」

◎生活つづり方にチャレンジ！（20分）

- ・学生もメンターも全員が作文を書いて、書き終えたらグループで読み合う。
- ・みんなの前で読んでもいい人の作文を紹介する。

川地：すごく、みんなよく短い時間でしっかり書けていました。

意外にみんなの前で読んでほしい人が多かったですね。読まれるとちがう楽しみがあるね。好きなことを書くことも、時々心が苦しくなる時も、ちょっと書くといいですね。

川地：みんなの前で作文を紹介してよいという人の作文を読んでみましょう。

「将来の夢」

- ・ドラゴンボール・ヒーローの研究博士になる事
- ・スキーが得意、平行線（パラレル）とハの字
- ・100名城に行ったことがある
- ・スケートにも行くことがある
- ・先生や友だちの知り合いが出来る

- ・文を作るの事が大好き
- ・ゲームをする事が好き
- ・カードを見る事が好き
- ・人とのコミュニケーションがとりやすい
- ・メンターさんとのコミュニケーションをとることも出来る

川地：箇条書き的に書きました。

「○○が好き」とリズムがありますね。

「いろいろなお笑い」

僕はかなりのお笑い好きで、動画を見てしまうほどハマっています。漫才は、マイクに向かって話すというのが普通ですが、声を途中で変えたり、動きをつけるなどのシーンが存在するのもあります。コントは動きが中心で、音楽、小道具、歌を使ったものが多いと思われます。ピンネタ、落語は、一人でいろんなことをするというジャンルです。このうち、落語やピンネタは一人でもできるネタを作れますが、漫才やコントは仲間がいないと作れません。僕は、これからも、お笑いのことをもっと研究し、いずれはネタを作ってみようかなという考えです。最後に一つ言いたいことがあります。ダジャレを使ったネタってもう流行ないのですか？

川地：思いがあふれる作文ですね。

「漫才やコントは仲間がいないと作れません。」というところがいいですね。

最後、疑問形で問いかける文はおもしろいですね。

○学生のふりかえり

- ・わかりやすかった。
- ・読まれることはうれしい。
- ・作文は相手に伝えるプレゼンや。アピールできる。
- ・作文は、僕にとってはめんどくさいものだ。
- ・書くという行為は自分の思いや気持ちを言語化させることで、相手と共感できるツールだと思う。文章で内容を明確化するものが、議事録など。抽象的なものを表現できるの

が、ラブレターなどの手紙だ。

○メンターのふりかえり

- ・お互いの作文に興味をもって、読み合いができた。
- ・Aさんは、普段のふりかえりの文章を見ていた印象と違い、長文がよく書けていたのがびっくりだった。
- ・学生同士の間関係ができてきて、話し合いでも相手を思いやる様子が見られるなど、変化してきたことを感じた。
- ・Nさんの作文は、メンターが上手に話を聞き出し、言葉を引き出して書いてもらったもので、「言葉と言葉、行と行の間に物語が見える」(川地先生のことば)作文になった。
イラスト入りで作文のおもしろいところだった。
- ・話し合いで話がずれるところを、修正すべきかどうか迷うところだ。



【授業が終わって】

1回きりの授業だったが、つづり方の本質を学ぶことができた。特に紹介された作文の数々が、伝えたい、読んでほしい、好きなことを思いっきり書く、思いがあふれる、書きながら心が動くといった表現になっていた。そうした学習の上で、実際に作文を書いてみると、すごくゆたかな表現力で書くことができていた。さらに驚いたことは、みんなの前で読み合いをしたり、みんなの前で読んでもらいたい学生が多かったことだ。

かれらの文章表現力をうまく引き出す授業で、もう少し続けて回数があってもいいのではと思った。メンターの作文も一緒に紹介できたことや、メンターが学生の気持ちを引き出して作文にするところなど、この授業のいいところだった。



(8) 課外授業「ワークキャンプに参加しよう！」

松岡 広路 教授

KUPIの課外授業として、「冬のESDプログラム in 邑久光明園 ～つどいの広場づくり～」に2名の学生が参加した。2泊3日の日程でキャンプし、国立ハンセン病療養所「邑久光明園」でのボランティア活動をするというもの。ESD（持続可能な開発のための教育）では、「邑久光明園・持続可能な島づくりプロジェクト」の活動に1年を通じて取り組んでいる。今回の冬のプログラムは、ESDの拠点づくり、つどいの広場づくりをメインに活動した。具体的には、草刈り、海岸清掃、園内清掃、夜はレクリエーション、キャンプ中の食事作りなどに取り組んだ。その中で、やりたい活動をしたり、役割を果たしたりする。

2名の学生は、それぞれのかかわり方は違ったけれど、とても充実したキャンプになったということだ。一人は、一人の人間として参加者に溶け込み、これからは別の活動にも参加すると意欲を燃やしている。もう一人の学生は、初日は緊張とわからない不安でグダグダしていたが、だんだんと活動に参加し、自分でカマを持って草刈りをするようになった。松岡先生は「知的障害の彼らにとって心を開放できる場になり、自分で面白さを感じるようになって個性を発揮してきた。枠にはめられていたのが、いろいろな場面で解放されていくことがまわりの学生にも影響を与える様子が見られた。言語表現はきびしくても、人間としてのつながりでいろいろな人と交流できる良い機会になったと思う。」と語っていただいた。「まさに、インクルーシブをキーワードにしたESDの活動にとって今後も大事にしていきたい」と力強い評価をしていただいた。

ぼらぼん



ESDボランティア ぼらぼん 邑久光明園・持続可能な島づくりプロジェクト（通称、ぼらぼん）」は、国立ハンセン病療養所である邑久光明園（岡山県瀬戸内市・長島）を拠点に2007年度より活動しています。私たちは、邑久光明園におけるボランティア活動を通して、「いのちの持続性」の矛盾や葛藤に向き合いながら、「隔離・差別の島から出会いと交流の島へ」を活動理念に、様々なプロジェクトに取り組んでいます。2018年12月21日から24日に行われた「冬のESDプログラム」では、延べ31名のメンバーとともに、海岸清掃、つどいの広場の開墾、ジオラマづくり、こみよたん玉づくり、ESDツアープランづくりワークショップに取り組みました。また、今年度は、邑久光明園にて、ESDプラットフォーム WILLとともに、8月20日から26日まで夏のワークキャンプを実施します。みなさまの参加を心よりお待ちしております！

3) 金曜日プログラム

「話し合う！やってみる！」

○活動回数：16回

○参加者：学生10名、メンター3名 合計13名

○活動場所：のびやかスペースあーち、その他

○流れ：17：15～18：45 話し合い、活動

18：45～19：00 休憩

19：00～20：00 話し合い、活動、ふり返り

20：00～21：00 メンター、黒崎でふり返り

*詳細はシラバス参照

日付	内容
10.4	自己紹介、水道筋商店街下見、夕食買い出し
10.11	水道筋商店街フィールドワーク（グループで散策）
10.18	〃（30分間 参与観察）
10.25	〃（フィールドノート仕上げ、発表）
11.1	これからの活動内容を話し合う、お客さん（イギリス人&日本人青年）との交流
11.8	ボランティアをしよう！（あーち内で活動 or 見回り隊&清掃活動）
11.15	11月の課外活動について話し合う
11.22	課外活動（灘温泉&水道筋商店街散策 or 六甲道商店街&周辺散策 or 買い物）
11.29	クリスマス会の計画を立てよう①
12.6	新喜劇①+クリスマス会の計画を立てよう②
12.13	水道筋商店街の昔と今について学ぶ（講師：神戸大学 澤宗則先生）
12.20	神戸大学内のカフェでクリスマス会！（カフェ閉店後を貸切る。カフェ店長はKUPI生）
1.10	新喜劇②+卒業旅行の話し合い①or ジオラマ制作①（2名）
1.17	阪神淡路大震災について+卒業旅行の話し合い②or ジオラマ制作②（2名）
1.24	新喜劇③+卒業旅行の話し合い③（行先と日程を決定）
1.31	同級生との関係性やあーちの存在について考える+あーちの皆さんにお礼を伝える+ 修了後にみんなとどうつながりたいかを考える
2.7	新喜劇発表！（任意参加）

*新喜劇：あーちの活動に学生（希望者）も参加をした

砂川一茂さん（脚本家）、赤木先生（神戸大学）指導の元、ノリツッコミを楽しむ！ 10名中5名が参加をした

【授業科目名】 「話し合う！やってみる！」	【授業をする日・場所】 10月4日（金）・あーち、水道筋商店街
【今日のテーマ】 ・商店街って知ってる？ ・水道筋商店街を歩こう	【スタッフ】 河南、黒崎、秦、メンター3名
【授業の内容】 ・自己紹介 ・プログラム全体の流れを説明 ・あーちの中を探検しよう ・水道筋商店街を歩こう	
【授業の計画】 17:00～ 自己紹介 金曜プログラムの内容説明と本日の流れを確認 あーちの中を探検。あーちの皆さんにあいさつをしよう 17:30～ 商店街を歩こう 夕食を買ってあーちに帰る 18:30～ 夕食を食べて休憩 19:15～ 商店街はどうだった？ 興味のあるお店はあったかな？ 来週からの活動につなげる ふりかえり（今日、今週） 来週火曜日の時間と場所の確認 20:00 プログラム終了	

- ・金曜メンターと初顔合わせ。コミュニティボールを作りながら自己紹介をした。

↓ ルール

持っている人が話せる。そして次に話しを聞きたい人に渡す

- ・金曜日は毎回「当日シラバス」を配って内容を確認した。
- ・「商店街」を知らない人もいたので説明をして早速出発。とその前に、まずは地域のみんなの居場所になっている「あーち」の中を探検。色々な部屋があり、みんなが様々な過ごし方をしている。今回はあーちの中の一部屋をプログラム用に借りたので、あーちの中を探検しながら皆さんに挨拶をした。
- ・徒歩3分で水道筋商店街に到着。ここは神戸市の3大商店街の中に入っている。メイン通りは活気がある。フィールドワークの下見を兼ねて歩いた。
- ・夕食を食べる人は弁当などを買った。買い物が1人でできるか、支払いはスムーズか、お店の人と会話をしているか、などを見て苦手な学生にはさりげなくサポートをした。保護者の方からは、レジでの会話が苦手だからセルフレジで済ませるので会話ができるようになってほしい、お金の計算が苦手、と聞いた。セルフレジが使えるならそれで十分だがレジでの様子を見守った。夕方のスーパーでは弁当が割引きになっていることが多いので、スマホの電卓機能で計算をしながら買い物をする学生がいた。
- ・夕食を食べるのに意外と時間がかかった。食べる早さにかなり差が出たため、そのまま休

憩を入れた。その後商店街の感想や観察をしたいお店を出し合ったが、あっという間に終わる時間になった。

[学生のふり返しシート]

- ・商店街に初めて行った。
- ・野球をしているのでスポーツ店が気になった。
- ・チェーン店の大きなドラッグストアが2店もあった。なぜ？
- ・かわいいパン屋さんが2店あった。パン屋さんがたくさんあった。
- ・他の通りも歩いてみたい。(メイン通りの他に枝分かれした商店街がたくさん存在する)
- ・ポップが目立つお店があった。
- ・カフェが3店あった。盛り付けを参考にしたい。(彼女はカフェで勤務をしている)
- ・仕事帰りで疲れるので体力を温存して頑張りたい。
- ・商店街の端っこまで歩きたかった。

[メンターの感想]

- ・買い物が苦手そうな人がいた。買うものがなかなか決まらなくて時間がかかる人がいた。
- ・商店街をただ歩いて観察や店主にインタビューをするのではなく、大学生としてフィールドワークをちゃんとしたい。
- ・歩く速さが違うので縦に広がってしまった。



<p>【授業科目名】 「話し合う！やってみる！」</p>	<p>【授業をする日・場所】 10月11日(金)・あーち、水道筋商店街</p>
<p>【今日のテーマ】 ・水道筋商店街の気になる通りを歩こう！ 何か気付いたことはあるかな？ 気になるお店はあるかな？</p>	<p>【スタッフ】 黒崎、メンター3名</p>
<p>【授業の内容】 ・水道筋商店街探検2回目は、メイン通り(東西)ではなく、縦の筋(南北)や、そこか</p>	

<p>ら広がる細い商店街を歩こう。何か発見したかな？ 気になるお店はあるかな？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・商店街の現状について ・商店街の人に聞いてみたいことはあるかな？ <p>例えば：商店街の昔話、 10月1日からの消費税アップや商売の状況について</p>
<p>【授業の計画】</p> <p>17:00～ 今日の流れを確認 どのような目的で商店街を歩くかを考えよう</p> <p>17:30～ 商店街を歩こう 商店街やスーパーで夕食を買う（任意）</p> <p>18:30～ あーちに戻って食べる、休憩</p> <p>19:10～ 商店街にどんなお店があったかな？（話し合い活動） 来週はグループに分かれて観察をしたいお店を決めよう （時間があれば、あーちの活動に参加） ふりかえりと来週の確認</p> <p>20:00 プログラム終了</p>

- ・グループ分けをした。どうやって分けるか？ 分け方もみんなで考えた。
興味のあるお店で分けよう→しかし歩く速さが違うからゆっくりの人を待つのは時間がかかる→でも、その人も行きたいんだったら待ってあげるのはどう？
というように、納得がいくように話し合っって3グループに分けた。
- ・夕方の商店街は賑わっていてお客さんが多い。狭い通りを歩く時は他のお客さんの迷惑にならないように広がらずに歩いていた。
- ・各グループにメンターが付いていたが、1人の学生が勝手にスーパーに弁当を買いに行った。いないことに気付いた時に見学をしていたお店のスタッフさんが一緒に捜してくれた。学生は弁当を購入して戻ってきた。後日黒崎がお店にお礼とお詫びに行った。

<p>【授業科目名】 「話し合う！やってみる！」</p>	<p>【授業をする日・場所】 10月18日（金）・あーち、水道筋商店街</p>
<p>【今日のテーマ】 ・水道筋商店街の気になるお店を観察しよう。何に気付いたかな？</p>	<p>【スタッフ】 黒崎、メンター3名</p>
<p>【授業の内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水道筋商店街探検3回目は、お店を決めて約30分間の観察をしよう フィールドワークの方法や目的を復習して出発！（15日に予習あり） ・あーちに戻ったら、忘れないうちにメモをしたことを整理しよう 	

【授業の計画】

- 17:00～ 今日の流れを確認
フィールドワークの方法や目的を復習。参与観察をメンターから教わる
- 17:15～ 商店街へ出発
お店で約30分間観察。観察後に買い出しが必要な人は買い出しをする
(飲食店で観察&夕食の人もいるかな?)
- 18:40～ あーちに到着後、夕食を食べる
- 19:10～ メモをしてきたことをまとめる
- 19:30～ 「ふらっと」に移動をして、続きをする
- 19:50～ ふりかえりシートを記入する。今週のふりかえり
- 20:00 プログラム終了

- ・参与観察(エスノグラフィー)をメンターから教わった。
観察は「いつ・どこで・誰が・何を・どのようにしているかを記録する」と。
- ・分かれて参与観察を行った。お客さんの人数や買い物をしたかどうか、どんな人が買いに来たかを観察した阪神淡路大震災の時はお店は大丈夫だったか?などを尋ねた。
- ・3つのグループに分かれて観察に行ったが、気になるお店に1人で入って観察をしてきた学生もいて、積極的だと感じた。

[学生の感想]

- ・うどん屋:店員の服装や店員がスマホを触っていた様子を記録。親子が天ぷらを買いに来た際に子供は店内で飼っている金魚を見ていた、など詳しく観察をしていた。
- ・居酒屋:観察に行った時間帯はお客さんがいなかったため、店主にお店の歴史や忙しい時間帯、おすすめメニューなどを尋ねた。お酒好きの学生は日本酒の話をして気になるメニューを記録していた。アルバイトは神戸大学生だと知った。
店内に飾ってある絵について質問をしたり、店内の図を描いた学生もいた。
- ・お米屋:お客さんがいなかったため、店主にお店の歴史や地震の時の話を聞いた。
お米以外に豆類や園芸用品も扱っていた。創業70年になるが後継ぎがいな
いため、店主が引退する時に店は閉める予定。古い木箱に豆は入っていた。
昼間は主人が配達で奥さんが店番、夕方は主人が店番で奥さんは夕飯作り。
- ・スポーツ店:店員の人数や服装、体形などを細かく観察。買い物に来た親子が相談しながら卓球のラケットやピン球を購入した様子を記録していた。犬を連れたまま
店内で買い物をしていたお客さんに驚いたと記入。
- ・八百屋:激安の八百屋さん。店員は外人でレジは日本人女性。店内の図を描いて野菜の種類も記入していた。
- ・パチンコ店:1人で観察に入った(パチンコ店に入店できる年齢のため問題なし)
かなりの客と機械があった。メダルを入れる箱が多い。音がうるさかったけど大丈夫だった。

[メンターの感想]

- ・お店側に調査のお願いをせず観察をしたことがストレスだった。(お店によってはいきなり行った) どのような目的で調査をして、結果をどう取り扱うのかを明確に伝える必要はあると感じた。
- ・学生の視野がとても広くて意欲的だと感じた。
- ・学生が熱心で高い観察力を持っていることがわかった。
- ・フィールドワークの目的と見通しをもう少し明確にした方がよいと感じた。
- ・グループ行動が苦手な学生がいたので、どこについていけばよいか迷った。



- ・前回のメモをまとめる(清書)。その後一人ずつ発表を行った。発表を聞いて質問をする
- ・同じお店を観察しても視点が違うのでお互いに発見があった。
- ・居酒屋に観察に行ったグループは、ぜひお店に食べに行きたいと語っていた。

【授業科目名】 「話し合う！やってみる！」	【授業をする日・場所】 10月25日(金)・あーち
【今日のテーマ】 ・フィールドワークのまとめと発表 ・11月の活動について	【スタッフ】 黒崎、メンター3名
【授業の内容】 ・フィールドワークのまとめと発表。他のお店にも興味を持ち、質問をしよう ・11月の活動について	
【授業の計画】 17:00～ フィールドワークのまとめを書こう 発表をしよう(第一部) 夕食 発表をしよう(第二部) 11月に何をするか話し合う(時間があればあーちの活動に参加をする) 19:30～ 「ふらっと」に移動 11月に何をするか話し合う 19:50～ ふりかえりシートを記入する。今週のふりかえり 20:00 プログラム終了	

- ・11月以降にどんな活動をするかを話し合ったが、この時間帯及び時間内に収める活動を学生が見つめるのは難しいため、スタッフとメンターでいくつか候補を挙げて次週決めることとした。候補を聞くと、それがヒントになって活動内容が思い浮かぶ可能性がある。
- ・次週はあーちの活動を見学に来るお客さんとの交流が決まっているため、プログラムの半分は交流時間になることを伝えた。

*17:00までに買い出しに行ってプログラムの途中で夕食を食べていたが、次回からは17:00までに各自で買い出しと夕食を済ませることに変更をした。

【授業科目名】 「話し合う！やってみる！」	【授業をする日・場所】 11月1日（金）・あーち
【今日のテーマ】 ・11月からの活動について考えよう ・お客さんと交流をしよう	【スタッフ】 黒崎、秦、メンター3名
【授業の内容】 ・それぞれが考えてきた活動内容を発表して、何をするかを考えよう ・イギリス人5名、日本人5名のお客さんと交流をしよう	
【授業の計画】 17:00～ 11月からの活動について、考えてきたことを発表しよう 18:00～ あーちを利用している人やお客さんと交流 話し合いの続きをする 19:30～ ふらっとに移動をして続きをする 今週のふりかえり、机を片付ける 20:00 プログラム終了	

- ・お客さんと交流をした。障害はあるが趣味などを通して楽しく暮らしていると聞いた。日本人の青年は学生と歳が近く、お互いに質問をした。多くの学生はカタコトの英語で自己紹介をした。小学校時代に英語を習っていた学生や海外で暮らした経験を持つ学生がいた。
 - ・外食、ボーリング、皆で出かけたい（買い物）、銭湯に行く、ボランティアをしたい、運動をしたい、などの意見が出た中で、来週すぐにできることを考えた。結果、ボランティアに決まり、次は内容を話し合った。
- ↓
- ・今までのボランティア経験を出し合った。そして今回自分たちでできそうなこと、やってみたいことを出した結果、あーちで子どもたちと遊んだり青年と接するボランティア、地域の子どもたちを見守りたい、清掃活動などが出た。
- ↓

*あーちの中でボランティアをする（子どもたちと遊ぶ、片付け、青年と接する など）
--

*通学路に危険な物がないかをチェックしながら清掃活動をする

に決定した。どちらに参加をするかは選んでもらった。

清掃活動班はゴミ袋や懐中電灯などを次週持参。(軍手はスタッフが準備)

【授業科目名】 「話し合う！やってみる！」	【授業をする日・場所】 11月8日(金)・あーち&あーち周辺
【今日のテーマ】 ・これからのプログラム内容について ・ボランティアって何？したことはある？ ・ボランティアをしてみよう！	【スタッフ】 黒崎、秦、メンター2名
【授業の内容】 ・みんなの意見を元に、プログラム内容を決めていこう(11月～1月) ・ボランティアについて。何ができるかな？ ・ボランティアをしよう！→ふり返り	
【授業の計画】 17:00～ これからの活動について 18:00～ ボランティアって何？ したことはあるかな？ 今回のボランティアについて 1班 あーちの中で何ができるかな？(サポート1名) 2班 清掃活動&見回り隊(サポート3名) 18:30～ 準備をしてボランティアスタート！ 19:30～ ふらっとに移動をしてふり返り、机を片付ける 20:00 終了	

・前半は話し合い活動をした。出かけた場所が次々と出てきた(次週に持ち越し)

・後半は2班に分かれてボランティア活動。ふり返りではお互いの活動内容を発表した。

・1班：子どもや青年と坊主めぐりをした。小学生と遊んだ(鬼ごっこの鬼の役)色々な人と会話をした。ダンスタイムにダンスを披露した。など初めはどこで何をしようか入りにくそうにしていたが、見守っていると居場所を見つけて活動をしていた(メンター談)・2班：あらかじめ決めたルートを歩いて清掃活動をした。軍手をはめてゴミを拾ったが一番多かったのが吸い殻。次はペットボトル。各自ゴミ袋を持ちながら丁寧にゴミを拾った。前に進まないくらい吸い殻が多くて驚いた。外は真っ暗なので懐中電灯で照らしながら進んだ。車が近づいた時は「車



が来てるよ～」と声をかけてくれる学生が必ずいた。学生は丁寧に道を見るため、なかなか進まなかった。道に落ちているゴミの多さに驚いた。

【授業科目名】 「話し合う！やってみる！」	【授業をする日・場所】 11月15日（金）・あーち
【今日のテーマ】 ・11月の課外活動を決めよう ・その他の活動について考えよう	【スタッフ】 黒崎、秦、メンター3名
【授業の内容】 ・先週、話し合い活動が途中で終わりましたね、覚えていますか？ 課外活動をするには、何を決めるか？どのように決めるか？が大切ですね 楽しい活動になるように、みんなで話し合おう！ ・その他の活動もたくさんあります。時間があれば説明をします	
【授業の計画】 17：15～ 11月22日の活動について話し合おう 18：15～ 休憩 18：30～ 話し合いの続き 19：30～ ふらっとに移動。ふり返り 20：00 プログラム終了 *注意：これからの金曜日プログラムは「17：15から始めます」	

【11月8日の話し合いは覚えているかな？】

- ① 行きたい場所は？
- ・買い物（カード）
 - ・映画
 - ・六甲道商店街：食べ歩き、水道筋商店街とくらべる
 - ・展望台：ビーナスブリッジ、掬星台（きくせいだい）
 - ・外食
 - ・灘温泉
 - ・ゲームセンター
- ② みんな一緒に行く？ グループで行く？ 多数決をとりました
- ・みんな一緒に行く 6人
 - ・グループで行く 2人
 - ・どっちでもいい 1人
 - ・わからない 1人

*注意；17：00に夕食を食べ終わっていない学生が数名いるため、金曜日プログラムは17：15スタートに変更をした。

- ・みんなで一緒に出かける、又は行きたい場所によって分けるかを時間をかけて意見を出し合った。意見は半々に分かれた。
- *みんなで一緒に行こう→せっかくのプログラムだからみんなで同じところに行きたい
- *行きたいところがいい→希望の場所に行く方が楽しい

↓ 結果

グループに分かれて希望のところに行って、最後に同じレストランで夕食を食べよう！に決定した。

- ・映画は時間帯が合わないため今回は諦めた。
- ・予算は 2000 円と決めた。(夕食代は別)
- ・行先の候補もたくさん出た。人数の差が出やすい多数決の方法をメンターが教えてくれた。これがとても良い方法だったが、理解が難しい学生が 1 名いた。

1 人 5 ポイント持っている。一番行きたいところにたくさんのポイントを使う。
1 か所に 5 ポイントを使ってもいいし、数か所に分けてポイントを分散させても良い。

例えば ・灘温泉 5 →合計 5 ポイント

・六甲道商店街 3、灘温泉 1、外食 1 →合計 5 ポイント

という風に、紙に書いて集計をした。投票用紙には合計 5 ポイントになるように書いていた。5 ポイント集中型、分散型、様々だった。4 か所に分けた学生もいた。

↓ 結果

- *灘温泉&水道筋商店街散策&ゲームセンター
- *神戸大学のフィットネスジムに行く
- *六甲道商店街&周辺散策(買い物)

3 案に分かれて活動をして、最後に同じレストランで報告を兼ねた夕食会をする に決定。

この話し合いはすぐに多数決をせず、少数派の意見にも耳を傾けた。一人の考えに対して意見を出し合って時間をかけて話し合った。今までじっくり話し合って物事を決めた経験が少なかったであろうと推測する。そして少数派の意見をじっくり聞いてもらった経験も少ないと思ったので、皆が納得をするまで話し合った。

話し合いが長くなり席を外す学生もいたが、ほとんどの学生が 1 回の課外活動のためにじっくり話し合って行先を決めた。

話し合いが終わった後は学生、メンター、スタッフから大きなため息が出た。

コミュニティボールはみんなの間を飛び交い、汗で湿気ていたかもしれない。

【授業科目名】 「話し合う！やってみる！」	【授業をする日・場所】 11月22日(金)・グループ
【今日のテーマ】 ・課外活動に出かけよう！	【スタッフ】 河南、黒崎、メンター3名
【授業の内容】 ・たくさん話し合って、やっと出かけることになりました。 みんなとの外出を楽しもう！	

【授業の計画】

- 17:00～ 集合（各グループで集合場所が違うよ。確認をしよう）
 <グループ活動>
 ① 灘温泉&水道筋商店街散策
 ② ~~神戸大学のフィットネスジムに行く~~
 ③ 六甲道商店街&周辺散策（買い物）
- 19:00～ カフェレストラン「人参」六甲道店 で夕食&ふり返り
 各グループの活動はどうだったかな？ 聞いてみよう！話してみよう！
- 20:00 終了 カフェレストラン「人参」六甲道店 で解散

*レストランのメニューが気になる人は、ホームページで調べてね！

*22日はあーちに帰りません。レストランで解散をします。JR 六甲道や阪急六甲駅などに行く道順は案内をします。

- ・ジムに確認をすると、テスト期間中で使用ができないことが判明。よってジムを選んでいた学生は①か③を選んでもらった。
- ・時間を気にしながらの活動だったが、それぞれが楽しんだ。
- ③を散策と買い物に分けたため、3つのグループで外出を楽しんだ。
- ・19時前にはレストランに集まって、到着したグループから注文をした。

[学生の感想]

- ・時間を持て余した。六甲道商店街は水道筋と違ってお店が少なかったので周辺を歩いた。すると古本屋を見つけたので入ってみた。
- ・古本市場で本をゆっくり選んで購入をした。カードを買った。
- ・あったかそうな白いマフラーが買えて嬉しかった。
- ・露天風呂で大阪から来た知らないおばちゃんと話しをした。

*友達同士で買い物や外出をした経験が少ないと聞き、良い経験になったと感じた。

【授業科目名】 「話し合う！やってみる！」	【授業をする日・場所】 11月29日（金）・あーち
【今日のテーマ】 ・12月の活動について話し合おう	【スタッフ】 黒崎、メンター3名
【授業の内容】 ・12月20日の「クリスマス会」（アゴラ）について話し合おう	
【授業の計画】 17:15～ どんなクリスマス会にしたいかな？ 食べ物の準備はどうしよう？ 予算は？ 18:45～ 休憩 19:00～ 話し合いが終われば、ふり返りをしてあーちと交流	

19:40	プログラム終了 あーち青年のふり返りに参加をしてもいいし、あーちで交流もいいですね 疲れた人は帰宅をしてもいいです
20:00	退出

- ・この日も話し合い活動を行った。決まっているのは場所だけ。閉店後の校内カフェを借ります。そのカフェの店長として働いている学生がいたので、設備や備品について教えてもらった。
- ・クリスマス会のイメージが人によって違うので、話しをしながらどんな内容にするかを決めた。
- ・時間の制約はあるけどみんなで買い出しに行きたい。クリスマスだからチキンやケーキを食べたい。予算は？など、どんどん意見を出し合って食べる物から決めた。
- ・予算は1000円～3000円まで出たが、1000円に決定。
- ・食べたい物が山のように出たが予算もあるし、どうしよう、、、
結果、それぞれが食べたい物を買出しして、大皿に盛り、オードブルにしよう！
に決まった。チキン、ケーキ、ピザ、飲み物などはスタッフが準備をした。
- ・買い出しの方法は、自分の名前を書いた封筒に1000円を入れて、600円以内でオードブル用のお惣菜を購入。おつりは封筒に入れて、そのままスタッフに渡す。
残金で他の物を購入した。結果、600円は使って良いのだが、一番少ない金額で購入をした学生は300円前後が2名。オーバーした学生は1名で750円使っていた。
- ・プレゼント交換の話題になったが続きは次回に持ち越し。プレゼント交換を知らない学生が1名いた。話し合いが長時間続いたため、早めに終わった。

【授業科目名】 「話し合う！やってみる！」	【授業をする日・場所】 12月6日（金）・あーち
【今日のテーマ】 ・クリスマス会について話し合おう ・新喜劇練習に参加をしよう （見学だけでもいいよ！）	【スタッフ】 黒崎、メンター3名
【授業の内容】 ・クリスマス会について話し合おう（前回の続き） ・新喜劇練習に参加をしよう。参加の仕方は色々あるよ（裏方、小道具作りなど）	
【授業の計画】 17:15～ クリスマス会（12月20日）について話し合おう <ul style="list-style-type: none"> ・プレゼント交換について ・服装について（赤、緑、茶、白色がついているものを身につける、又はクリスマスに関するものを身につける） ・火、水曜日のメンターさんを誘うかどうかを考えよう 	

・ケーキなどの食べ物の値段を報告（黒崎）

18：45～ 休憩

19：00～ 新喜劇練習。初回なので始めは見学をしてみよう

20：00 プログラム終了

- ・「プレゼント交換をしたことがない」学生がいたので、みんなで説明をした。
 - ・金額を決めて予算内でプレゼントを各自で準備をする。
 - ・プレゼント交換の方法はくじ引き、ビンゴ、あみだくじ、音楽をかけて回す、などがあって、何が当たるかわからない楽しさがある。

↓

学生が今まで経験したプレゼント交換の方法をとともわかりやすく説明をしてくれたが、未経験の学生は「プレゼント交換はお互いに欲しいものを準備して交換する」と考えており、何が当たるかわからない交換は不安だと話したが、結局やってみることにになり、予算は100円～400円に決まった。手作りのプレゼントもOKと決めた。

- ・火曜日と水曜日のメンターも誘うことになった。1人でも多く来てみんなで楽しみたい！と学生は願っている。結果、他曜日のメンターは2名参加をしてくれた。
- ・新喜劇の練習に5名が参加をした。他の学生は30分ほど見学をした。

【授業科目名】 「話し合う！やってみる！」	【授業をする日・場所】 12月13日（金）・あーち、水道筋商店街
【今日のテーマ】 ・神戸大学 澤宗則先生から商店街について学ぼう	【スタッフ】 黒崎、メンター2名
【授業の内容】 <ul style="list-style-type: none"> ・水道筋商店街の昔と今について ・写真資料を通して、昭和40年前後の商店街、阪神淡路大震災後の商店街、そして現在と、変わりゆく商店街の姿を知ろう。実際に商店街を歩こう ・感じたことや発見したことをメモ（ふせん）に書いて大きな地図に貼る ・神戸の3大商店街はどこかな？商店街が発展し続けるにはどんなお店が必要かな？ 	
【授業の計画】 <p>17：15～ 自己紹介。澤先生から今日の授業の説明を聞こう</p> <p>17：30～ フィールドワークに出発</p> <p>19：00～ あーちに帰ったあと、休憩</p> <p>観察したメモを大きな地図に貼ろう</p> <p>気付いたことを発表して、澤先生から話しを聞こう</p> <p>ふり返り</p> <p>20：00 プログラム終了</p> <p>*来週はアゴラでクリスマス会をしよう！</p> <p>17：00にJR六甲道で待ち合わせをします。予算（1000円）を忘れないようにね</p>	

- ・澤先生には10月の商店街フィールドワークの内容を事前に伝えていた。今回は商店街の昔の様子を聞いたり、歩いて気付いたことをどんどん書こう！と指導を受けた。付箋をボードにたくさん貼って、商店街で気づいたことや疑問などはその場でたくさん書いた。あーちに帰ってから付箋を地図に貼って、みんなの面白い気づきを発表し合った。澤先生は「本当は歩きたい道をどんどん進んで、食べ歩きをするのも楽しくて発見がある」と方法を教えてくれた。学生の付箋を見ると、同じパン屋さんに関して「店の外からパンの名前や値段が分かるように工夫してあった」「どうしてこんなお店の名前にしたんだろう？」「このパン屋は食べログに載っているから今度買ってみたい」など感想は様々だ。10人の目で見ると、10倍の楽しみ方が味わえる。いや、もっと増えそうだ。やはり時間が足りなかった。

12月20日（金）KUPI 金曜日プログラム

『🎁 クリスマス会 🎵』

*場 所：A棟6階「カフェ アゴラ」

*参加者：KUPI生10名、金曜メンター3名、他曜日メンター2名、黒崎

*準 備：会費 1人1000円

プレゼント 100～400円以内で買った物を持ってくる

みんなでプレゼント交換をしよう！

服そう 赤・緑・茶・白色の入った物を身につける、又は小物を持ってくる

アゴラでかけたいCDがあれば持ってきてね

*集合時間と場所

12月20日（金）17:00（夕方5時） JR六甲道改札で集合

グループに分かれてオードブルの買い出しをしよう。注文をしているケーキやチキンを受け取ってね！

メンターさんと連絡先の交換をしよう

- ・井上さん、学生3名
- ・加戸さん、学生3名
- ・古庄さん、学生4名、黒崎

*20日の予定

17:00 JR六甲道改札で集合。グループのメンバーがそろったら買い出しに行こう！

買い出しが終わったらバスでキャンパスに向かう

留守番組はパーティの準備をよろしくね！

18:00～ キャンパスに着いたグループから準備を始める

みんなが選んだオードブルは、どんな食べ物があるかな？ 楽しみだね！

18:45～ 準備ができればクリスマス会スタート！ 乾杯～～！

プレゼント交換はワクワクするね。歌や芸を披露する人はいるかな？

- 19 : 45 片付けをしよう
20 : 00 クリスマス会、終了。 楽しかったかな？

<クリスマス会の学生の様子>

- A さん：ほとんどの人がお総菜を選んでいたが A さんは迷うことなくおはぎを 2 つ購入。
井上さんが全員が少しずつ食べられるように一つのおはぎを丁寧に 8 カットにしてくれたが、A さんは大好きだから 8 カットをいくつも食べていた。
結局 1 つ分は食べていたかも。
- B 君：編集をした CD を持参。機嫌よく、ずっとおしゃべりを楽しんでいました。
- C さん：カフェ店長の C さんはカウンター内でピザの温めやカット、その他の準備を手際よく黙々としてくれた。カフェスタッフでもある井上さんも手際よく合間に洗い物をしてくれたので片付けの時には洗い物はゼロだった。
- D さん：準備を積極的にしていた。隣りがメンターさんだったのでおしゃべりを楽しんだ。
- E 君：手作りの生チョコをたくさん作ってタッパーに入れて持参してくれた。意外な一面を発見。
E 君がみんなから離れて座っていた F 君に声をかけると、F 君が E 君の近くに座った。F 君の食べ物を取り分けるなど気にかけていた。
ゴミを集める作業を積極的にしてくれた。
- G 君：CD を持参。彼のペースで周囲の人と話して楽しんでいた。プレゼント交換に参加をする or しない? でかなり時間をかけて話し合ったが、すんなり参加ができた。
- H さん：周囲の人とおしゃべりをして、赤木先生とも長く話していた。片付けの時には学生とメンターで飲みに行こう！と盛り上がっていた。女子会をするそうだ。
- F 君：離れて座っていたが E 君から誘われて彼の近くに座った。赤木先生とおしゃべりを楽しんだ。プレゼントを忘れていた。
- I 君：食べる前にオードブルの写真を撮り、赤木先生にスマホを渡してみんなとの写真を撮ってもらった。片付けの後に自分のノートを開いて今日の流れを確認しながら書いていた。授業後は毎回日課になっている。
- J 君：B 君が近くに座っていたのでいつものようにおしゃべりを楽しんだ。
プレゼントは手作りだった。交換用とは別にいくつか準備をしていて最後に配っていた。

赤木先生の感想：「皆の雰囲気が 10 月の授業の時と全然ちがうね」と、アゴラに入るなり聞かせてくれた。みんなが馴染んでいて、誰が学生で誰がメンターか良い意味でわからないと。自然体でいいね！

11月22日 課外活動



12月13日 神戸大学 澤先生によるフィールドワーク



12月20日 クリスマス会



【授業科目名】 「話し合う！やってみる！」	【授業をする日・場所】 1月10日（金）・あーち
【今日のテーマ】 ・卒業旅行について話し合おう ・個別活動：ジオラマ制作「象舎」（2名） 新喜劇の練習、他	【スタッフ】 黒崎、メンター3名
【授業の内容】 ・卒業旅行について話し合おう：近郊 or 遠出？、日帰り or 一泊？ ・個別活動：ジオラマ制作、新喜劇の練習、他	
【授業の計画】 17：15～・ジオラマ制作の講師として KUPI 生のお父さんが来てくれます みんなで自己紹介をしよう。その後、2名はジオラマ制作を始めます 他のみんなは修学旅行について話し合おう 18：45～ 休憩 19：00～・引き続きジオラマ制作（2名） ・新喜劇の練習スタート！ ・新喜劇不参加の人は自由に過ごしていいですよ！ 新喜劇の練習を見学、あーちの人と交流、修学旅行の話し合いなど 20：00 各プログラム終了 ジョラマは完成したかな？	

- ・学生のお父さんが講師に来てくれた。2か月前から試作作りをして材料費、作業時間、参加人数などの打合せを重ねてこの日を迎えた。約3時間、学生は集中して、そして楽しそうに作った。男子学生は入学をした時からジオラマ制作がしたいと言いつづけた。試作品を見た女子学生は軽い気持ちで参加をしたが、休憩も取らず熱心に作り続けた。講師は「うまくいなくても何度でも作り直せるからね。自由に作っていいんだよ」と声をかけた。作りながら「材料は身近なところにあって100円ショップでほとんどの物がそろうよ」と材料の調達方法や作れる技を教えてくれた。次週続きを作る。
- ・卒業旅行に行こう！と、発案があり早速話し合った。メンターの井上氏が「KUPI の全ての授業の中で印象に残っていることは何か書いてみて。言葉でも絵でもいいよ」と学生に投げかけた。学生は商店街、ポチャ、当事者研究、宇宙、YESand 音楽、ライフストーリーなど、書いた紙がホワイトボードにどんどん貼られた。「じゃ、次はそれをイメージした場所はどこ？」と再び聞いた。大阪の商店街、プラネタリウム、クラシックコンサート、美術館、、次週再び意見を出し合うことになった。
- ・新喜劇の練習は2回目で舞台は温泉。タオル持参で練習に励んだ。

【授業科目名】 「話し合う！やってみる！」	【授業をする日・場所】 1月17日（金）・あーち
【今日のテーマ】 ① 卒業旅行について話し合う 2回目	【スタッフ】 河南、黒崎、メンター2名

② ジオラマ制作 (2名) 2回目 ③ 阪神淡路大震災から25年 災害と障害者問題を考える (河南)	*ESD キャンプ (1.17~1.19) メンター1名、学生2名 参加
【授業の内容】 ① 前回、KUPI 全ての授業から印象に残っているものを書きだして、そこから連想する場所や気持ちについて意見を出しました。今日は更に連想する場所を探してみよう ② ジオラマを仕上げよう。完成した後は卒業旅行の話し合いに参加をしよう ③ 阪神淡路大震災の時に障害のある人たちはどのように過ごしていたのかな？ これから起こる災害が色々と予想されています。どんなことに気を付けたらいいのか考えてみよう	
【授業の計画】 17:15~ ①、② それぞれスタート！ 18:30~ 休憩 18:45~ ③ (全員) 19:30 プログラム終了 19:30~ あーちと交流、みんなとおしゃべり、帰宅、自由です！ 20:00 終了	

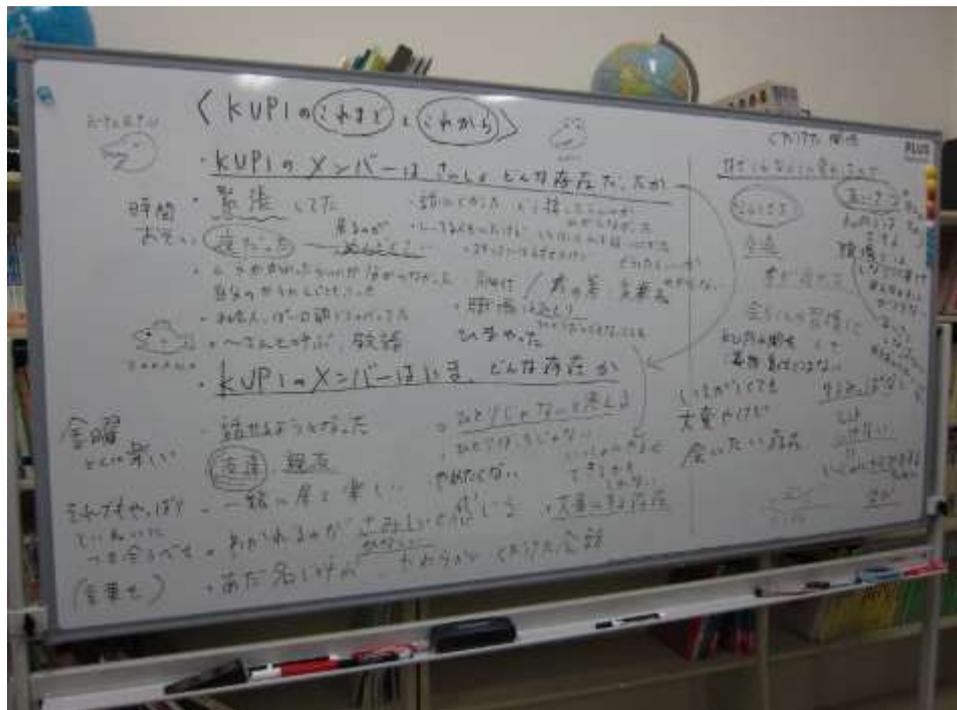
- ・卒業旅行で行きたい場所は更に広がった。プログラムに関係する場所以外もたくさん出た。行きたい場所が出る度に学生はスマホで入場料や療育手帳が使えるかどうかを調べた。テーマパークはお金がかかるし、人が多ければ迷子になったりしんどくなるよね、と考えた。
- ・ジオラマ制作は1時間ほどで仕上がった。屋根の色がまだら模様になっているところや、象の体の色は本当にリアルで、細かい所を丁寧に塗っていた。講師は2回にわたって学生のためにボランティアで教えてくれた。良い経験をしたことに感謝を伝えたい。
- ・河南氏は阪神淡路大震災の時に勤務していた養護学校の生徒の様子や、避難所の様子を伝えた。二重の障害を負うことになった教え子の話しや災害が起こった時に障害者に情報を伝えるには何が必要か、伝える人がいるのかどうか、などを話した。毎年のように自然災害が起こっているので身近な問題として考えた。



【授業科目名】 「話し合う！やってみる！」	【授業をする日・場所】 1月24日（金）・あーち
【今日のテーマ】 ・卒業旅行の話し合い ・新喜劇の練習（参加者）	【スタッフ】 黒崎、メンター3名
【授業の内容】 ・卒業旅行の日程と行先を決めよう ・新喜劇参加者は最後の練習を頑張ろう！	
【授業の計画】 17：15～ 卒業旅行の日程と行先を決めよう 先週、候補がたくさん出ましたね 18：45～ 休憩 19：00～ 新喜劇参加者は準備をして練習に参加をします 新喜劇不参加の人は卒業旅行の詳細を決めよう 来週、卒業旅行にメンターさんを誘うので、説明をする準備をしよう 20：00 プログラム終了 *次回31日（金）は、プログラムであーちを使うのは最後です あーちの皆さんにお礼を伝えようね！	

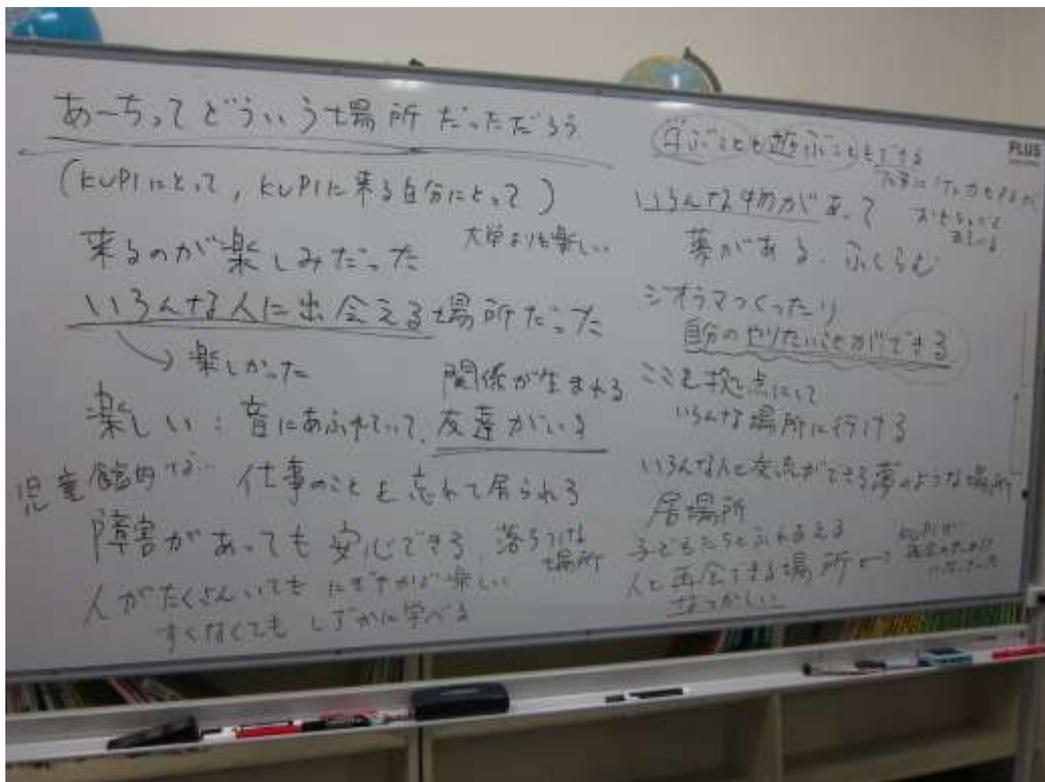
【授業科目名】 「話し合う！やってみる！」	【授業をする日・場所】 1月31日（金）・あーち
【今日のテーマ】 ① KUPI が修了したあとに、みんなでどの ようにつながりたいかを考えよう ② あーちのみんなにお礼を伝えよう ③ 金曜日プログラムのふり返り	【スタッフ】 黒崎、秦、メンター2名
【授業の内容】 ① KUPI に参加をして、仲間はどうな存在かな？ ② KUPI のために「ゆーす」を使わせてもらったね。あーちのみんなにお礼を伝えよう ③ 金曜日プログラムは今日が最後です。色々なことをしたね。ふり返りをしよう	
【授業の計画】 17：15～ ①について考えよう ②あーちはみんなにとってどんな場所だったかな？ 受付けのスタッフさんにもお礼を伝えよう 18：45～ 休憩 19：00～ ②お礼を伝えよう ③金曜日プログラムは今日が最後です。ふり返りをしよう *金曜メンターさんにお礼を伝えよう 20：00 プログラム終了	

- ・メンターの井上氏が「KUPIのメンバーは初めはどんな存在だった?」と問いかけた。
 どんな存在だったか?に対する答えは出なかったがプログラム全体の印象が次々として出てきた。→はじめは周りに人がいるのに孤独と感じた。緊張していた。家が遠いので一人で電車で帰れるか不安だった。夜だから面倒だと思った。終わる時間は19:30でもいい。夜が遅いのは構わないが家族と過ごす時間が減った。どこまでみんなと話したらいいのかわからなかった。同年代と話す機会が少なかったからどう関わったらいいかわからなかった。みんな年下だから気兼ねをしていたが今は終わってしまうのがめっちゃ寂しい。はじめは敬語を使っていたが今はあだ名を付けて呼んでいる。今は砕けた会話ができる。通ったら慣れてきた。これからはあーちを利用したい、など。
- ・「今はKUPIのメンバーはどんな存在か?」この問いかけに対して次々と意見が出た。
 →一緒にいると気が緩む。緩めててもいい存在。仕事の後にプログラムに来ていることに尊敬をしている。忙しくて大変だけど会いたい存在、挨拶をしているから話しやすくなった。勉強をこれからも続けたい、など。
- ・KUPIでは部屋に入ると大きな声で気持ちの良い挨拶をしてくれる彼女が職場では挨拶ができない、挨拶をするけど目を合わせない、と言った。井上氏は、「それ、わかるよ、そんなときあるよね」と話すと数人の学生も頷いていた。彼女は「KUPIでは挨拶をしているから話しやすくなった。話しやすいから挨拶もできる」と、いつもの明るい声で話した。





・続けて井上氏は「あーちはどんな場所だった？」と問いかけた。→色々な人に会えるから楽しい。仕事のことを忘れて過ごせる。大学より楽しいことがある。やりたいことが実現した(ジオラマ)。新喜劇をしたかった。大学生と一緒に学ぶ、遊ぶ、たまにケンカする。やりたいことをする場所。安心ができる。児童館みたい。子どもから大人までたくさんいて夢のような場所。子どもたちとふれあえる。おもちゃもある。あーちに同級生がいて再会した。休み時間のような場所。学ぶことも遊ぶこともできる、など。そのような場所でプログラムをすることができた喜びと部屋を貸してくれた感謝の気持ちをこめて、KUPIのみんなであいさつに行った。



文責：黒崎幸子

4) プログラム以外の学生による自発的な活動

プログラムがスタートして1か月半が過ぎたころから、KUPI 生同士の会話が増えるようになってきた。グループワークを重ねるうちに性別に関係なく雑談をする姿が増えた。その頃、神戸で2週間ほど開催されるルミナリエに「みんなで行きたい!」と発言した。夕方から夜に観られるイルミネーションのため、プログラムの曜日には行けない。メンターが行ける日を書き出すと、参加をしたい人は希望日を言い始めてあっという間に日は決まり、メンター全員を誘った。参加希望者は学生8名、メンター3名。当日約束を忘れていた学生1名、体調不良1名で学生は6名に減ったが、駅で待ち合わせて出かけた。最寄り駅に全員集合というわけには行かず、学生が利用している電車の駅で先にメンターと待ち合わせをして、その後全員集合とした。連絡先を交換したことによって、学生同士又はメンターとプログラム以外でも会話をするようになった。クリスマス会の時に学生とメンター有志で「女子会」が発足。夕食を食べに行くと聞いた。またあるグループではカラオケに行ったようで楽しい報告をいくつか聞くことができた。修了が近づくと「卒業旅行に行きたい」と話しが出た。金曜日プログラムの中で話し合う時間を設けて行先と日程を考えた。プログラム中に話し合ったが修了後の活動になるため参加は自由とした。つい先日行ってきたと報告を受けた。参加者は学生6名、メンター生5名。コロナウィルスを懸念しての欠席や当日の体調不良者が出たため、宿泊希望者も全員日帰り旅行とした。

「しあわせの村」(神戸市内)へ行き、散策や温泉、ボッチャなどを楽しんだ。次は「王子動物園と花見」の計画があるらしい。あーちを利用している青年にも声をかけるようだ。ただ、いずれの活動も学生だけで待ち合わせをして出かけることは難しい。メンターのサポートが必要になるが、様々な連絡手段を利用して、少しずつ学生だけでも計画をして待ち合わせができるように見守りたい。

SNSの利用については各家庭で約束があるため、無理に個人情報を交換しない、交換ができない時は断るなどの注意が必要だ。お金に関しても注意が必要で、出かけている時にお金が足りなくて人から借りる場面があった。その時は速やかに返す。貸した人からも積極的に返金を求めるなどの声かけをした。

4. 授業担当教員、メンター学生、一般学生、コーディネーターは何を学んだか

1) 授業担当教員

① 津田英二

このプログラムの話が持ち上がった時点から、誰も無理をせずに進めていきたいという思いが強かった。無理をする人がいると、必ずどこかに歪みとして表れるからだし、そもそも継続が困難になるし、さらに言うと今の大学は無理をして新しい事業を始めるほどゆとりのある環境ではないからである。責任は徹底して分担していきたいと考えたし、したがって成果もまた関与してくれた全員のものというスタンスを大切にしたいと考えた。幸い、この事業の推進を一緒に担った人たちは、みなさんそれぞれの意味でたいへん意欲的であり、また有能であった。このプログラムがなにながしかの成果を上げたのだとすれば、その理由は「みんなで楽しく作り上げた実践だった」ということに尽きる。教員も、一般学生も、KUPI 学生も、メンター学生も、職員も、そして保護者のみなさんも。「このプログラムに関わることができて幸運だった」と、全員が思っているのではないかと感じる。実践的に言えば、それが最大の成果だったと思う。

私自身もまた、幸運の享受者の一人である。みなさんに「無理をしないで」と言っている手前、私もまったく無理をしなかった。それにも関わらず、多くの学びを得ることができたし、何よりも充実感を感じている。

私が出た学びについて、とりあえず2つの視点から言葉にしておこうと思う。

第一に、学びとは何かということについて、言葉に実感をもたせる経験をしたという点である。

これまで私が着眼してきた学びは、「気づき」という言葉に代替できるインフォーマルな学びであった。教える一教えられる行為から生まれる学びは、あまり肯定的に取り上げてこなかった。私自身の経験からも、また授業で対面する学生たちの様子からも、真の学びは学校の外でなされるものであって、授業では真の学びも喜びも生み出さないと、どこかで諦めてきた。しかし、KUPI 学生たちの様子、それに引きずられるように変化した一般学生、メンター学生の様子をみて、授業を受けること、授業という形態で知の世界に接することの喜びというものがあるということに、再び意識を向けることができた。理解できない内容の授業を聞き、堪えられずに眠ってしまうことがあっても、結局受講した授業が何について話されていたのかついていけずに不貞腐れたように家路に就いたことがあっても、授業に参加していたこと自体が喜びであることを表明し続けた KUPI 学生に、私たちは驚かされ続けた。この喜びはどこから来るものなのかということ、問わずにはいられなかった。

学校教育では、「分かることの喜び」を重視する。当然と言えば当然である。学校教育では分かることを前提にして授業が行われるからである。分からないことは問題であり、理解能力が不足している人が授業に参加していると「お荷物」になったり、「お客様」と言われたりする。その視線からすると、KUPI 学生は「お荷物」「お客様」と言われても不思議でない状況だったかもしれないが、そのようにはならなかった。それは、「分からないこと」が当たり前だったからなのではないか。

考えてみれば、世の中「分からないこと」だらけである。教員として教える側にあっても、専門領域に関わることでさえ分からないことだらけである。「分からないこと」だらけだけ

からこそ研究者であり続けられる。したがって、研究と密接に関連する大学教育は本来「分からないこと」を教えるようなものなのかもしれない。「民主主義とは何か」という授業を行ったが、せいぜい私が説明できるのは概念や歴史や制度程度のことである。「民主主義とは何か」ということについて実感を伴った言葉として紡ぎだすことは案外と難しい。そもそも私自身が経験し実感をもって語るができる民主主義など不完全なものではない。その意味で、「民主主義とは何か」という問いの分からなさについて、KUPI 学生と私の間にたいした隔たりはない。

「分からないこと」だらけなのに喜びを表明してくれる KUPI 学生から、このようなことを感じさせてもらった。私たちは分からなければいけないという強迫観念をどこかに持っているのではないか。「分かることの喜び」に縛られることで「分からないこと」の価値を見失っているのではないか。

「分からないこと」の意味については、本報告書の井上論文に深い考察がある。また、稲原美苗准教授の哲学の観点から「分からないこと」、あるいは「分からないということが分かる」ことの意義についてコメントがあった。「分からないこと」をめぐる集団的な思考を経験できたということは私にとっての大きな学びであった。

第二に、学ぶ能力を信頼してもよいということについてである。

私自身は、KUPI の学生と一般学生と一緒に学ぶ授業の構成に責任をもつ立場であった。授業の冒頭で、一般学生に対して「あなたたちは KUPI 学生を支援するためにこの授業に出席しているわけではありません。あなたたち自身がこの授業で学んでください」と宣告した。しかし、そんなことが本当に可能なのか、どうやったらそんなことが可能になるのか、道筋が見えていたわけでも、自信があったわけでもなかった。授業が進行するにつれて、一般学生が抱えるフラストレーションが私にも伝わってきた。

授業が終わった現在、いくつかの点で改善を検討するとよいと思う部分はあるが、概ねうまくいったのではないかと感じている。一般学生が抱えたフラストレーションの意味に、一般学生自身が気づいてくれるところまでいけたのではないか、という気もしている。一緒に学ぶということがどうして可能だったのかということ振り返ると、学生たち自身の力が条件になっていることに気づく。

教師という立場にあると、どうしても私が意図したことがちゃんと学生に伝わるか、という観点から学びのプロセスを捉えようとしてしまう。その観点から捉えると、実は不満足なことが山ほどある。想定通りでなかったことは、例えば、「みなさんの身の回りでみなさんが困ったり怒りを感じたりするようなことを見つけて、それを民主的に解決することを考える」というテーマで寸劇をしてもらったセッションでは、困ったり怒りを感じたりすることがらをめぐる討議や、民主的な解決とは何かということについての討議が生まれることを期待していた。しかし、そのような討議はほとんど起こらなかった。あったとしたら一般学生間での討議だった。また、ライフストーリーを語り合うというセッションでは、学校教育の経験の差異がクローズアップされてお互いに実感を伴った相互理解が生まれるということを期待していた。しかし、実際にはそのようにならなかった。彼らがお互いに見出したのは、差異よりも共通点であった。どちらのセッションも、私の想定通りの学びにならなかったという観点からは成功とは言えない。

けれども授業が進むにつれ、学生それぞれが何を学んだかということのほうがより重要

だということが明確に感じられたし、教師中心の観点での評価に意味がないという実感が生まれた。学生たちは、自分たちで学ぶ意味について模索し、自らその答えを見つけようとしていたように思う。教師の意図とは関係なく、授業における相互行為から学生が自らの必要に応じた学びを得ていくということがはっきりと分かる展開だった。授業では、教師と学生、KUPI 学生間、一般学生間、KUPI 学生と一般学生の間などで、多様な相互行為が展開された。そこに学びのモチベーションが生まれ、それぞれにとっての必然的な学びに落ち着いたとすることができるのではないか。このことは、本報告書に明確に表れている学生たちの感想や思考の多様性が、何よりの証左になっているように思う。

授業の最後に、KUPI 学生と一般学生両方に対して、「学びあう」とはどういうことか、という問いを投げかけた。主に KUPI 学生が一生懸命答えてくれて、中には心に響く回答もあった。しかし、私自身、「学びあう」という言葉を安易に使いすぎていたのではないかという気がしている。学生たちの学ぶ力を真に信頼することなくしては、「学びあう」授業など構成しようもないのだ、という気づきがあったからだろう。

このプログラムは、実践研究として行われている。試行錯誤の連続が研究なのであり、つまり学生だけでなく、教職員もまた学びの過程の中にいるのである。「できて当然」「分かって当然」「ちゃんと伝わってなんぼ」という強迫観念と、優しく和やかな雰囲気の中でたたくいながら、来年度以降も「学びあい」をつくり出していくことができたらと思う。

② 赤木和重

水曜日に、【人間と発達「自分のことを話し合おう！：当事者研究のススメ」】を、10月2日、9日、16日と、3回にわたって担当した。正直に言えば、やってみる前はドキドキで、本当に授業ができるのだろうかと不安だった。しかし、それは杞憂であった。KUPI 学生の熱心な受講態度のおかげで、とても楽しく講義をすることができた。

1回目は、「Yes and」というインプロを用いた肯定的コミュニケーションについて、2回目・3回目は、「当事者研究」という手法を用いて、自分たちの悩みを出しあって研究するという講義を行った。

これらの3回の講義を通して、私が学んだことは、コミュニケーションの原点は、「聴いてもらえる」という信頼感にあるんだ、ということ。もちろん、「上手に自分の気持ちを伝える」という発信力も大事だ。しかし、自分の表現がひらかれるときには、「相手が聴いてくれる」という信頼感があるからなんだ、と KUPI 学生の聴く姿勢を通して感じた。

来年度も、「難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことを愉快地」というモットーで、授業を深めていければと思っている。

③ 稲原美苗

KUPI の受講生の方々に哲学をどのように伝えようか、色々試行錯誤しました。初めての試みだったこともあり、満足いくものができたのかどうかと尋ねられたら、疑問ですが、自分なりにある程度伝わったという実感があります。メンターさんにどのように助けていただくのかということをもう少し打ち合わせをしても良かったのかもかもしれません。

私自身が障害当事者だということもあり、障害と共に生きるために、自己や多様性を考えてもらうようにしました。障害を直接はテーマにしませんでしたが、考えてもらったのでは

ないかと思えます。

アートや音楽などを使って自分の考えていることを表現することを試してみました。ワークショップ置くことで、自分を俯瞰できることもあったと思います。受講生の皆さんが主体的に発言できるような工夫をもう少し考える必要があったように思います。

④ 大田美佐子

私は3回ほど音楽文化史の授業を担当させて頂いたのですが、伝えることの原点を考える機会になり、ドキドキもしましたが、私自身貴重な学びになりました。KUPI生の授業では、「本当に何が伝えたいのか」が問われるのです。たった3回の授業でも、KUPI生とメンターの学生、それぞれの個性をきちんと覚えています。そして、赤木先生の修了式の挨拶での言葉「知はすべての人に開かれている」ことを私自身も実感しました。

[当日の授業を終えて]

ひとりひとりが本当に生き生きと自分と音楽との出会いを表現してくれて、私自身が音楽とこれから末長く向き合っていくうえで、大切な忘れがたき機会になりました。こういう試みを積極的に社会に発信している同僚の先生、仲間を本当に誇りに思いますし、私自身もこういった試みの末席に関われることを心から光榮に思いました。

KUPIの授業の特徴ともいえるのは、受講生をサポートしているメンターの学生さんとの授業中の対話や、先生方、授業のふりかえりに関する支援のあり方です。その点は、単に授業を提供するだけでなく、生涯学習や特別支援級の教育の研究が活かされている素晴らしい点だと思えます。

今回のKUPIでは、美術界では著名な対話型鑑賞の「音楽」における試みとして準備しました。音楽の世界を開くときには、まずは、感じてもらうことが大切ですね。グレゴリオ聖歌から現代日本語聖歌、笑いのしかけとしてのオペレッタ、植木等までと、皆さんと一緒に対話しつつ、様々な音楽を聴きました。

最後は、みんなで共に歌う時間。選曲迷いました。音楽を「共有する」ということを第一に考えると、共に歌える音楽はクラシックではないし、自分の引き出しに自信がないので、「翼をください」と長男が喜んで練習していた「LEMON」。楽譜を見て歌う受講生も見ないで歌う受講生もいましたが、楽譜という存在は即興演奏とは別に、ひとりひとりが思い思いの角度から音楽に向き合う基盤を与えてくれるものだ、ということもあらためて感じました。私自身はクラブ活動が苦手で、合唱も吹奏楽も縁がなかったのですが、「共に歌う」ことのすばらしさや歌う喜びをあらためて感じました。

私にとって忘れ難いのは、ひとりひとりの受講生の輝く個性でした学ぶことの喜びをこんなかたちで分かち合うことが、いつもの授業でできているのか、と反省してしまいました。ヴァイルの世界もKUPIで、彼らとなら、深く共有できると思えました。もっと現代の音楽も色々と工夫次第で、自分の力不足も含めて、アプローチの方法を考えなくてはなりません。ここからどんどん進化できると、私自身が励まされました。

⑤ 岡崎香奈

- ・本プログラムにおいて、黒崎コーディネイターの役割が大変重要であったと思われる。教員や学生および学生メンターの間を調整し、迅速かつ的確な運営がなされていた。

- ・学生メンターの存在は、本プログラムの学生や教員とを繋ぐ役割をもち、またメンターとプログラムの学生達に相互的学びが生成していると感じた。
- ・教員としては、KUPI が聴講生プログラムであったので、成績付けを気にする必要はなかったが、もしこれが科目等履修プログラムであったら、どのように成績を付けたらよいか、悩んだかもしれない、と思った。
- ・個人的な意見であるが、1 回インフルエンザのため休講にしたため、次回からは予備日が設けられているとありがたい、と思った。

⑥ 渡部昭男

- ・事前にシラバスをみられて 0～1 歳のアルバムを月齢ごとに作ってこられたご家庭がありました。私の準備したスライドと呼応・共鳴し、随分と盛り上がりました。感想では「色々と研究をしてみても神戸大学に勤務したいなあ…」と書いてくださっています。反響が大きくて嬉しいです。
- ・大学生や大学院生にない反応や質問として、月齢を当てる際に、髪の色や濃さや、身体のむっちり具合なども指摘してくれて、こちらも新鮮に感じました。
- ・「葵徳川三代」を事前にすべて録画しておいて子どもが生まれるシーン 3 種を抽出し、推理したり、清少納言の枕草子「うつくしきもの」の赤ちゃんの月齢を総合判定したり、教材作りには時間もかかり苦労しましたが、手応えを感じました。
- ・「奇数月」でぴよんと進む感じ＝階段状の発達について話しますと、「偶数月はどう変化するのか気になった」という鋭い指摘もありました。

⑦ 川地亜弥子

「人はなぜ書くのか」をテーマに 1 コマの授業を行った。KUPI プログラムの中では、最終回から 1 つ手前という、とても重要な時期に授業をさせて頂けたことに感謝している。

冒頭に、子どもの書くことと、描くこと・語ること・動作との密接な関係（癒着）について講じた。次に 30 分程度で作品を書いてもらった。題材をいくつか例示したが、自由題で書くことももちろんよい、とした。なかなか書けない KUPI 生もいたが、メンター生と話す中で、全員が書けた。また、メンター生も全員書いた。最後に、この講義で読んでよいと述べた KUPI 生の作品を全員で読み合った。

強い印象を受けたことが 2 つある。(1) 読み合いの場面での KUPI 生の変容についてと、(2) KUPI 生とメンター生のかかわりの中で作品が生まれたことについてである。

まず、一つ目の読み合いの場面について。

90 分の講義時間内におさめるためには 2 人分しか読めないと判断し、その旨全員に伝えた。このとき、要望や不満は出なかった。読み合いそのものは短時間でシンプルなものであった。提出された作品をパワーポイントに入力し、スクリーンに映し出し、まずは講義者(川地)が声に出して読み、みんなからの質問を受け、作者に伝えてもらい、味わい、最後に作者が声に出して読んだ。

読み合いの過程で、教室の雰囲気が変わった。1 人目の作品を読み合い終わったとき、他の KUPI 生から「いつ (パワーポイントを) 作ったんですか…僕も (読んでほしい) !」の声が上がり、別の学生も「次は僕 (の作品を読んでもらって、前に出て質問にこたえたい)」

と強い意志を見せた。学生の意欲や作品の位置づけがガラリとかわったのだ。大胆に言えば、「書きなさいと言われて書いた学生・作文」から、「みんなに読んでもらう作者・作品」への転換である。もちろん、作品そのものは書き終わっているもので、その内容が変わるわけではない。参加している KUPI 生の中での「書くこと」や「書いた作品」のとらえ方が変わったのではないか、ということである。

90 分の講義時間を延長し、希望者全員分を読んだ。誇らしげに質問に答える学生もいれば、緊張しながら丁寧に答える学生もいた。読まれたくないけれど、PPT には入力してほしい、という学生もいて、もちろんそのようにした。

これまでも、他の講義で受講生の感想を読んできたので、「今回も喜ぶ学生がいるのではないか」とは思っていたが、今までは、半期の授業の終盤になってから「実は何度読まれたか数えていました」「友達と一緒に喜んでいました」と伝えに来てくれて初めて分かる、というものだった。授業のその場でこんなにもダイレクトに「読んでほしい」という意欲を表してくれたことに感動した。私にとってもとても貴重な経験であった。

次に、学生同士のかかわりのなかで生まれた作品について。一つの作品を引用する。

題 「新しいつながり 入学のゲート みんなの守り」 (N・R)

10 月から初めて会った

メンターさんに相談したから希望の光がみえた

しんらいが進化をエールをくれた

(※このあとに、イラストが描かれていた。)

N・R さんはなかなか書くことが決まらず、メンター生と話し込んでいた。提出したのも最後であった。読むと、今回の KUPI での学びが見事に作品に結実していた。1 行目と 2 行目の間にある時の流れ。最後の行の力強さ。簡潔な作品に感動した人は私だけではなかったと思う。

彼以外にも、メンター生と話しながら、何を書くか決めた KUPI 生がいた。一方、自分の力でどんどん書ける KUPI 生もいた。書く能力の高低という発想は好まないが、もしそのようなまなざしで学生を見るならば、一人でたくさん書ける人の方が、書けない人よりも能力が高い、ということになるのかもしれない。しかし、この作品を読み、そうした発想は人間にとっての書くことのおもしろさ、生まれてくる作品のおもしろさを半減するのではないかと感じた。

人はなぜ書くのか。それは、能力があるからでも、課題を出されるからでもなく、一緒に語りあい、読みあう人がいるからであり、読んでもらい、語りあいたいことが生まれるからではないか、という授業のテーマについて、(少なくとも私は) 体験的に学ぶことができた講義であった。KUPI 生やメンター生にとっても、何か発見や感動がある講義であったことを願っている。

2) メンター学生

① 片矢理子

今回 KUPI にメンターとして参加したことは私にとって、学びを支えるという立場から学びについて考え直す機会となった。私が本プログラムにメンターとして関わったことを通して考えたのは、学ぶことと生き生きすることとの関係性について、また学びのあり方の多様性についてである。

前者に関しては、本プログラムへの参加を通して、多くの KUPI 学生の表情や発話が、授業回数を重ねるごとに生き生きとしていく様子を感じたことから考えたことである。これはもちろん、それぞれの KUPI 学生が、仲間同士の関係性、またメンターとの関係性においても打ち解けていったためでもある。しかしそれだけではなく、「学ぶ」ことが中心的な目的となる授業場面やその振り返りにおいて、前向きな姿勢が示され続けたり、またより積極的になっていく様子が見られたことは、KUPI 学生が学びの場に居ることを心地いいと感じていたことも示唆すると考える。そして、この学ぶ場における居心地の良さが生まれていたのは、KUPI 学生にとって今回の学びが、身近でありつつも新しい世界であり、そこに挑戦し取り組んだ感覚をもたらすものであったためであると考えられる。そのために、取り組んだ感覚、つまり自ら学び取ったという自己効力的な感覚が、授業に参加することへの動機を一層主体的なものになることを促し、KUPI 学生はより学びの場面で生き生きとした様子を示すようになっていったのではないかと考える。この学びの場で生き生きとしたという経験は、KUPI 学生が本プログラム終了後も自らの意志で学んでいくことを促すのではないかと期待される。

後者の学びのあり方の多様性に関しては、同じ授業を履修しても、各 KUPI 学生の個性によって様々な受け取り方や学び方がみられたことから考えたことである。特に授業の受け方については、終始メモを取ることに執心している学生もいれば、自分が予め何を知っていて、自分が何を言えたかということをもっと大事にしている学生も見られた。実はそのような学生に対しては、ずっとメモをしていては話が頭に入らないのではないかと、や、何を知っていたかよりも新しく何を知ったかが大事なのではないかと、といった心配もあった。しかし一方で、その成果が知識の習得率に集約されるような学びの枠組みから外れて見てみると、前述したような場面では、自分の納得のいくやり方で挑むことや、学びの場において自らが果たした役割を確認することを通して、授業の内容そのものではないこともまた学ばれていたと捉えられる。このように、本プログラムでは、同じ授業から同じことを学ぶことを求められ、一律の軸で評価されるような場面では見落とされてしまう、より多様で内的な学びが尊重されていたと言える。またそれが可能になったのは、KUPI 学生自身の、授業という場面に拘束されきらない、のびのびとした振る舞いがあったからだと考える。

本プログラムに参加したことで私自身も学びについて問い直すきっかけとなり、さらに本プログラムを通して KUPI 学生の個性に触れ関係性を築くことができたという点で、実りの多い4ヶ月間であった。

② 浅見 和

今回 KUPI のプログラムに参加して、KUPI 生と一緒に授業を受けて最初に衝撃だったのは、授業に積極的な生徒が多かったことである。自分が大学で受けている授業では、学生

は基本的に受け身で静かに授業を受けているイメージがある。しかし KUPI 生は、授業で気になるところで質問したり、自分の知っていることを共有したりということを進んで行う姿が見られた。ただ一方で、先生からの質問に対してもなかなか答えることができないという様子の生徒もいた。メンターとして横についていて、どこが分からないのかとかを尋ねようと思ったが、言葉が少ない KUPI 生に対するアプローチは難しかった。しかし、回数を重ねるにつれて、どの KUPI 生も感想などをしっかりと表現できるようになってきて、それは非常に驚いた。初めと終わりで全然違う姿が見られた生徒については、感慨深いものがあった。そして、KUPI 生とメンター、KUPI 生同士の仲も深まっていくのが目に見えて分かった。数か月という短い時間であったので、これからまだまだ仲良くなれるというタイミングの別れで非常に寂しい。ただ KUPI 生が、この先風当たりが強いことも多いであろう社会の中で、今回参加したこのプログラムで得たことを活かして乗り越えていくことを期待したい。

もう一つ印象的だったのは、卒業式で KUPI 生の保護者の方の一人とお話していたときのことである。その方は、今回のプログラムに子どもを参加させたことで、自分が今まで子どもに対して過保護であったことに気が付いたようだ。大人になった子どもを、一人で出かせたことはないし、レストランでメニューを決めるにも口をはさんでは自分で決めさせてこなかったそうである。今回、プログラムから帰ってくるたびに、神大のカフェで食べた晩御飯の話やみんなで出かけた商店街の話聞かせてくれる子どもを見て、初めて自分でメニューを選んだり家族や引率なしに出かけたりできたことに感動したそうである。入学が決まったときは、諦めていた大学に行くということが現実になり夢のようだったと聞いた。もちろん不安も大きかったが、神戸大学の学生に対する信頼もあり、今では本当に良かったと感じているそうである。このプログラムには、そのような自立支援の面もあったのかと気づいた。ただ学ぶ楽しみを発見するだけでなく、社会で生きていくスキルを学んだり、親の手から離れるきっかけになったり様々な意義があると知った。保護者の方の生の声を聞いたのは初めてだったので、感じていたことや考えたことなど色々聞くことができてよかった。

最後に、このプログラムは KUPI 生だけでなく、私たちメンターにとっても意義のあるものであったということを知りたい。KUPI 生の一人ひとりが違うのは、私たちメンターが一人ひとり違うのと同じことであり、回数を重ねるにつれて KUPI 生とメンターというくりがなくなってきたように感じる。そして普段の講義では気が付かなかった、ここが分かりづらいとかここで困難を感じる人がいるということに気付くことができ、様々な視点から捉えることの重要性を知った。本当に参加してよかったと感じている。

③ 宮村真菜

私は今回、神戸大学で初めて行われた取り組み「学ぶ楽しみ発見プログラム」に、メンターとして参加した。わずか4ヶ月間という短い期間だったが、知的障害を持つ青年たちと共に学んだり交流したりする活動を通して、KUPI 生をサポートする立場だった私も大きく成長することができたように思う。

私がこの KUPI という取り組みについて知ったのは、講義のゲストスピーカー、河南先生のお話を聴いたときである。神戸大学でそのような取り組みができることに驚き、「面白

そうだからやってみるか」というくらいの軽い気持ちで、友人と共に授業後に河南先生に声をかけたのが始まりだった。KUPI の活動に参加してみたいという私の意見を河南先生が快諾して下さい、この取り組みに参加できることになったが、これまでに知的障害のある青年と関わったことがほとんどなく、障害を持つ青年たちと仲良くなれるだろうか、メンターとして上手くサポートできるだろうかなど、当初は不安が尽きなかった。

今思い返してみても、正直に言って、私が上手く KUPI 生のサポートをすることができたとは思えない。水曜日プログラムの授業は私にとっても難しく、「どういうこと？」と尋ねられたときに、分かりやすく説明できないことがたくさんあった。また、困っている KUPI 生がいることに気づくことができなかつたり、気づいていても、メンターとしてどのようにサポートしたら良いのか分からなかつたりすることもたくさんあった。

しかし、私にとって、KUPI を通して知的障害のある青年たちと関わること、関わり合いを通して KUPI 生もメンターも成長していく様子が分かることは本当に楽しいことだった。最初はみんな緊張し、言葉をかけることすら躊躇われる様子だったが、回数を重ねるごとに、KUPI 生同士、KUPI 生とメンターとの距離が縮まってきているのを感じられることが嬉しかった。授業で言葉を交わすようになることで、休み時間に話すことが増える。そうして仲が深まってくると、授業中の発言量が増えたり、発言内容が深まったりする。振り返りシートに書かれるコメントが「楽しかった」「難しかった」といった画一的なものだけでなく、個人個人がその日感じたことを表現するように変わっていく。

1 回 1 回の変化はそこまで大きくなかったかもしれないが、全てのプログラムが終了した今になって振り返ってみると、プログラムに参加した全ての人が、入学式の日から大きく変化、成長したように感じられる。

私自身が成長した点としてまず挙げられるのは、「言葉がけの仕方を意識するようになったこと」である。KUPI 生と関わることを通して、普段自分がいかに曖昧な日本語を使っているのか、伝わりにくい表現をしているのかということに気づかされた。そのため、言葉をかけるときに(KUPI 生に限らず)、できるだけはっきり話したり、具体的に伝えたり、表現を簡潔にしたり、一回で聞き取れる程度に情報量を調整したりするように工夫するようになった。このことを意識するようになってから、心なしか KUPI 生との会話のラリーが長く続くようになった気がする。将来小学校の教師になりたいと願う私にとって、このような力は非常に大切になると思う。成長した点としてもう一つ挙げられるのは、「障害のあるなしを超えた人付き合いができるようになったこと」である。それは、彼らの障害特性が全く気にならなくなったとか、彼らが障害者であることを全く考えなくなったとか、そういうことではない。そうではなくて、「障害があるのは分かっている、それでもみんな 1 人の人間として面白い！」と思えるようになった、ということである。人の面白さは障害のあるなしでは判断できないことに気づいた、ともいえるかもしれない。KUPI で出会った人たちみんなが、私にとっての大切な友達になった。このことが自分の中で最も大きな変化、成長だった。

もちろん、メンターとして活動する中で、上手くいかなかった部分、どうしたら良いのか分からないと感じた部分もたくさんある。それは例えば、上記で述べたように、KUPI 生が困っているときにメンターとして上手く支援できなかったことや、KUPI 生同士の関わり合いが円滑になるようにメンターとして上手く間に入れなかったこと、よく話す KUPI 生

とそうでない KUPI 生の差が広がってしまったことなどである。これらの点については、自分に残された課題点として、今後の大学生活や来年度の KUPI の活動において改善策を模索したい。

④ 加戸友佳子

KUPI のメンターとして参加した当初、知的障害のある青年の、仲間と議論することに対する意欲はいかほどのものか、という不安を少し持っていたのだが、プログラムの 1 回目、全くその心配がないことがわかった。むしろ話したくて仕方がない学生たち、寡黙に見えても意見を求められれば答えることのできる学生たちばかりだった。通常、大学生や大人を相手にしたディスカッションの場合には、興味や関心をひきだし、発言をしてもらうために腐心することが多いが、KUPI 生たちは、「ひきだす」までもなく、すでに内に秘めたものを持っていた。そのおかげで進めやすくなっていた部分は相当あると思う。どのようなテーマでも、必ずすぐに発言する人が出てくるし、こちらがストップをかけるまで、議論の内容が「出尽くす」ことはあまりなかった。

メンターの井上さんが提案してくださったコミュニティボールは、とてもうまく機能していた。ボールを持っている人にもみ発言権がある、というルールだが、KUPI 生たちはルールを遵守していたし、傾聴もできていた。議論の場面ではこのようなルールは破られやすいものだが、KUPI 生たちは、異なる意見でも感情的な対立をおこさずに議論をしていた。おそらく様々な現場で対話を試みる人であれば、理想的であると評価するであろうような状態が生まれていた。これはボールを使うなどの対話の技法の工夫や、丁寧に共通認識を確認し、段階を踏みながら時間をかけて議論を進めることによって可能となった部分はもちろんある。だが、彼・彼女らの元来の理性的な部分が大きく発揮されていたことは間違いないであろう。時間をかけた議論は体力や精神を消耗するものでもある。多くの KUPI 生が仕事の後の疲れた状態で来ているが、それでも感情的にはならず、丁寧な議論をすることができていることには感心させられた。

プログラム中の KUPI 生の成長も感じられた。自分の主張を強くしていた学生が他人の意見をよく聞くようになったり、言葉が出るまでに時間のかかっていた学生がすぐに意見を言えるようになったり、他人の意見と自分の意見の違いにどう折り合いをつけるか悩み始める学生もいた。これらはとても重要な変化、気づきであると思う。

KUPI のプログラムに参加していて、夜間中学を思い出した。夜間中学は義務教育の機会に恵まれなかった多様な人々が通う学校だが、そこに通う学生は積極的に学ぼうとしていて、教師もやりがいを感じていることが印象的だった。夜間中学の活気は、KUPI の学生たちの意欲にあふれた様子とても似ていたのだ。

高等教育は専門知識の教授も重要だが、それよりも思考様式や研究技法の獲得という側面が強くなるものと考えられる。特に金曜プログラムで学生たちが獲得したのはコミュニケーションの技法であろうという印象を持った。他者の意見を聞くこと、議論のプロセスをしっかりと踏むこと。KUPI 生たちは元来かなり理性的だったが、出された結論に対しては皆が納得し、決定に従っていた。

このような知的障害の青年たちに対する高等教育は必要であると感じた。その理由は何よりも、彼・彼女らがそのような機会を求めている、ということが、プログラムの中で感じ

られたからである。そして、彼・彼女らのような青年が社会における意思決定に参加することにつながりうるからである。対立を深める現代社会において、それは大きな意味を持つのではないかと思う。

⑤ 藤井令奈

私は今年始まった「学びの楽しみ発見プログラム」にメンターとして参加した。最初は長いように感じていた4ヶ月のプログラムは、実際に KUPI 生のみんなどともに過ごしてみると驚くほど早く過ぎ去っていったように思う。

このプログラムを知ったのは授業中に紹介された時だ。「ちょっとやってみるか。」くらいの軽い気持ちで参加した。私は障害を専門に勉強しているわけでもなければ、それまで知的障害を持つ方と関わったこともなかった。学生としてくる彼らがどのような存在であるのか、またプログラムがどのようなものになるのかまるで想像がつかず、少し不安な気持ちを抱いていたのを覚えている。

メンターの仕事はとても難しいものであった。KUPI 生が授業を理解できていない時には適度に援助することが求められていたが、彼らが理解しているかどうかの判断や先生が話されている途中で口を挟んでいいものかなど様々な悩みがあり、うまく立ち回ることができなかった。

授業は最後まで難しかったが、KUPI 生のみんなどと話すことはとても楽しかった。最初は個性が強すぎて何を話して良いかもわからず戸惑っていた。しかし授業中や休憩時間に話を重ねるうちに、互いのことが次第にわかるようになった。最初は話しかけてもあまり反応を返してくれなかった人の笑う姿がたくさん見られるようになって嬉しかった。笑顔だけでなく、KUPI 生はプログラムに参加して様々な面で良い方向に変わっていったように思う。

このプログラムのおかげで私自身も変わっていった。KUPI 生のみんなどを知的障害者である KUPI 生の一人としてではなく、一人の友達としてみるようになった。初めの頃はどうしても障害者であるということが念頭にあったが、プログラムが終わる頃には障害特性等を意識することなく普段通りの私で接するようになっていた。知的障害者との関わり方がわからず話しかけられなかった頃の私とは大違いである。また、KUPI 生と話したり先輩メンターの考え方や姿勢を見たりすることで自分の障害者や学びに対する意識が変わっていった。このプログラムにメンターとして参加して人として成長できたように思う。最初の年ということでメンターも先生も探り探りなところがあったが、このプログラムが毎年続き、また他のところに広がって行って、知的障害者の人々の学びの場が増えていくと嬉しく思う。

⑥ 大谷 和

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラムとは、神戸大学で行われる、知的障害や発達障害のある人たちに高等教育卒業後の学習機会を作ることを目的に行われたプログラムである。大学教員の専門性を生かした体験的な学び、対話を重ねて意見を分かち合う機会、大学生と共に学ぶ機会が設けられている。そこで学んでいる学生は KUPI 生と呼ばれる。私が関わった火曜日は、大学生の履修科目の講義の中で、一般学生と KUPI 生とが同じ授業を受け、

共に学ぶプログラムであった。本レポートでは、一般学生と KUPI 生が共に学ぶということにどういう意味があるのかについてメンターとして感じたことや考えたことについて述べる。

私は活動を通して、自由な振る舞いが許される場であると感じた。これまで KUPI 生も一般学生も同様に、社会に適応しようと生きてきた経験が少なからずあるはずである。社会の規範から少しでも外れることは良くないことだとして捉えられ、規範を外れた者は排除される。授業を例に考えると、特に一般学生は、手を挙げて発表するなんて恥ずかしいし、人の目が気になる、見当違いの答えを言ってしまったらどうしようという思いを持っている学生も少なくないと思う。しかし、KUPI 生が手を挙げて発言し、皆が思いつかないような角度からの意見に共に驚嘆し、時には面白い回答で共に笑い合い、場が和むことも多かった。場が和む中で、ひとりひとりが受け入れてもらうことができているという感覚がそれぞれに生まれ、「わたし」という存在が授業に現れてきたのではないか。また、授業を重ねるにつれて、KUPI 生の中で立って授業を受ける者、教室を出入りする者も出てきた。しかしそれは決して良くない振る舞いではない。皆が受け入れてくれる、自由な振る舞いが許される場であるからこそ、我慢をする必要がなかった。その空間の中で自分自身の休憩時間を決めながら、自分のスタイルでゆっくりと授業を受けることができたのではないか考える。また、ライフストーリーも、「わたし」でいることができる場であったからこそ、語ることができたのだと思う。「わたし」を話してくれるからこそ、相手の話を聞こうと思えたのだと思う。

その空間の中で一般学生は、これまで当たり前であると思ってきたことと、今回授業で体験したこととの間で、葛藤しているかもしれない。今すぐにではなくとも、たくさんの経験を積み重ねていく中で、今回の経験を思い出し、立ち止まって考えることがあるかもしれない。私は、今までの授業に対しての考えや、障がいを持つ人への考えが必ずしも変わる必要はないが、自身が少し立ち止まって今までの経験を振り返る時間が大切であると思う。一方 KUPI 生は、ライフストーリーを聞いて感じたことでもあるが、自身の個性を社会の中で受け入れてもらえなかった経験をしている人が多いと感じた。その中で、自分を受け止めてくれ、時には笑い合える年齢の近い存在がいることで、閉ざされていた「わたし」が開けたのではないか。ライフストーリーの中で夢を語っている KUPI 生の存在や、2月5日の皆の笑顔を見てそう思えた。さらに、一方的な会話が多かった KUPI 生が、受け入れられる経験をすることで、授業終盤には相手の方を向いて話を聞き、受け入れようとする姿が多く見られた。たくさんの他者と関わる中で、他者に受け入れてもらうこと、それに応答しようとして他者を受け入れることという大切な感覚が対話の中で生まれてきたのではないかと感じた。

はじめ私は、「面白そうな取り組みだな、お手伝いできることがあればお手伝いしたいな」という軽い気持ちでメンターに参加した。メンターという立場ではあるが、自分自身も共に授業に入り込み、KUPI 生、一般学生の言葉、変化に多くを学んだ。また KUPI 生の振る舞いや言葉で和やかな気持ちになることが多かった。大学院生になって、新たな人との出会いが増えた。その中で、相手の人の様子を見ながら、その場に合った適切な言葉を紡いでいかなければいけない場面も増えた。特に元々自分の思ったことをあまり考えずに言うタイプであったので、言葉を紡ぐことに疲れることもあった。しかし、KUPI 生の授業で

の私が予想もしていなかった面白い発言や、自分の興味を楽しそうに語っている様子を見て、「わたしはわたしの思いをありのまま伝えればいいのだ」とまた思えるようになった。KUPI 生との出会いによって、生き急いでいた人生を一度立ち止まることができた。今回の授業での出会いを大切に、今後も KUPI 生と会話時には対話を楽しんだり、遊びに行ったり、ゆるくつながっていきたい。

⑦ 山崎朋香

私は火曜日、5 限、社会教育課題研究のメンターとして今回のプログラムに関わった。一連の講義に参加して感じたこと考えたことを内省したいと思う。

私はこれまで、ガイドヘルパーとして障害者の余暇の時間に多く関わってきた。その多くの人は養護学校を卒業してから作業所などに通っている。知的障害者が大学教育を受けることについて、これまで考えたことがなく、このプログラムを知ったときはかなり衝撃を受けたことをはっきり覚えている。正直に言って大学と知的障害者がスムーズに結びつかなかったからだ。

実際に今回のプログラムが進むうちに感じたことは、教育とは学びとはいったいなんののだろうか、講義が進む中で毎回私の中でかなり揺らいでいった。私はどこかで、大学生と知的障害者とが学び合うことの意味を、分かりやすい形で、答えとして見出したかったのだと思う。

KUPI 生にとってこのプログラムを受けることはその内面にしっかりと残る経験であったのではないかと感じている。みな一様に様々なことを考えて感じている。自分の考えを自分の言葉で話すことを授業や振り返りの時間では繰り返し求められる。そこで表面に出てくる言葉は氷山の一角で、その下には膨大な感情や考えが生まれているのだと講義が進むにつれて私は感じた。しかしそれは本人のキャラクターや人歴も含めてある程度の情報を知ったうえで、想像力を働かせゆっくりと質問を繰り返すことで浮かび上がってくる。表面上にはとても分かりづらいものである。中々表出しにくい故、神戸大生との抗議の中で、それを相手に伝わる形ではなかなかフィードバックできないように思う。そのことが一貫して難しいと感じた点である。学びに対して個々のスピード、範囲、対象、深さも、それぞれかなり違っている。それぞれに応じた時間と対応が必要なのだと感じた。

ある KUPI 生がライフストーリーを語る事前準備の講義の時に、温故知新と自分のノートに書いてあるのを目にした。彼にどうして温故知新なの？と質問してわかったことは、昔の自分の歴史を語ることで、それは新たな自分を作ることになり、新たな自分を知ることになるのだと思ったからだと教えてくれた。ライフストーリーを語るということを彼の視点で捉え直してそう表現した、彼の学びに私は脱帽した。障害者とともに学ぶことは、こうだったことなのだと私自身でもってそこに確かに可能性を感じたのだ。

これまでの経験の中で、知的障害者は俯瞰視点で物事を捉えているのだと感じたことがある。それが偶然なのか必然なのかもはっきりとはわからない。ただ言えることは、ひとりひとりユニークで異なる見方をしているということだ。違った見方があることを体感し理解することに互いの学びとして意味があるのではないか。学びの保障として、これらがどこまで通用するのかわからない。必ずだれにでも当てはまる学びがそこにあるのかという点では弱いと思う。でも、そもそも大学での学びとは、そういったものなのかもしれない。

学ぼうとする意欲なる人が勝手に学ぶのが大学の学びであるのだと私は実感しているからだ。

そのほかの講義の中で感じたことを誤解を恐れずに言うならば、知的障害者その時々で社会性を身につけることに対して課題を抱えていることが多いと思う。講義の中での周りの配慮が、機嫌をとることになっているように感じることもあり、それは社会性を学ぶチャンスであるはずなのに必ずしも良いことのように思えず残念に感じてしまうことがあった。時間に限りもある大学の講義を円滑に進めるために必要なことであることはわかる一方で、大人になるために成長をするために必要な振る舞いや態度を学ぶことは、学びという範疇の中で、違う類のものなのだ改めて深く考えさせられた。

大学生と知的障害者が共に学ぶことの意味として私の中での明確な答えは出ていない。しかし、それこそが答えなのだと思う。大学に知的障害者がいる風景というのは確かな意味があると私は感じた。大学は新しい発想を自由に生み出す場であるはずだ。行き詰ったと感じた時には、見方を変えることは、新しい発想やアイデアは出口を見つけるきっかけになり得る。行ったり来たりしている中で答えはおのずとみえてくると信じている。今後のプログラムの発展に大いに期待したい。

最後にこのようなメンターとしてこのプログラムに関わらせていただいたことに心から感謝したい。学生として講義を受けるだけでは感じることはできなかったことを、プログラムの表側と裏方の両方に参加することで多くの人の丁寧な対応や、学習の意図するところなどを違った視点から深く考える時間を持つことが出来た。これは毎回私自身にとって貴重な学びの連続であった。今後の学習にしっかりと生かしていきたいと考えている。

⑧ 森田清美

〈要約〉

最初は不安と戸惑いのうちに始まったメンターとしての活動は、知的障害のある青年の姿について実際に関わる中で理解を深めながら、どう支えていくかを常に考え、試行錯誤を重ねていった。その中で、メンターの役割、存在意義、青年たちとメンターとの関係についての自分なりの答えが生起し、回を追うごとに変容していった。この経験は自分の認識を常に省察する機会であった。経験を通じて、知的障害のある青年に対してや、知的障害のある青年と関わることにに対して自分が抱く印象が実感を伴って明確化されたこと、自分自身の考え方やふるまいの変容が起こったことは私自身が得た影響と学びである。このことから、知的障害のある青年とメンターとして関わることは、メンターから青年へ、一方的に影響を与えるのではなく、相互に影響し合い、相互に学びを生むものであると、関わりについての意味を見出した。

〈プログラム始動前の不安・戸惑い〉

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム (KUPI) のメンターになることにもともと強い意志があったわけではない。自分の関心に重なるところがあり、面白そうだと感じたのがきっかけである。そのため事前にこのプログラムについて、またメンターの仕事について詳しい話は聞いていなかった。これまでの大学の授業で知的障害について学ぶことは多くあったが、私にとって知的障害のある青年との長期間にわたる積極的な関わりはこれが初めてのことだった。最初は、KUPIの学生がどのような障害の程度で、どのような得意・不得意が

あるかということと、メンターとしてどういったことをすればいいのかということが分からず不安と戸惑いが大きかった。

〈各回における経験と変容の記録〉

ここでは各回における経験とそれにより、自分のメンターとしての活動に対する認識の変容や彼らと関わる際の視点の変化について、第1回から第14回までの授業を考察したい。

第1、2回目の授業では、コミュニケーションについて、先生の説明の中で難しそうな事項について説明することと、対話練習の相手になることが主だった。この2回において、私は「話し方」についてとても迷った。KUPIの学生の年齢が分からなかったため、一律で敬語を使うべきなのか、使わないべきなのか、あるいは相手の年齢によって変えるべきなのか迷い、きつとぎこちない話し方になっていただろう。対話練習がまるで自分の対話練習のように感じられた。迷っていては上手く話せないままだと思い、第3回からは「一律で敬語を使わない」という選択をし、最後までそれを貫いた。普通、年上の方には敬語を使うべきである。しかし、「KUPI学生には大学生活というものを経験してもらいたい。」という河南先生の言葉を聞き、同回生のような関わり方が彼らと接する上でふさわしいのではないかと私なりに結論付けた。これにより、「メンターは教える側、KUPI学生は教えられる側」という関係が、「共に学び合う」というような関係に変容して、自分の中にあつた違和感がなくなった。第3回からは徐々に関係に落ち着きが見られ始めた。

第3回の授業はグループで悩みについて研究するという内容だった。メンターは司会として話を進める役割だった。この日のグループのKUPI学生は3名ともとてもよく発言をしてくれる学生だった。グループ分けを聞いた際は、話の盛り上がりには困らないだろうと考えた。しかし、これは誤算だった。結果を先に述べると、話は盛り上がりはなかったが時間がかかった。これには二つの理由がある。一つ目は、KUPI学生にとって説明することの難しさである。自身の悩みについて説明する際、ワークシートに書いた自身の悩みを読み上げることはできた。しかし、それをより詳しく掘り下げたり説明を加えてもらおうとすると、書いたこと以上の説明が難しかったり、端的にまとめることが難しかった。そのため、悩みの説明には時間を要した。また意見を出してもらう際には、その理由について説明することが難しかった。二つ目はKUPI学生にとって人の話を聞くこと、そして理解することの難しさである。話されている話題は他人の悩みである。まず関心を向けることが難しい。そして、自分の経験にないことを想像することが難しい。ゆえに、「悩みに名前を付ける」という段階ではユニークな意見が飛び出していたが、「悩みの原因や解決策を考える」という段階では意見を出すことが難しかったり、悩みの内容について理解する段階に戻ったりして、スムーズに進めることはできなかった。悩みの当事者に意見を聞くと、意見を述べることができていたが、結局他者の出した意見については関心が薄いのか、理解が難しいのか、あるいは自分の意見にこだわりがあるのか、話の各段階において、悩みの当事者がベストアンサーを決める際には、当事者自身が出した意見を選ぶことが多かった。グループで話す際の彼らの言動の特徴についてはこの時初めて把握した。そのためどのような言葉の使い方や話の進め方をすればいいのかということが分からずグループでの話し合いを成立させることができなかった。グループでの話し合いというより私とKUPI学生の1対1の対話を同じ場所で3人で行うという感覚だった。

第4回、第5回の宇宙についての講義では私が全くの専門外であることから、私自身が理解することがまず難しかった。KUPI 学生にとってはなおさら難しかったことだろう。第1回～第3回の授業では先生が KUPI 学生にとって理解しづらそうだと予想する箇所で立ち止まり、メンターに説明の時間を与えてくださっていたが、この2回では90分の間に豊富な説明内容が盛り込まれていたため、メンターが理解を助けるための時間は設けられていなかった。この時は、聞いてこないということは理解しているのだろうという風に考えており、私から KUPI 学生に理解を確認するということはしていなかった。そのため、90分間一緒に授業を聞いて終わるといような関わりであった。ふりかえりシートの授業後の感想にも「分からなかった」と書かれていることが多かった。第1回～第3回ではメンターの役割と時間が与えられていたため、メンターとしてサポートしているという量的な実感があつた。しかし、この2回はそれを感じることはできなかった。このことから、KUPI 学生からのサインを待つのではなく、自分から積極的にサポートしようと思わなければならないと感じるようになった。

第6回の授業では、0歳児の月齢についての授業で、各月齢における特徴の説明の後、月齢当てクイズが行われるという授業展開であった。私は前回までの反省を踏まえ、月齢当てクイズの際に、先生の説明のおさらいをしてから、月齢を考えさせるようにした。しかし、考えた答えの理由を聞いてみると先生の説明とは全く異なる観点から判断していた KUPI 学生がいた。この時自分の説明が悪かったのだろうかと思つたが、グループで考えた後、全体で手を挙げて自分の考えを堂々と答え、先生の誉め言葉と拍手に満足げな表情を浮かべる姿があつた。KUPI の学生にとって授業に求めるものは必ずしも授業内容の理解ではなく、自分の意見を述べることや、授業を受けることそのものであつたりするのだということに気づき、自分が KUPI 学生の授業理解のサポートという立場でしかメンターの役割を考えられていなかったと反省した。「話し方」による KUPI 学生とメンターの関係の認識の変容について先述したが、正確にはこの時まで、「メンターは教える役割である」という考えから解放されていなかったことになる。この後の授業での関わりは決して理解を促す役割を放棄したわけではないが、授業の場に共にいること、意見を話し合うことなど、教えること以外のメンターの役割や存在意義を自分の中に見出してメンターの活動に取り組むようになった。このことはメンターの仕事に対する質的な充足感につながっていった。

第7～9回の音楽鑑賞についての授業では内容こそ難解であつたが、音楽を聴いて感じた印象について KUPI 学生と共有する際、あまり言葉巧みでない学生もいたが、曲を聴きながら足踏みをしたり、手で指揮をとったりする姿は彼らの感じたままの表現であり、言葉に言い表される以上に彼らが何かを感じ取っているという証拠であつた。ゆえに知的障害のある青年によって話されていることだけが彼らの感じていること、学んでいることではないのだということが明らかになった。これまでの授業では私は知的障害のある青年のできない部分、苦手な部分に焦点を当ててサポートしてきた節があつたが、できないことによつて評価されている以上に彼らは力を持っており、できることはたくさんあり、できていないように見えるが実はできていることもたくさんあるということに気づいた。知的障害のある青年の学びを支えるにあたり、できないことよりもむしろできることに気づいて焦点を当てて、それが活かされる機会が阻害されぬよう、または喚起されるよう努めることが重要であると感じた。この後の授業では彼らのできることに目を向けるようになったため、彼ら

の能力や成長への気づきが多くあった。それを紹介していきたい。

第 10、11 回目の授業では、先生が演奏されるピアノに合わせて声を出す音楽、トーンチャイムを用いた音のキャッチボール（トーンキャッチ）、様々な楽器を用いた演奏などを通して即興音楽を実践し学んだ。

この授業では音を扱うが、音に過敏な KUPI 学生が 2 名いた。その学生は他の学生が輪になって座っているところから離れて参加することとなった。そのうち片方の学生はあまり積極的に参加したいという態度ではなかった。しかしそういった学生に他の学生が気にかけて音を送ったり、皆が声掛けをして参加を促したりする姿があった。トーンキャッチではトーンチャイムを向けられた人が音を鳴らせるというルールを守ることができていた。これまでの授業では自己主張したいという面が多くみられ、他者との関わりの中で学ぶという事が難しいのではないかと考えていたが、この 2 点から、他者に配慮して共に学ぼうとする空気感を自ら作ったり、他者からの合図を受けてから行動するという自己抑制の面が見られたり、彼らの新たな一面を発見することができた。様々な授業形態と授業内容によって構成される KUPI だからこそ、彼らの様々な面(得意・不得意、好き嫌い等)を見ることができるのだろう。このことは、先述した「できることに気づいて焦点を当て」て学びを支えるために重要な要素である。

第 12 回目の哲学の授業では、自らを動物に例え、その理由を考えるという活動を行った。その際、自分の普段の言動を振り返ってそれを根拠に動物に例えるということができていた学生が多かった。彼らが理由として挙げた自らの特徴はよく自身を捉えて表現出来ていたのだろう、発表の際、いつも以上に笑いが起こった。この笑いは他の学生から見てもそう見えるから起こったのだと推測される。彼らが自分のことをいかに客観視できるかということが分かった。第 2、3 回の悩みの研究の授業で悩みを考えた際も、確かに自分を振り返って考えていたが、特徴的な出来事やその学生にとって非常に不快に感じていることなど日頃から意識されていることが悩みとなっていた。しかし、この動物に例えた際の根拠は普段意識されていないような習慣や癖等から考えられていることが多かった。このことから、KUPI の学生はより深い客観視ができるようになっていくことが分かる。私にとって彼らの客観視能力の高まりには驚かされるものであった。

第 14 回目の「書くこと」についての授業では、好きなテーマを選んで作文を行った。KUPI の学生は普段の KUPI の授業後に振り返りシートを書いているが、短い文章で終わる学生が大半で、作文のように長い文章を書くのは、分量が自由とはいえ、難しいのではないかと考えていた。しかし、彼らは与えられた 20 分を超えて書き続け、長い文章を完成させていた。彼らが選んだテーマはそのほとんどが、自らのことにひきつけたものだった。このことから、自分の関心の範囲内では言語による表現を行うことに意欲的で表現する能力も高いことが分かった。

ここまでをまとめると、KUPI 学生は KUPI の活動について、単に授業内容のみを価値づけしておらず、自分の意見を発表することや共に学ぶ機会そのもの等にも価値を感じていた。そのためメンターの役割は単に彼らが分からないことを教えるという役割にとどまらず、彼らがやりたいことやできることを活用して学べる場づくりを支えるために、そこに存在して、意見を共有したり、彼らの行動に何らかのレスポンスを行ったりと多様である。こうしたサポートを通して、彼らの学習活動において人との関わりを意識させることで、学び

の意欲向上につながったり、彼らの自己表現を活性化させたり、その能力を向上させたりという効果があったと考える。メンターがこういったサポートを実現させるにあたって特別な技術が必要というわけではないだろう。しかし、関わりや役割の認識が腑に落ちる感覚を得るまでに、積極的な関わりと省察、試行錯誤を行うことは必要であったと考える。

〈ペアになることの多かった学生について感じた変化〉

ここではこのプログラムを通してペアになることの多かった井澤君という学生について、彼との関わりで感じた変化を記述したい。井澤君とは第3回、第12回、第14回の授業でグループやペアになった。第3回から第12回の間には時間が空いているがその分感じられた変化もあったと考える。具体的なエピソードを交えて彼の変化を紹介したい。

まず第3回の悩みの研究の授業では、先述にもあるが、自分の意見へのこだわりが強い、自分の悩みや考えを詳細に説明することが難しい、他者が話している時に集中することが難しいという特徴があると捉えていた。そのため、失礼ながら彼との対話は難しいと思っていた。しかし第12回目の授業では「私とは何か。」という質問をした際、最初は「自分です。」と答えていたが、掘り下げて聞くと、「自分の身体は他の誰でもないから。」という返答が返ってきて驚いた。かなり難しい質問であるにも関わらず自分の説明に補足を付け加えることができるようになっていたのだ。第14回目の授業では、他のKUPI学生が「文章を長く書くことは悪いことだと思いますか。」と質問をした際、「分らないです。」と答えた。これは非常に驚きであった。なぜならこういった「はい」か「いいえ」で答えられるような質問をした際、第3回や他の授業ではこの2択で答えることしかなかった。そのため、第3の選択肢を彼が答えるとは予想外であった。加えて彼は「なぜかという、書きたい量は人それぞれだからです。」と理由を述べた。彼の説明する能力が向上していることが分かる。半年とはいえ、このプログラムの活動を通して学生の言語能力の向上が見られたのは彼だけではないが、自分が多くかかわる中で変化や成長に気づくことができるのはメンターの活動の面白さであった。

〈知的障害のある青年との関わりによるメンターへの影響〉

知的障害のある青年が学ぶことで彼らに起こる変化や成長については他の報告書等で記述されるだろう。そのため、私は彼らとの関わりを通して自身に起こった変化について記述し、このプログラムを通したメンターへの影響について主張したい。

メンターという仕事について、最初から自分の役割やふるまいが規定されていなかったことにより、自分がどう行動し、KUPI学生と関わっていくべきかということを中心に考え試行錯誤し続けた半年間であった。その過程では常に自分の行動や認識を省察していた。これが日常生活における健常者との関わりであれば、さほど考えて関わるということはしなかっただろう。メンター活動においては自分のふるまいについて普段以上に意識化することとなり、自分のふるまいがKUPI学生や授業にどのような影響を与えるのか、もしくは与えないのかということを考えるようになった。これと同時にメンターとしての役割やKUPI学生との関係の在り方についても考えていた。この省察を通した試行錯誤はKUPI学生がその言動によって作る「KUPIという場」に引っ張られ、自分の行動が規定されていくような過程であったともいえる。

例えば、第14回の作文の授業で私は「一人暮らしをしたい理由」についての作文を書いた。その時私は作文をグループで共有することを念頭に置き、なるべく平易な文章で書いた

り、KUPIの学生が好きそうなちょっとしたお笑い要素を入れようとしたり、自分が普段文章を書く時とは異なる点に留意しており、内容や書き方なども普段とは異なっていた。先生が「書きたいように自由に書いてください。」と言っても結局はKUPIという場に規定された中で書いていたことになる。

このような「場による行動の規定」は日常生活においても意識していないが起きている可能性は考えられる。しかし、メンターとしての活動においては、省察と試行錯誤を行うことでそれがより明確に実感された。

この活動において起こった変化はそれだけではない。知的障害のある青年への印象や知的障害のある青年と関わることについての印象についても変容があった。

知的障害のある青年への印象は、プログラム始動以前に知的障害のある青年と深く関わった経験がほとんどないことから、はっきりとした好意や嫌悪もなければ、特別意識して考えたこともなかった。授業で知的障害の特性について学んでいることがそのまま知的障害のある青年のイメージであったといっても過言ではない。つまり知的障害のある青年については印象を障害の特性で捉えていたという状態であった。知的障害のある青年と関わることについては積極的には関わりたいと思わないという程度だった。

しかし、このプログラムを通してその印象は変容し、明確になった。といっても知的障害のある青年全体を捉えて一つのイメージがついたというわけではない。「人による」ということが明確に分かった。知的障害のある青年と関わる時、最初は障害特性を確認するように印象すべてを捉えていたことは否めない。しかし、一人一人の性格や得意不得意が見えてくると、その言動が、障害特性によるものなのか、その人の個性によるものなのかということが分からなくなっていった。そのため、知的障害のある青年から障害特性を切り離して見るということは無くなり、総合的な印象で捉えるようになった。このことから、知的障害のある青年への印象は総合的な人間としての印象であり、彼らとの関わりは人間との関わり以上の特別な何物でもないということが分かっていった。それでも関わり方を特別意識して試行錯誤していたのは、「障害がある」ということに身構えていたことと、同じ人間としても差異を感じ、ふさわしい関わりというものを求めていたことにあるだろう。

これらの変化がこのプログラムにおいて私に起こった変化である。このことから、知的障害のある青年とメンターとして関わりとメンターにとっても変化を生むことが分かった。知的障害のある青年との関わった経験がこのプログラムの外でどのような影響を及ぼしているのかについては今後考えていきたい。

⑨ 富山成希

私が、「神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム」に水曜日のメンターとして参加をして、気づいたことや学んだことは多くあった。その中でも特に3つを取り上げて述べようと思う。1つ目は、障害のある人も学ぶ意欲や学力は十分に有ると気づいたこと。2つ目は、障害を持つ人の青年期の姿について学んだこと。3つ目は、このプログラムを通して、自身が持つ「障害」についての考え方の変化したことに気づいたことである。

1つ目の、障害のある人も学ぶ意欲や学力は十分に有ることに気づいたことについて、これは、授業中の発言や、振り返りの際の発言から気づいたことである。学生内での学力の差やその分野に対する興味・関心の度合いから、勿論、発言の内容量や質は変化していたが、

それでも、興味のある分野になると、誰も知らないような知識を披露したり、時には、もっと深いところまで知りたいと、鋭い質問をしたりしていた。

こうしたことから、障害があるからと言って、決して学力が低いとか学習意欲が低いというわけではないと、授業で聞いていたことが、身を持って体感でき、また、そうしたことに改めて気づくことができた。

2つ目の、障害を持つ人の青年期の姿について、これはずっと私が気になっていたことで、特別支援学校卒業後に、どのように成長していくのだろうかということを、実際に関わっていく中で学ぶことができた。

職場環境や職場の上司が合わないことや、恋愛の話、旅行の話、趣味の話など、身近な生活の話の話を聞いている中で、どのように生活をしているのかということ学んだ。その中で、私は、障害があろうとなかろうと余り変わらないのではないかと感じた。

しかしその一方で、一見障害を抱えていなように見えることで、障害手帳を見せると批判されることや、できない、あるいは困難があって、中々思うように自立した生活ができないというような、苦勞している面についても学ぶことができ、その点をいかに軽減していけるかについて考える必要があると感じた。

これらの生活における良いと思われること・悪い(改善すべきこと)と思われることは、特別支援学校などの学校教育や社会啓発などに活かしていかなければならないと私は思った。

3つ目の、私自身の「障害」に関する考え方の変化は、上に挙げたようなものを含め様々な気づきや学びから起きたもので、それは「障害のある人は、中々学びにくく、対話も中々成立させにくい」ということから、「障害のある人でも十分に学べるし、対話も可能である」ということへの変化である。

確かに、障害を持つ学生と話していて、自己主張のみで肝心の聞きたいことが聞けないということや、障害を持つ学生同士での対話を中々上手く引き出せない等の、メンターとしての苦勞や、一人の友達としての苦勞は多く感じられた。それでも、授業の回数を経るごとに、徐々にその苦勞は減っていき、(最後までその苦勞が「なくなる」ことはなかったが、)しっかり学べるし、対話も十分に可能であるということに気づいた。

また、学生の方から、辛いからや照れるからなどの理由で、自身の本当は言いたくないであろう悩み事や感謝の言葉(「また来年も参加したいし、それは先生やメンターと仲良くなれたおかげだ」等)などもポツポツと話せるようになってきたことから、対話ということが十分に可能であるのだなということに気づいた。

これら以外にも多くの気づきや学び、反省点(上手く学生同士をつなげられなかったことや、自身が学生とつながり切れなかったこと、どこまで学生の要望を許容していいのか悩んだ結果取った行動は良かったのか等)がある。

今回のプログラムはとても楽しいもので、もしプログラムが続くとするのなら、ぜひまたメンターとして参加したいと思う。

3) 一般学生（「社会教育課題研究」履修学生）

①

初日の授業における KUPI 学生の入学式の日、これから始まる KUPI の学生との授業がどのようなものになるのか、全く想像できなかった。始まってみると、KUPI 学生との授業は衝撃の連続だった。一般学生のみで行われている普通の授業とは違う場面がたくさんあった。特に衝撃だったのが、KUPI 学生たちの授業意欲の高さだった。気になったこと、疑問に思ったこと、関連すると思われることをどんどん発言していく積極性には非常に驚かされた。私たち一般学生とは少し違う KUPI 学生とのかかわりの中でどんな気づきに出会えるのか楽しみだった。

ライフストーリーは、授業の中でも私自身非常に楽しみにしていたものの一つだった。自身の人生についての話は、普段は身近な友人や家族としかしないことが多い。授業でしか会わない関係のしかも KUPI 学生と、ライフストーリーについて語り合うことがお互いにとってどんな効果をもたらすのか未知数だった。私は、4 人の KUPI 学生と対話をした。一番驚きだったことは、私と KUPI 学生の経験・体験の違いよりも、共通点を多く発見できたことだった。特別支援学校に通い、私の学生生活とは少し違ったであろう生活を送ってきた KUPI 学生たちの体験と、私の学生生活の体験に共通部分が多くあるのは意外だった。特に、共通しているなどと思ったことは、人間関係における経験だ。特に話題として多く出てきたのは「いじめ」についてだった。私が話した KUPI 学生 4 人全員からいじめについての体験談を聞いた。いじめ被害者としてだけでなく、加害者としてもいじめに関わったことがあるという話をしてくれた人もいた。正直このことについては少し驚いた。障害を持つ人は、いじめ被害者になってしまうというイメージがあったためだ。そしてさらに、この人は、「いじめは駄目なことだとわかっていたのにしてしまった自分がいて、それに気づいた時、自分でも驚いたし反省した」と言っており、体験のなかでの自己の行いを客観的に改めてみている様子にすごいなという尊敬の感情が湧いた。また、「学校はおもしろくないものだった」という話においても共通点を見つけた。私は対話の中で、4 人全員に、「学校は好きだったか」ということを質問した。すると多くの人が、「制限が多すぎるために楽しくなかった」という趣旨の話をしてくれた。学校でかされるルールの一つ一つが KUPI 学生にとっては重くて息苦しかったようだった。「もっと自由になんでもやりたかった」という話には、私も非常に共感する部分があった。KUPI 学生は一般学生とは少し違う存在だと思っていた。確かに、生活してきた環境や境遇は違うかもしれない。けれども、その中で感じることや思うことには共通する部分があり、交わることでお互いに新しく発見できることもたくさんあるのだなということに気付かされた。

また、このライフストーリー授業のなかで私は、障がいのある人とない人が交わることによって起こりうる化学反応をよりリアルを見た気がした。一般学生の多くにおいては、正直多少の不満がたまっている部分もあったと思う。一般学生同士であるとスムーズに行われる会話も、KUPI 学生の場合はそうはいかないことが多々出てくる。思い通りに進まない、伝わらない状況にストレスを感じる学生もいた。また、対話の中で、なぜ私が気を使わなければいけないのかと感じている学生もいたようだった。けれど、このストレスは今回の授業があったからこそ発生した感情だと思う。彼らはこの感情をどのように消化していくのだろうかとこのことに関しても興味を湧いた。一方で私は、このような周りの反応を比較的客

観的にみていた。客観的に、少し距離を置いてみることしかできなかった。KUPI 学生とのかかわりの中で、親しみの感情や、逆に苛立ちの感情をあまり持つことができなかった自分は、本当に KUPI 学生と関わることができたのだろうか、というのが私の今の疑問である。

一般学生にとって、KUPI 学生にとってもライフストーリーの授業は、彼らとの差異と同一性を非常に明確にすることのできた機会だったのではないかなと思う。そしてそのなかで、私は無意識に自分を見返していた。自覚していなかった自分の一部分や、こうだと思っていたことは実は違うのかもしれないということをたくさん発見することができた。KUPI 学生たちとの授業という貴重な機会が持てて、本当に良かったなと思う。

②

私にとって KUPI 学生と学んだことは、いくつかの学びをもたらした一方で、何を学びとするかという点において葛藤をもたらす経験でもあった。

はじめに、その学びの中でも特にライフストーリーを語り合ったという経験に関して得られた二つの学びについて述べる。

一つ目は、ライフストーリーを語り合うということの意義についての学びである。私は本授業において KUPI 学生と 2 回ライフストーリーを語り合ったが、1 回目は 2 人組、2 回目は 4 人組であったものの、2 回に渡って同じ KUPI 学生からライフストーリーを聞くという経験をした。その経験において印象的であったのは、1 回目の語り方と 2 回目の語り方に、変化が見られたことである。1 回目に 2 人でライフストーリーを語り合った時には、ライフ「ストーリー」というよりは、いくつかの断片的な記憶が独立して語られたという印象で、語られた記憶と記憶の間にも、語られた記憶と今日の前にいるその人との間にも、過去から現在に渡ってつながっているはずの一つの人生を感じることはできなかった。一方で 2 回目に 4 人でライフストーリーを語り合った際には、語られたエピソードが 1 回目と大きく変わったわけではないが、語られる記憶と記憶の間に通底し、現在のその人にもつながっているようなある種のテーマが現れたことを感じた。その KUPI 学生から語られたエピソードの全てがそのテーマを主題に語られたわけではなかったが、それでもどこか、ある一つのテーマが顔をのぞかせるような語りであった。この、語りというよりも語り方に変化が生じたという点は、ライフストーリーを理論的に捉えた時、2 つのことを示唆すると考えられる。1 つ目は、人生を語る経験を重ねることは、単なる記憶の想起であるだけでなく、過去の集積によって形作られた現在の自己を確認する過程になりうる行為であるということである。私が語り合った KUPI の学生においても、語られる内容が大きく変化したわけではないが 1 回目の語りよりも 2 回目の語りの方がより物語的に捉えられる語りであったが、これは語りを繰り返す中でその人にとって人生がより連続的なものとして捉え直されたためであると考えられる。さらに、語りを繰り返したという点だけでなく、ライフストーリーを語り「合っ」て、他者のライフストーリーを聞いたという経験も、自らの記憶の物語的な再構築を助けたのではないかと考えられる。2 つ目は、ライフストーリーとは、繰り返し語られる中で物語としての一貫性を示すようになりつつも、語る時期や文脈によって常に変化し、また変容可能性を保つものであるということである。語りとは、1 人の語り手から紡ぎだされるものでありながら、聞き手の存在を前提に成立するという点において語り手と聞き手の共同作業でもある。先に述べた経験においても、2 回目の新たな聞き手の存在は、

聞き手との関係性や聞き手の反応など様々な形で語り方に影響していたと考えられる。このように、一つ目の学びは、本授業を通して得たライフストーリー実践の意義についての学びであったといえる。

二つ目の学びは、他者に配慮することについての学びである。今回のライフストーリーの授業において、私が語り合った KUPI 学生の1回目の語りは、先にも述べたように、ストーリーというよりは独立した断片のようであり、一問一答のような語りであった。このことは、私にその学生が自らの人生を物語的に語る経験をしたことがなかった可能性を示しただけでなく、私に聞き手としての在り方を考えさせる契機ともなった。例えば1回目の語りにおいて、私は「小学校の時はどうだった？」という質問を、「楽しかった」や「微妙だった」などの答えとそれに続くエピソードを想定して投げかけた。しかしこの質問は、相手が予め自らの人生に関して、具体的なエピソードと、そこから帰納される抽象化したイメージを確立していることを前提とした聞き方であり、つまりある人にとっては非常に答えづらい質問であった。さらに、私はライフストーリーの聞き手として、質問することで相手の語りを引き出すことが必要であると考え、「部活は何をしていたの？」等の質問をしたが、結果として語りというよりもその質問に対する答えのみが返ってきたと感じた。このことに関して、質問すること自体も確かに語りを豊かにする可能性を持ちうるが、それだけでなく、反応すること、関心を示すことが語りを促進する力になり、その示し方の1つに質問をするという行為が位置づくべきであったと振り返ることができる。このように、語ることを得意としない相手と語り合うという経験をしたことは、語りの共同制作者としての聞き手である自らの在り方を熟考する機会となり、他者への配慮という点において本授業特有の学びをもたらしたといえる。

以上のように本授業におけるライフストーリーを語り合うという経験から得られた学びを述べたが、冒頭でも述べたように、私は本授業において、特に二つ目の学びに関して、これを学びとしていいのかという葛藤も同時に経験した。なぜならば、KUPIの学生と共に授業を受けた中での学びとして、本授業に「知的障害のある人との接し方や関わり方について学んだ」という類の意味付けをすることは、ともすると、相手をその人自身としてではなく、「知的障害のあるその人」として対象化して見ているという点で傲慢であるようにも感じるためである。私自身は、「支援—被支援の関係性を乗り越える」ことは、「合理的配慮としての支援は存在しつつも、それによって規定されない関係性が築かれる」ことであると捉えている。しかし、支援することと関わること、そして関係性を築くことの間には、必ずしも明確に境界線を引くことができるわけではない。したがって、「配慮の在り方を考える機会になった」という意味付けをすることは、本来互いに学生として対等であるはずの KUPI 学生と一般学生を、「支援する学生—される学生」、あるいは「学ぶ学生—学ばれる学生」といった非対称的な関係性の中で位置づけることにつながってしまう可能性を持つと考える。そのことから、合理的配慮を必要とする人に対してどのような配慮や支援の在り方が望まれるかを考えることが重要な意味を持つことには違いないが、真に「学び合った」という感覚をもたらす意味付けの仕方は、私が本レポートで述べた学びの在り方とは異なるところにあるのかもしれないと考える。

③

〈人間関係についての経験の比較〉

私の経験と、I君、T君、Aさん、Sさんの経験で共通して話題の柱となっていたのは人間関係についてだった。いずれの経験においても人間関係がうまくいかなかったという話が多く、人生の満足度の低さと相関があった。人間関係がうまくいかなかった原因として、I君、T君、Aさんは自身の障害を理由とした嫌がらせを挙げていた。Sさんが原因としてはっきりしたものを挙げていなかったが、自分の性格もその一部であると考えていた。Sさんは学校生活において友達をうまく作りにいくことができず、孤立していたという。私が原因として挙げたのは自身の個性と学力の低さだった。私は、人が傷つくことを衝動的に言ってしまったり、奇特定の言動をしてしまったりすることで、人が離れていった経験や、学力至上主義において、学力の低い私を馬鹿にしようとする雰囲気があったという経験からそのように考えた。一般学生と KUPI 学生という分け方で経験を比べることが良いかは分からないが、そのように分けると、人間関係がうまくいかない原因について、私と S さんは自身にその問題があると考えていたのに対し、KUPI 学生は障害を理由に嫌がらせをする加害者に問題があると考えていた。また人間関係を形成することについて、私と S さんは消極的であるのに対し、KUPI 学生は積極的であった。このことから、人間関係の問題の原因を他者に求めるか、自身に求めるかで人間関係形成に対する積極性に違いが表れるのではないかという仮説を導き出した。

〈知的障害のある青年と関わった経験全般から感じたこと〉

私は KUPI の学生と水曜日プログラムのメンターとしても関わっている関係上、他の一般学生に比べ、KUPI 学生との心理的距離は近かったのではないかと思う。だからこそ、一般学生として関わる際には自らの立場のあり方、関わり方に戸惑いがあった。

例えば、ライフストーリーを話し合っている最中に他のグループの一般学生の話し声に対し、舌打ちをしたり、怒鳴りつけたりする KUPI 学生がいた。メンターとしてその学生に関わっているのであれば、論じた上で適切な気持ちの伝え方を教えてあげることがその学生のためになるだろう。しかし、一般学生として関わっている際にはそこまでする必要があるのかと思っていた。これに限った話ではないが、一般学生として関わっている際には、まずに自分の学びを得ることも優先すべきであるから、KUPI の学生の学びを積極的に支える役割はメンターに任せるべきなのではないかと考えていた。ただ、そのような葛藤は KUPI 学生には理解されないことであるし、障害への配慮をしないという選択は良心に反すると考えていたため、一般学生として割り切って自分の学びに集中することができず、最後まで自分のふさわしい関わり方が定まらなかった。そのため、メンターでは試行錯誤によって葛藤が解消し活動に満足感を得られていったのに対し、一般学生としては葛藤が持続して、結果、少し苦しみながら授業を受けていた。

このことから、共に学び合ったこの半期において私はのびのびと学ぶことができなかつた。何を学べば良いかがはっきりしていないこの授業において、自分が学びを得ることだけでも精いっぱいだったため、KUPI 学生のサポートをする余裕がなかった。にも関わらず、KUPI 学生をサポートしなくてはならないという考えが捨てられなかったために、KUPI 学生との関わりが負担になってしまった。

知的障害のある青年と学んだ経験は気を遣うという悪い面だけではなかった。彼らは難しい質問においては、質問の意図に沿った回答が得られることが少なく、一般学生やメンタ

一がかみ砕いて説明する必要があった。一方、彼らの知識の範囲内の話や、想像しうる範囲の質問であれば、一般学生とは異なる視点から意見や経験を呈示してくれた。それらは時たま示唆に富むものであったため、私たちの学びにつながった。この経験から、彼らの知識や経験、考えを引き出し、一般学生が学びを得るには質問（発問）の仕方が重要になってくるだろう。また、難しいことを簡単にかみ砕いて学ぼうとする試みは KUPI 学生以外の側の努力に課される責任が大きい。そのため、知的障害の有無にかかわらず理解できる内容について異なる視点からの意見を共有し、思考を深めるような活動が、知的障害のある青年との学びにおいて必要な要素ではないだろうか。

④

〈難しい概念と寸劇〉

私は日本語を勉強している外国人である。日本語母国語者である KUPI の学生から学べることが多かった。

授業で障害者教育や民主主義について勉強した時、津田教授が難しい概念を KUPI の学生の全員に分かるように簡単に説明することに特に注目していた。私にとってその概念の多くは新しい単語だったので、説明を聞くことがとても勉強になった。ところで、津田教授や他の一般学生の説明を自分の言葉に変えた KUPI の学生の説明が一番分かりやすく、覚えやすかった。日本語を単純に翻訳するより、KUPI の学生のようなクリエイティブな説明の方が、日本語の本来の意味に近いし覚えやすいじゃないかと考えられる。

グループに分けて民主主義についての寸劇を準備した時も人間関係の他に日本語が勉強になった。私は一般学生と KUPI の学生に同じように接したつもりだが、いつもより私は話していることに集中していた。分かりやすく説明しようとしていたが、逆に説明が複雑になったことも多かった。寸劇の準備を練習にし、前より私の日本語での説明が上達したと思う。

〈ライフストーリー〉

第 4 クォーターの授業の主の目標は学生と KUPI の学生がお互いにライフストーリーを語り合うことであった。

私は KUPI の学生と話していた時に、相違点より共通点に集中していたので、他の学生より学んだことが少ないかもしれない。しかし、共通点を通して異なる点に気付いたこともあった。一人の KUPI の学生と話している時に原点が同じなのに、そこからなぜ異なっていくのかと言う話になった。私も彼も作文を書くのが苦ってだが、彼にとって失敗や嫌な思いで終わるのに対して、私はそれを結局成功につなぐことができるのはなぜかと言うのは彼にとってとても興味深かったと思う。

私は共通点に集中したこともあるが、ほとんど異文化の話にならなかった。KUPI の学生はオーストリアに興味を示してくれることがあったが、そこから話はあまり進展しなかった。それはなぜかと言うと、私はほとんど教育制度の違いについてしか話さなかったからだと考えられる。他の一般学生によると KUPI の学生の受験に対しての反応がとても薄かった。私はオーストリアと日本の一般学校の違いについて話していたので似たような反応であった。そのため、私は KUPI の学生がオーストリアにそこまで興味がないと思っていたが、オーストリアにではなく KUPI の学生が共通できない話をしていて興味が無かったと考えられる。KUPI の学生が共通できるオーストリアと日本の違いを話していれば、会話が

もっと進展していたんじゃないかとおもわれる。

〈おわりに〉

私はこの授業で様々な人と関わっていたことによって、人間関係そして何よりも自分について学んだことが多かった。普段あまり考えないことを意識することによって、日本語力も少し上がったと思う。私にとってこの授業はとても勉強になった。

⑤

KUPI 学生と共に学んできたこの 2 か月で、様々な障害がある人と出会い、一緒に授業に参加したり、活動したりして、非常に楽しかった。彼らは私たちと同じように、普通に生きている人間であり、私たちより劣れる人間でもない、特別な人間でもないと感じた。まさに、真城（2003）が言ったように、『人には名前、性別、職業、年齢など多岐にわたる属性を持ち、「障害も個人が持つ様々な属性の一つ』』である。しかし、彼らとのライフストーリーを語り合った経験から、障害者支援特に障害者教育にはまだ多くの問題が存在している。ここで、KUPI 学生と語り合ったライフストーリーを踏まえて、述べたいと思う。

平成 30 年度文部科学省の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」によると、小・中・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数は 543,933 件（前年度 414,378 件）であり、前年度に比べ約 31% 増加。児童生徒 1,000 人当たりの認知件数は 40.9 件（前年度 30.9 件）。過去 5 年間の傾向として、小学校におけるいじめの認知が大幅に増加している。このいじめ問題を検討する時、おそらく私たちはつい障害者を被害者として取り組んでしまう。しかし現実では、障害者はいじめの被害者になっているだけではなく、いじめの加害者にもなっている。KUPI 学生との語り合ったことから、彼らは知らず知らずのうちに他人をいじめてしまい、いじめの加害者としてであることは認識できなかった。そして、自分が他人をいじていることを自覚しても、やめることができなかった。その原因を考えると、おそらく障害者に向けるいじめの定義などに関するいじめ防止教育が不足しているからだろう。文部科学省の「いじめの防止等のための基本的な方針（概要）」にあるいじめの防止のポイントから、発達障害を含む、障害のある児童生徒がかかわるいじめについては、教職員が個々の児童生徒の障害の特性への理解を深めるとともに、個別の教育支援計画や個別の指導計画を活用した情報共有を行いつつ、当該児童生徒のニーズや特性を踏まえた適切な指導及び必要な支援を行うことが必要であることが分かった。つまり、障害者に対して、いじめに関する教育よりも支援の方が重視されていると考えられる。これによって、障害者がいじめの加害者として他人をいじめることは想像し難くないだろう。また、平成 30 年度文部科学省の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」から、《中学校認知件数》が前年度より 17,280 件（21.5%）の増加や《高等学校認知件数》が前年度より 2,920 件（19.7%）の増加と比較して、《特別支援学校認知件数》は前年度より 632 件（30.9%）増加したことが分かった。そこで、これから障害者に向けるいじめ教育がより重要になっていくだろうと思う。

それから、特別支援教育について、文部科学省は「障害のある子供については、障害の状態に応じて、その可能性を最大限に伸ばし、自立と社会参加に必要な力を培うため、一人一人の教育的ニーズを把握し、適切な指導及び必要な支援を行う必要がある」と述べている。これに対して、各地域が障害のある子供に向けて、特別支援学校や小・中特別支援学級を設

置し、積極的に支援している。しかし、KUPI 学生とライフストーリーを語り合ったことから、障害者である彼らにとって、特別支援学校での学習は決していい経験ではなかった。なぜなら、軽度な障害である彼らにとっては、特別支援学校での学習は時間の無駄遣いだと考えているからだ。文部科学省の「日本の特別支援教育の状況について」によると、義務教育段階の全児童生徒の中、特別支援教育の対象となる人は 41.7 万、約 4.2%を占めている。その中、障害の程度が比較的重い子供を対象として、特別支援学校で専門性の高い教育を実施する。しかし、例え重い知的障害を持つ子供としても、比較的障害の程度が軽い子供もいるだろう。障害の程度が違うにも関わらず、同じ教育を実施するのが、彼らの教育を受ける権利を奪うことと同等ではないかと考える。文部科学省の「日本の特別支援教育の状況について」に、特別支援学校では『各教科等に加え、「自立活動」の指導を実施。障害の状態等に応じた弾力的な教育課程が編成可。』と書いてあるが、実際に障害の状態等に応じた弾力的な教育課程が実施されているかどうかの問題となっている。おそらく、教育資源の不足などの問題で、特別支援教育がなかなかうまく進められなかったが、これから、障害者に何かを学ばせるのではなく、自分が学びたいことを学んでいくのが解決のルートになるのではないかと思う。

KUPI 学生と一緒に授業を受け、彼らとライフストーリーを語り合ったことから、障害者たちの現状に関して、実際にコミュニケーションしないと手に入らない情報ももらい、非常に勉強になった。

⑥

自分のライフストーリーを KUPI 学生とともに語った経験は、私が自分のライフストーリーを他人に対して今回の授業のようにまとまった形で語った経験がなかったこともあり、とても貴重な経験となりました。授業が 2 クォーター続けて行われていたことで、ある程度の親密感も互いに感じる事ができ、ライフストーリーを語り合う経験を充実させる手助けになっていたと思います。授業でライフストーリーを語った際には、自分の人生経験と自分の幸せ曲線を合わせたグラフを用いたため、日常行われる自分語りよりもかなり特殊なものだったように感じました。わかりやすく人生の中でも幸福に感じた経験や、不幸に感じた経験が特段語られていて、私にとっては、自分語りをする際、自分の人生にとって有意義な経験であったかどうかという指標で話題を選び、語ることの方が得意であったので、幸せだったかどうかという指標で自分の人生の経験をピックアップして評価することは難しかったです。KUPI 学生はその点、不幸だった経験と幸福であった経験がしっかりと分けられていて、そこに難しさを感じていないようでした。KUPI 学生の不幸であった経験の内容が授業前は、本人から詳しく聞いても想像もつかないような状況や感情だった場合に、うまく対応できるのか心配だったのですが、多くの KUPI 学生の不幸な経験は人間関係や所属する場の規則等が原因であることが多く、自分と大きくは異なることに驚きを感じました。自分の小学生時代には、障害を持った生徒だけが集まった教室が学校内にあったため、その時の記憶を頼りに想像を膨らませたりしました。KUPI 学生が語る内容で、障害を持っている人に対して取られる特別な制度等から受ける不幸な経験の話からは気づきが多く、そういった制度自体への改善点等が見つけられそうな気がして、興味が湧きました。ただ、一番深く考える機会が多かったのは、KUPI 学生が障害を持たない人と接している際に

体験した不幸な経験を語ってくれた時でした。人間関係の中で生まれる不幸な経験は、それが物理的制約や既存の制度等による一種その経験の関係者の間ではどうにもならないような経験と違って、その経験に関わる人達の配慮等で対応できることが多いので、そういった経験を聞いた時はよりいっそもどかしさを感じました。自分に障害がなく、障害を持っている人に対する知識が少ないことによる自分の中の偏見や差別と向き合うことが十分に出来ていないことに気づき、それと同時に、人生を通して自分と異なるバックグラウンドを持つ人への学びの必要性はなくなるのだなと思いました。一般学生だけで集合して授業のライフストーリーを KUPI 学生と語り合った内容を振り返った際に、相手の語りを聞いた後に自分が語ると、相手の語りの内容につられて自分の語りの内容の伝え方を変えてしまっているという話があったが、自分も同じで、他人よりも相対的にかなりポジティブに生きている性格を持った自分が KUPI 学生の前で自分は自分の人生のほとんどすべての時期において不幸をあまり感じていないという事実を語れなかったことを、この授業参加者のためには、自分が素で語るの方が意味があったのではないかと考え、反省しています。自分のライフストーリーを語った相手や、ライフストーリーを語ってくれた相手に対しては語る前よりも親密感を覚えて、仲良くなることが出来たのは、一定以上の時間を共に過ごしたというだけでなく、私にとっては、相手のどの部分に対して配慮すれば良いのかということに対して理解が深まったことにより、安心して会話が出来るようになったことがとても大きかったように思います。KUPI 学生に関しても、相手に対して気になるポイントを質問したあとは比較的心を開いてくれる傾向にあったように思います。ライフストーリーを語る経験は、自分と全く異なる人生を送ってきた人の語りを聞くことから得る学びも大きかったが、自分と似た経験をもつ人の語りからも捉え方の違いを発見して学ぶことの出来るものであるとわかり、今後もこういった機会を作りたいと思いました。

⑦

私は授業内で、半年間 KUPI 学生と学び、接し、最終的にライフストーリーを語り合うまでに至った。しかしその経験は、楽しかったというだけでなく、様々な悩みや葛藤を含んだものであった。私にとってその葛藤はどういうものであったのかをこのレポート内で整理したい。

授業内で行われた一般学生のための授業で、KUPI 学生と勉強をするということについての感想を求められた際に言ったことも振り返ると、私の葛藤は「理想のすり合わせ」からくるものであったように思える。その理想とは、私の、津田先生の、他の生徒の、KUPI 学生の、私にとっての世間の一般常識の、である。学生たちでグループワークをした際やライフストーリーを語り合った際、私の中には「おそらくこう進めたほうが良いであろう」という地図があった。その地図を描いていることすら途中まで気づいていなかったもので、それは長年の経験でほとんど無意識に行っていたことだった。その地図とは具体的には何なのか、というと、例えば課題提出のためにはこれくらいのテンポで話を進めたほうが良いだろう、であるとか、一回の授業で二人がライフストーリーを語るのであれば時間配分はこれくらいで、全体的に学校のことと今のことと幼少期と何割ずつくらい触れたら丁度良いだろうというようなものである。そうして、その私の思い描く理想を進める際にそればかりを押し通すのではなく、うまく周りの考えや理想とすり合わせて丁度良く話を進めていきたい、と自然に思

うからこそ私は一人葛藤していたのだ。恐らくほかの一般学生もいろいろな葛藤を、KUPI 学生と接するこの授業だからこそその葛藤を抱いていただろうと思う。しかし、私たちはあまり進んでその話を共有することはしなかった。私たちはみんな、その葛藤が他の授業にはないことから、それが KUPI 学生と接するうえで生まれるものであることを認知しており、それを共有することは彼らに対して陰口を言うかのような行為に値する、となんとなく思ってしまうからだ。少なくとも私はそうだった。罪悪感のようなもの、このエンパワメントというコースに属しているにも関わらずそれに反することをしてしまっているという感覚にとらわれて、私は必要以上に葛藤を持て余すことになってしまっていた。

ライフストーリーを語り合う際も、私は自分の質問により、いかに相手のライフストーリーを引き出すかということを考えていた。ライフストーリーというからには、これまでの出来事を今につながる流れにできたほうがいだろうということで、相手が話しやすいように、また自分が「ライフストーリーを語り合えた」と納得できるように話の道筋を作る質問を考え、相手の話に相槌を打つようにしていた。しかし、もちろん自分の思い描いていたように毎回運ぶわけではなく、話がほとんど同じ時期の同じ人との話で終わってしまったこともあった。笑って相槌を打ちながらも、それはライフストーリーではないのではないかと内心考えていた。それはただ楽しかった思い出であって、ライフストーリーといえるものではないのではないかと疑問に思ったのだ。しかし、授業を終えて一人で振り返った際に、果たして本当にそうだろうか、という疑問が新たにわいた。そもそもライフストーリーって何なのだろう、と考えたときに、授業で教わった範囲の答えしか私は持ち合わせておらず、本質的にライフストーリーそのものを理解できていないことに気づき、だとしたら私がライフストーリーでないと感じたのは、私がそう思っただけで、話した相手やほかの人は立派なライフストーリーだと感じる可能性があるのでは、と考えたのである。私がやっていたことは、悪く言えば私の思うライフストーリーに相手を誘導しようとしているのと同じことだったのかもしれない。それも、相手が話しやすいようにという思いがあったからこそなのだが、裏を返せば私がこの人たちを助けてあげないといけないという気持ちがあったことにもなりうる。

そうして一人で授業内容を振り返るうちに上記の葛藤に気づいた私は、そこから遡ることで最初の「葛藤＝理想のすり合わせ」に気づくに至った。ここまで顕著ではないかもしれないが、きっと誰にだって思い描く理想のようなものがあるはずなので、この葛藤はきっと生きていくうえで切っても切り離せないものになっていくのだろうと思う。また、すり合わせということはどの理想もすべてが現実に反映されるわけではないので、「完璧な答え、解決策」というものは作り出すのは困難であると考えられる。

ただ、ここまでのレポートで気が付いたのは、そもそもすり合わせるほど理想があるということは、もともとの問題や状況に正解がない、ということである。ライフストーリーも、どこまでがライフストーリーでどこまでがただの思い出か、という明確な線引きはない。ライフストーリーを語り合う場面において、「語りたくないエピソード」はあれど、「不適切だから語ってはいけないエピソード」はないのである。正しい正しくないの線引きがない時、私たちはひとまず自分の中での結論や正解を出してみる。だが、それは千差万別なのですり合わせを行おうという意思が働くのである。そこまで気が付いたとき、私はこの KUPI 学生と学んで得た経験は、これから大学を出て様々なバックグラウンドを持った人たちと答

えのない問いや状況に直面する際に必ず生きてくるものである、と感じた。同じ大学の同じ学部学科に通う人であれば、価値観が似てくるのは必然である。その中で、私たちと全く違う価値観、バックグラウンドを持った人たちと「自分」というものを伝えあいながら一つの課題について、また概念について考えることができたということ、そしてそこから生まれた抽象的な違和感を具体的な葛藤に落とし込めたことは、きっと私の糧になるだろう。

⑧

今回の KUPI の学生との授業では、はじめに先生に、一般学生のみならず、KUPI の学生たちのサポートはしなくていいよと言われた。そのことを意識して授業を受けていたけど、正直それはなかなかできなかった。でも、サポートをするしないにかかわらず、学べるものは変わらないんじゃないかとも感じた。そもそもサポートをしないということがどういうことなのかと思った。初めのほうに少し難しい内容を講義形式の授業で学んだ時も、基礎知識は、一般学生のほうが圧倒的にあって、KUPI 学生は、用語からわからないことが多かったので、先生がこれについて考えてみましょうとお題を提示したとき、まずその用語などの前提条件を説明してあげるのに時間がかかった。でもそれは、僕もその用語の意味を自分がどれくらい理解しているかを確認するいい機会になったし、KUPI の学生の子に分かりやすく説明するのは、僕にとってはしっかりした学びだったと思う。民主主義がいいか絶対王政がいいかという問いに対しては、KUPI の学生ならではの僕らには思いつかないような発想が出るのではないかと期待していたが、なかなか絶対王政と民主主義についての理解ができてこない子が多かったので、そこに関しては少しもの足りなさを感じた。もう少しお題を簡単にして、一般学生と KUPI の学生が同じラインから考えられるようなものにする、お互いにとって、新たな気づきのある刺激的な議論ができるのではないかと感じた。その点に関しては、劇を一緒に作り上げるというのは、とても有意義だったと思う。テーマにつながるようなストーリーを考えるのは、僕たち一般学生がしたけど、劇の中に入れるギャグや、演出、音響などは KUPI の学生が率先して考えて作ってくれた。その点に関しては、僕も思いつかないものばかりだったので、とても面白かった。結果的には、KUPI の学生が出してくれたたくさんのアイデアを僕がまとめて、劇が完成した。一般学生と KUPI の学生のそれぞれの長所が活かされたいい劇だったと思う。ライフストーリーを語り合うという授業は、自分の人生を振り返るいい機会になったし、KUPI の学生の僕とは全く違う人生の話が聞くことができ、非常に面白かった。僕が話した二人に共通していたことで、一番驚いたのは、どちらもライフストーリーの中に恋愛の話があったことである。恋愛というのは、相手の立場で物事を考え、お互いのことを認め合うというようなかなり高度な心理現象であるというようなイメージを持っていたので、知的障害を持つ子にはなかなか難しいのではないかという偏見があった。しかし、今回話した二人は、僕たちと同じような感情で恋愛をしているということを知った。特に印象に残ったのは、KUPI の学生が高校時代に好きだった子に社会人になって連絡を取るのをやめた理由として、一回連絡を無視されて、それは仕事が忙しいからだと思ったから、仕事の邪魔にならないようにもう連絡しなくなったと言っていたことだ。僕は、相手の立場になって物事を考えられているからこそこういう考えに至ったのだと思ったが、この話を友達にすると、それは、実はその女の子から嫌われているかもしれないという不安から逃げるための口実じゃないかと言っていた。たしかにその

可能性もあるとは思ったが、もしそうだとすると、自分のプライドを守るためにそのような口実を作ること自体に、実際にそう思うことと同等のかなり高度な心理を要するのではないかと思った。また、そんな高度な心情を持つ一方で、好きな人にはそのまま素直にそれを伝えるという一面があるという風にも感じた。例えば、ライフストーリーを語り合うペアの人を決めるとき、はっきり自分のしたい人としてほしいですと言っていたことには驚いた。僕たちは、もしこっから指名して相手が嫌だったらどうしようとか余計なことをたくさん考えて、なかなかはっきり言うことができないけど、そんな複雑な思考を全くせず、自分の希望をはっきり公言するというのは短所でもあるが、長所にもなるのではないかと感じた。あと、ライフストーリーの授業で感じたのは、KUPIの学生が僕のライフストーリーに全く興味を持ってくれなかったことだ。やはり KUPI の学生は、一応相手のことを気遣って質問するということはあまりなく、本当にそのことに興味がない限り、自ら積極的に探究はしないんだなと感じた。どうすれば彼らの興味を引くような人間になれるのかということは今後の課題だと感じた。正直一時間半同じ事ずっと話すのは、きつかったので、30分×3タームなどにして、もっといろんな子と話せる機会があってもいいのではないかと思った。

⑨

〈授業での個人的に考えていた目標〉

本授業を通して、KUPI 学生とともに民主主義について考え寸劇を行ったり、自分の人生を振り返って語るライフストーリーを行ったりした。

この授業で KUPI 学生と一般学生が共に学ぶことについて、先生からは「サポートするとかではなく、それぞれが学びに集中してほしい」との言葉を受けていた。ここで先生がイメージされていたそれぞれの学びとは何なんだろう？と思うことがしばしばあった。特に、授業の内容が、主に、民主主義・ライフストーリーについてであったので、単に民主主義について知識等を学ぶということではなく、お互いに意見交換や話をする中で新たな視点を得て考えるといったことなのかなと個人的には感じていた。

私自身はこの授業では、これまで普段あまり関わることのなかったような KUPI 学生と一緒に学ぶということ自体新しい経験で、授業で KUPI 学生はどのように考えるのかということをもっと知りたいということを目指して持っていた。また、あまり関わったことがなかったもので、どの様にすれば上手く会話し、一緒に考えるということが出来るかということをもみにつけたいということも思って授業を受けていた。実際に、上記の目標は授業を通して果たせたのではないかと感じる一方、様々な課題にも直面したように感じた。

〈ライフストーリーを通して感じたこと〉

ライフストーリーについて話していく中で印象に残っているのは、KUPI 学生と一般学生の人生で主に出てくるテーマが違っていたということである。一般学生では「受験」といったことが大きなライフイベントであり、テーマに出てくるのに対し、KUPI 学生は「いじめ」の経験についての話が出てくるが多かった。私は自分の人生はあまり変化がなく普通の人生だと思っていたが、必ずしも普通とは言えないのだと思った。

また、私の人生においてマイナスイベントは受験失敗、浪人であった。しかし、KUPI 学生の、いじめに遭った経験などの話を聞いた後で自分の話をする際、受験失敗や浪人といった経験が自分にとってつらい経験だったと話すことは、果たして KUPI 学生にどのような

感情を与えるのだろう、マイナスの経験だったとして話してもよいのだろうかと感じた。これは、受験にあくせくして敷かれたレールに乗って生活していることを良しとして KUPI 学生を「かわいそう」という目線でみている訳では決してないのでそこは誤解されたくないが、もし私が勉強以前に生活するのに辛さを感じる経験をしてきた中で、他の人に受験に失敗したことをととてもつらかった経験として言われたとしたら、「何を言っているのだ、あなたは受験できている時点で恵まれているじゃないか」と思ってしまうそうだと感じたからである。自分の不安は「浪人すること」など、大多数や「普通」から外れてしまうということであるが、その「普通」は必ずしも普通ではなく、すごく自分が何かにとらわれていてフィルターのかかった人間であるように感じた。

自分の思う「普通」が普通ではないということを感じ、マジョリティーの生活自体を省みる機会ともなった。

〈他の学生の声とその声を受けて考えたこと〉

授業を進めていく中で、学生の中からは「サポートではなく自分の学びに集中してほしい」という言葉から、自分がどう行動をとればいいのかということに対する戸惑いの声が聴かれた。民主主義についての寸劇を作る場面でリーダーは KUPI の学生にやってもらうという感じであったが、私たちのグループでも、進行はほとんど一般学生やサポートの方がするという形になっていた。一般学生が進めて KUPI 学生が一部答えるのみといった一方的な形を防ぎ、KUPI 学生にも主体としてグループ活動を進める経験をしてもらいたいといった意図が先生側にはあったのかなと感じた。一般学生も KUPI 学生もあまりない経験だったので、経験を重ねていくしかない面もあるのかなとは感じた。私自身は、どうすれば上手くいろんな人の意見を引き出しつつグループ活動を進めるかということ意識しながらグループ活動を行った。これは個人的に意見を出すことが苦手な方であるからかもしれないが、一般学生であったとしても意見を出すことの得意苦手はあるので、特別 KUPI 学生がいるからというわけではなく、話の軌道を修正するなどのことはグループの一員としてあって当然で、程度にもよるが、それがサポートに当たるのではないかと考えすぎる必要はないのかなと思った。この辺りに関しては、この授業に様々な意図が含まれているために招いた混乱で、もう少し事前に先生と学生で糸の共有を行ってもよかった点なのかなと感じた。

また、例えば民主主義についての授業において、言葉の説明などから始まるため、KUPI 学生と一緒に学習を進めていく中でかえって障害者＝無知といった印象を与えかねないのではないかと、という声を聴いた。また、では、例えば民主主義等の言葉の意味を先に KUPI 学生に伝える方がよかったのではないかとというような声も聞いた。このように一般学生に合わせた授業にするのが正解なのか、はたまた KUPI 学生に合わせた授業にするのが正解なのかと思うと難しいが工夫の余地はあるのではないかと感じた。この授業の目的が不明確に思えるからこそこのような不安感が出てきているのかなと感じ、この学ぶ楽しみ発見プログラムの目的などについてももう少し丁寧に共有をしておく必要があったのかなと感じた。上に挙げた他の学生の不安感は、障害を持った学生との混合授業をするかはたまた、特別支援学校・クラスなどとわかるかのメリットデメリットとも通じる部分が少しあるのかなと感じた。そのあたりの知識が不足していたため改めて学びたいと感じるとともに、この演習の授業の前に、学べる授業があればいいのではないかと感じた。

4) コーディネーター

① 「コーディネーターとしての感想」

河南 勝

昨年春、この事業の話をいただいた時、私としては福祉型「専攻科」エコール KOBE をちょうど退職したタイミングでした。かねてより知的障害青年に大学教育の門戸を開くことを夢に描いてきていたので、飛びつくように二つ返事で携わらせていただくことにしました。6月からの準備で大変タイトな取り組みになりましたが、幸いすばらしい事務局メンバー、もう一人のコーディネーター黒崎さんの丁寧な対応、事務処理に助けられて進めることができました。

10月からのプログラムが進む中、半年間の取り組みでしたが、10名の学生たちの学ぶ意欲には感心させられました。彼らは仕事を終えた夕方からの活動にもかかわらず、休むことなく出席し、大学の専門的な学びに気後れすることなくむしろ楽しんで学ぶ姿を見せてくれました。障害があっても知的好奇心に差はないし、ゆっくりではあっても自分のペースで学び理解しようとする姿勢に感動すら覚えました。

彼らは、一様に「コミュニケーションが苦手」「話をすることが苦手」と面接でも言いましたが、学生同士の関係やメンターの神戸大学生との交流を通じて、話をしたり休日にカラオケに行ったり、ルミナリエや卒業旅行に出かけるほどの関係を築いていく様子が見られるまでに変化していきました。

この事業を支えている力について、三つ述べておきたいと思います。

一つは、神戸大学の先生方の協力です。代表の津田先生をはじめ、水曜日の授業を快く引き受けて、彼らにわかりやすい授業を工夫して実践された神戸大学の先生方の協力は、素晴らしいものでありました。知的障害者の大学での学びを創造するためには、大学人が障害者に理解を示し、大学の学びの質を落とさずにしかもわかりやすく授業するという実践力が問われます。今年初めての実践がこれからのモデルになっていくと思いました。

二つには、神戸大学メンター学生の協力です。神戸大学のメンター学生は障害学生への寄り添い方からサポートの仕方、同年代らしいフランクな接し方とすばらしかった。そして、授業に対する鋭い意見や問題提起、さらには KUPI 学生間の人間関係に至るまで、しっかりした意見を出してくれました。この事業の一つの魅力である神戸大学生との交流なくしては成功しなかったと思います。

三つには、大学当局の支援です。全国で初めての国立大学での事業で、おそらくいろいろな今までの制度や考え方を超えた取り組みをして支援をしていただいたと聞きます。聴講生制度を活用することで、大学生としての扱いをしていただき、修了証書もいただきました。

大学での学びを創造する事業は、神戸大での取り組みが次年度も含めて成功し、全国の大学でのモデルになって発展することを願っています。そのためには、教訓をしっかりとまとめ、全国に発信する必要があります。文科省の進める生涯学習、学校型「専攻科」、福祉型「専攻科」や福祉型「大学」なども含めて、多様に障害者の学びの場が広がるのが、大学での知的障害者の学びの創造につながっていくと思います。

② 「KUPI 生と過ごした4か月間」

黒崎 幸子

KUPI 生を無事送り出すことができ、ほっとしています。と同時に週に3回必ず会っていたのに会わなくなり（会えなくなり？）、ぽっかり穴が開きました。あっ、やっぱり終わ

ったんだという不思議な感覚。皆さん本当によく頑張りました。どれだけ頑張ったか想像してください。(人によって多少違いますが)、朝から電車に乗って職場に行き、夕方まで働きます。その後大学に向かい、早めの夕食を慌てて食べて17時から90分間授業を受けます。ふり返りが終わったら20時。季節は秋と冬。体調を整えることにも気を配り、ご家族のサポートを受けながら通ったことと思います。電車を乗り継いで1時間以上かけて一人で通学する学生もいて、もうそれだけで頑張りが伝わってきます。午前中、家に居る私は「今頃KUPI生は働いているんだ、偉いな」といつも思っていました。

授業前のカフェアゴラでは「今日は仕事が長引いたわ、面談があったよ、指導者と合わないから嫌だ、」と、仕事内容の会話が多く、悩みを聞くこともありました。教室とは少し違う会話です。初めの頃は17時直前に時間がかかるメニューを注文したり、数人が一気に会計をするため時間がかかったりしていましたが、慣れてくると「早く出てくるメニューは何ですか？」とアゴラスタッフさんに聞いたり、時計を見ながら先に会計を済ませるなど、時間を意識して行動ができるようになってきました。アゴラでは火曜と水曜はご飯を多めに炊いて迎えてくれて、お店を出る時には「行ってらっしゃい！」と送り出してくれました。KUPI生は「行ってきます、また来ますね！」と手を振って教室に向かいます。仕事から気持ちを切り替えてホッとできる素敵なカフェでした。感謝です！

彼らと接する時に一番悩んだことは距離感でした。彼らは大学生です。自分のことは自分で管理をして連絡事項も自分で聞いて判断することが求められます。うっかり忘れることもあるので2、3回伝えることもありましたが、自分が困る経験をしなないと注意を向けられないので、失敗で得られることもあります。やはりなかなか伝わらないこともありましたが、保護者さんへ聞いて必ず返信が欲しい内容の時は、水面下で保護者の方に連絡をして、それとなく話題を出してKUPI生から話しを切り出してもらえるようお願いをしました。構い過ぎたかな？と思う時と、数回伝えても難しいんだなと感じる時があってその時々で接し方を迷いました。KUPI生から保護者の方に話せるようにポイントを書いた用紙を配ると、それを見ながら思い出して話しがしやすいかな？など工夫できることはありそうです。

今回スタッフとして参加をして大変貴重な経験をさせていただきました。KUPI生の頑張りを目の当たりにしたのはもちろんですが、彼らの力を最大限引き出してくれたメンター生の存在は大変大きいと感じました。関係性がどんどん変わっていき、KUPI生の充実した大学生生活に繋がりました。保護者の方からはお子さんに対する思いや期待とKUPIに求めることを聞いて、必要なプログラムであることを実感しました。河南先生には青年たちを取り巻く環境や現状を多く教えていただき、アドバイスをもらいました。津田先生、赤木先生、秦先生はどんな質問でもすぐに考えを聞かせてくださいました。みなさまに感謝申し上げます。KUPI生のみなさん、またお会いしましょう！ありがとうございました。

6. 知的な隔たりの間で共に学ぶとはどういうことか～神戸大学「学ぶ楽しみ発見プログラム」支援過程の省察から～

神戸大学人間発達環境学研究科博士前期課程 井上太一

1) 「学ぶ楽しみ発見プログラム」支援過程省察の意義

1-1. 「学ぶ楽しみ発見プログラム」の概要

「学ぶ楽しみ発見プログラム」は、知的障害を持つ青年に大学教育を開くモデル開発事業として文部科学省からの委託研究費を得て、神戸大学国際人間科学部及び人間発達環境学研究科において組織された教育実践である。2019年10月から2020年2月にかけて第一期目のプログラムが実施され、大学においてはKUPI(:Kobe University Program for Inclusion)という愛称で呼ばれた。

このプログラムを推進するにあたって、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、神戸大学附属特別支援学校、神戸大学国際人間科学部、人間発達環境学研究科を構成員として連携協議会が組織され、3回の会議が実施された。まず、知的障害を持つ青年を対象として、2019年7月に募集要項が公開され、募集要件に適合しているか、また学ぶ意欲があるかという基準の下で8月に入学試験が行われた。入試の結果11名が合格となり、合格者は10月の入学までに神戸大学の聴講生制度の手続きを行った上で、2019年度後期の大学カリキュラムの中で火曜日・水曜日・金曜日の週3日間、いずれも17時から20時にかけてプログラムを受講した。(以下、当プログラム受講者を「KUPI学生」と表記する。)

プログラムの内容は曜日ごとに異なる構成で準備、実施された。まず、火曜日の授業は、神戸大学国際人間科学部の学部生が履修する「社会教育課題研究(障害共生支援論)」をKUPI学生が共に受講するという形で行われた。「一般学生と知的障害を持つ学生とが共に学びあうことの追求」を授業のねらいとして、はじめに生涯学習の意義を講義形式で学び、ポッチャで心身をほぐした後、民主主義をテーマにしたグループワークを行い、最後にライフストーリーを語り合った。

次に、水曜日にはKUPI学生を対象としたオリジナルの授業が開講された。心理学、宇宙物理学、音楽学、音楽療法論、哲学、教育学を専門とする複数名の大学教員が、各1～3時間ずつ担当し、「大学1年生の最初の1時間で教える内容について時間をかけ丁寧に講義する」ということを基本として授業内容が構成された。また、火曜日と水曜日においては90分の授業終了後に休憩をはさんで約1時間、KUPI学生がメンター学生と共に授業を振り返り、内容の理解を深める時間が設けられた。

金曜日には神戸大学のサテライト施設「のびやかスペースあーち」を拠点として、KUPI学生が互いの自発性に基づいて共に学びを構成してゆけるような状況を想定してコーディネイターとメンターによって計画された。具体的には、地域にある水道筋商店街へのフィールドワークやあーちにおける居場所づくり活動をはじめとしたボランティア活動、また自身の趣味をきっかけとした発展的学習、さらにそれらの経験を互いに共有しつつ振り返る対話の学習などである。そのほか、ESDをテーマとする大学の組織が主催している岡山のハンセン病療養所・邑久光明園へのワークキャンプを課外活動として組み込み、一般学生らとともに2名のKUPI学生が参加する機会を持った。

これら一連のプログラムを直接推進したのは、神戸大学人間発達環境学研究科教員の他、二名のコーディネイター、県教育委員会からの研修生、そして各曜日に3~6名ずつメンターとして雇用された計11名の学生である。なお筆者は、火曜日及び金曜日のメンターとしてプログラムに参加した。

1-2. 「学ぶ楽しみ発見プログラム」の実践としての位置づけと本研究の意義

神戸大学人間発達環境学研究科には、街中に多様な人たちが集まる場として開かれている「のびやかスペースあーち」や、大学において教員や学生、障害者が相互に交差しあう場となっているカフェ「アゴラ」など、日常的な場における異質性が生み出す葛藤を媒介とした学びを創出すること、またそのような学びがインフォーマル教育として成り立つ過程・条件・方法を模索することをめざして実践されているいくつかの取り組みがある。「学ぶ楽しみ発見プログラム」もまた、こうした取り組みの流れの中であって、大学の授業の中で学生間の異質性を媒介にした学びの場をつくるというテーマのもとに実践されるに至っている。これら一連の取り組みの根底には、共通した課題が意図されていると言える。まず形態的課題として、制度化や専門性からの相対的自由のうちで、研究・教育・実践が一体となって推進されること。そして、教育論・学習論的課題としてはインフォーマル教育を基調とした日常的な実践の中で、多様な人と人之间に起こる葛藤を媒介とした変容的学習の可能性を検討するということである。

以上の流れを踏まえて、本稿では筆者がメンターとして関わった火曜日及び金曜日の授業における支援経験、また実践終了後に他のメンター学生との間で支援過程の振り返りとして行った対話を基にしながら以下の検討を行う。まず、学習者間の差異とそれらをめぐる葛藤がどのように現れていたかについて確認する。(1章) つぎに、多様な学習者やその間に生じる葛藤に対して、メンターによって半ば意図的に生じていたと言える対話への支援と、対話をめぐる KUPI 学生の間に現れていた変容について検討を試みる。(2章) さいごに、「学ぶ楽しみ発見プログラム」支援過程を通じた一連の省察から、葛藤と対話をめぐって意味づけられる学びの手触りと、そのような学びを支援すること、また知的な隔たりの間で教育を計画することの意義と課題について、H.アレントの人間の唯一性をめぐる言説と G.ピースタの教育における独自性についての言説を参考にしながら、言及する。(3章) (以下「学ぶ楽しみ発見プログラム」を指して KUPI と表記する。)

2) 学ぶ主体の差異と葛藤

2-1. なぜ差異と葛藤に着目するのか

いま、学校教育に限らず、子どもから大人に至るまで生涯にわたって人材としての競争にさらされている社会状況がある。競争を通して労働や消費への適応が規範化されるとともに、この社会規範がまた競争を保存し、強化するという循環が生じている。その背景には、グローバリズムによる多様性の拡大や、新自由主義の下での個別化および分断、あるいは人間関係の希薄化の蔓延が見受けられる。

KUPI においては、その計画段階から実践に至るまで「葛藤」が学びの媒介として意識されている。なぜならば、多様性が謳われる一方で人々の分断が広がる社会において、人と人との間の差異によって生じる「葛藤」が人間関係を編み直す礎となる可能性に、希望を見出し

ているためである。本来、多様であるはずの異質性を、特定の属性としてカテゴライズしたり二分化して差別するような状況や、そもそも異質な他者に対して無関心であったり、異質な他者との出会いから疎外されてしまっているような状況、あるいは分断の果てに、市場価値のもとで能力や生産性がないとされるものから孤立し、生存の継続さえ危うくなってしまような状況が既に生じていることを受け、このような分断や孤立を乗り越えて、人と人との間に関係性を繋ぎ留めうる契機として「葛藤」が考えられるのではないかという検討にかける祈りにも近い願いが、ここには託されている。

本章では、KUPIにおける「葛藤」をめぐる意図を踏まえ、まず学習者の間にどのような差異があったか、そしてそこには実際に「葛藤」と呼べるものが生じていたか。そして、もし「葛藤」なるものが生じていたとすれば、それは如何なるものであったかを具体的に振り返って確認を試みたい。

2-2. KUPI 学生間の差異と葛藤

KUPIには11名の学生が入学した。うち女性は5名また男性は6名となっており、年齢においては18歳から29歳までの幅があった。(ちなみに、女性1名は都合により継続的な通学が困難であったため、残念ながら修了には至らなかった。)いずれもそれぞれ知的障害の診断を受けており、手帳を所持している。とはいえ、その知的障害も、もちろんその特性から程度まで様々であり、KUPIに至るまでの学校経験及び社会経験もそれぞれに差異がある。ここではKUPI学生間における差異と葛藤について、二つの視点から振り返る。ひとつは発話の多寡、もうひとつは学校経験のちがいである。

まずは発話の多寡という視点で、KUPI学生間の差異を捉えてみたい。KUPIでは、火曜日と水曜の授業振り返りや金曜日のプログラムなど、学生間で互いに自由に話し合う時間を多く持った。その際、学生においては発話の多い学生と少ない学生との差が顕著に表れていた。とりわけKUPIが始まった当初には、特定の数名が話をし続ける一方、数名はほとんど話さずに終わってしまうという状況が生じていた。発話の多い学生については、往々にして発話の速度が速いほか、同じ内容の話を繰り返す、あるいは会話として文脈から逸れてしまう、また声の大きいなどの傾向がみられた。他方、発話の少ない学生は、時間をかけて言葉を選び、言葉数は少なく、声が相対的に小さかったなどの傾向があった。こうした発話のずれをめぐる、意思疎通において学生間でフラストレーションが生じている様子であった。また、この意思疎通におけるフラストレーションは、突き詰めると「聴く」という行為の困難として生じていたと言える。

発話の多寡にかかわらず、多くのKUPI学生から「いま何を話しているのかよくわからない(ので、何を話せばいいかわからない)」という感想や相談を受けることが多かった。すなわち、発話の多い学生も少ない学生も、発話の速度について行けなかったり、なかなか話の筋を見出せなかったり、瞬間的には話を理解できても前後で話題が切り替わったり文脈が違えてしまうと前の話を忘れてしまったりする、というような形でそれぞれ「聴く」ことにおいて困難を抱えていた。その上で、発話の多い学生は自らが話し続けることによってさらに「聴く」ことから遠ざかってしまうのに対し、発話の少ない学生はじっと人の話に耳を傾けてみるものの、話のつながりを見失ってしまったり、話が長かったり速かったり、また自らが話せないことによって、やはり「聴く」ことがしんどくなるような状況が

あった。

しかし、人と話がしたいと思っているのに、発話の多寡という差異によって、ある人は話せば話すほどに聴くことが難しくなり、またある人は聴けば聴くほどに話がわからなくなってゆくという、この矛盾した困難が、結果として「話すこと」と「聴くこと」との間での揺れ動き、あるいは話し合いにおける「速さ」と「遅さ」の間での揺れ動きを生み出していたと言えるだろう。こうした揺れ動きは「ちょっと、ここは～さんの話を聞いてみませんか。」という言葉や、話の展開に対して「ちょっと待ってください。」というような言葉として、実際に現れてきていた。これはまさに発話をめぐる「葛藤」と言ってよいであろう。また、こうした揺れ動きが意識されることで、特定の学生のみが話して数名の学生は話さずに終わるという状況もだんだんと変容したのである。なお、この変容の過程については対話をめぐって次の2章で詳しく検討する。

つぎに、学校経験の差異に着目する。KUPIに至るまでの学校経験として、ずっと普通教育を受けて卒業したという学生もいれば、特別支援教育を受けていた、特別支援学校へ通っていた、あるいは途中で移行したという学生など、それぞれに異なる経験を経てプログラムに参加していた。おそらく、そうした学校経験の差異が学びへと向かう姿勢やふるまい、さらに学びに対するイメージとして表れていた。

とくに福祉型専攻科の「エコール神戸」の卒業生が一定数おり、彼らがエコール神戸で経験した自発的な学びの確かなイメージが、KUPIの全体的な学びへの欲求や空気感を刺激していたことは確かである。他方で、能動的に学びを想像し体現してゆくことになかなか慣れないでいる学生もいた。それらは学校で経験した学習体験の差異とも捉えられる。授業の振り返りにおいて、ある学生が述べた「以前通っていた学校では、自分が自由に意見を話したことがあまりなかったので面白いが、いざ話すとなると難しい。」という感想からは、学校の中で自由な発話が叶わなかったという体験を経ていることがうかがえる。実際に、金曜日のKUPI学生らが自分たちの学びを自ら計画し実践してゆくというプログラムにおいては、学校経験に基づく学びのイメージの差が、先の発話の多寡にも繋がっていたと言えよう。

しかし、学生によっては、まず学びを受動的に享受する中で、だんだんと自らの関心や視点を探求してゆこうと試みる学生も見受けられた。自発的に学びのイメージする過程とは異なる形で自らの学びを構築してゆこうとする彼らは、提供される学びの資源を一旦黙って受け取り、受け取る過程で気になる点やわからない点において時間をかけて逡巡していた。彼らの学びをめぐる逡巡もまた、KUPI全体の学びの雰囲気に影響を与えていたと言える。というのも、先の自ら学びを積極的にイメージしてゆける学生は逆に、往々にして自分がイメージしていなかった、あるいはイメージの難しい学びの資源へ、時間をかけてアクセスすることに焦燥や困難を感じていることが多かったのである。

すなわち、主に学校経験に基づく学びのイメージの差異が、スピード感のある自発的な学びの欲求と、ゆっくりと時間をかけて学びの資源に向き合おうとする姿勢との間で、それぞれに焦りや不安を生じさせつつも、学びの展開が速まったり遅くなったり、進んだかと思えばまたもとの問いに立ち還ったりというような形で、まさに葛藤を学習の過程において生み出していたと考えられる。

2-3. KUPI 学生と一般学生をめぐる差異と葛藤

火曜日に実施された授業「社会教育課題研究（障害共生支援論）」は、KUPI 学生と神戸大学国際人間科学部の学部生が共に受講する形となっていた。ここでは、主にこの火曜日の授業における学習者間の差異とそこに生じていた葛藤をめぐって、教室におけるふるまいへの視座から振り返りつつ、検討を試みたい。なお、授業において、KUPI の学生はそのまま「KUPI 学生」、大学の学部生は「一般学生」というように呼び分けが生じていた。しかし、ここで検討する差異と葛藤は、KUPI 学生と大学の学部生という属性間の差異ではなく、あくまで学習者全体における個人と個人との間に現れていた差異及び葛藤として扱うものである。

先に学生間の学校経験の差異について触れたが、この学校経験の違いが顕著に表れていたのは、教室におけるふるまいの差異である。このふるまいの差異を端的に表すとすれば、学びの空間におけるふるまいが学校化されているか否か、ということになる。すなわち、教師や教育のもつ意図や、教室においてふさわしいと思われる規範的行動と、ときに場におけるふさわしさが逆に問い返されるような（また、ときには“ふさわしくないもの”として場から排除されてしまうような）自らの欲求に基づいた自由な発話や行動との違いである。これらは、明確に二分できるものではなく、相対的にみて規範的か否かという違いとして捉えられるが、とくに火曜日の授業においてはこうしたふるまいの差異が感じられやすかった。学校の教室においては、先に触れた発話の多寡をはじめ、声の大小、あるいは問いかけに対する反応など、往々にして“ふさわしい”とされている一定の規範が共有されていると言える。例えば、大学において「私語厳禁」とする教師は少なくないし、たまに教師が生徒を指名し回答させる際でも、生徒が冗談を交えたり、周りの人間が振り向くほどの声量で答えることは、規範的とは言えないだろう。また、教師が場を和ませようと言った冗談に対して生徒が大声で笑うこともあまり想定されないだろう。こうした規範は小学校から中学校、高等学校と学校経験を重ねる中で、だんだんと規定されてゆくことが多い。学校における学習姿勢の規範は、円滑な授業の進行に必要なからである。学校において生徒に教科を教える必要が課されている教師は、生徒に規範的な学習姿勢を求めるのである。

実際、大学における多くの授業は円滑に進められている。基本的に生徒は静かに教授の講義を聞き、ノートを取る。回答を求められれば、簡潔に答える。そうでなければシラバスで予定されている講義が、円滑に進まないからである。教師も生徒も、往々にしてこの規範を、暗黙のうちに合意している。この合意は、やはり互いの学校経験に基づいているのではないだろうか。

このような、場において“ふさわしい”あるいは“正しい”学習姿勢をとるという行為は、学校規範への適応として選択される。たとえば、「静かでなければならない」とか「回答は簡潔で明瞭であるべき」などという規範である。こうした規範は、円滑な授業という合意のもとに成立している。しかし、その結果として、独自性としての“わたし”の自由な言動の可能性は、抑圧されることになっていることもまた、事実である。実際に、教室において生徒は往々にして表情が固く、緊張しており、授業を通して私語や笑うという行為は基本的に逸脱として捉えられるであろう。

しかし、場における規範からの逸脱として、“ふさわしくない”あるいは“まちがいがい”とみなされるような言動は、規範への適応ではなく、独自性のある自由な表現として出現しているだろう。独自性とはすなわち、代替の不可能性である。規範への適応が、その程度以外に

差異が現れず、基本的にはあらゆる人々が同質化し代替可能性を獲得してゆくのに対して、独自の表現は根本的な差異のうちに、互いに置き換え出来ない唯一の存在として現れ合うものである。こうした独自性としての“わたし”の現れは、現象としては豊かな表情の発露などという形で場の緩和を生むと同時に、差異が表出することによって、迷いや揺れ動きといった葛藤や、ときに衝突さえ生む。こうした葛藤や衝突は、たしかに授業の円滑さは阻害するかもしれない。KUPIにおいても学校経験の違いにより、規範化あるいは学校化されたふるまいから、あるいは独自で唯一の“わたし”としてのふるまいまで、教室における学生の現れ方が多様であったと言える。そして、この学生の現れ方の多様さが、規範と自由の間で“ふさわしさ”が問い返されるという葛藤として、やはり場に生じていた。

この葛藤はさらに、知的な差異にまで及ぶ。学校経験の差異は、一つには知的な差異という側面もあわせもつ。すなわち、学歴社会と言われるように、その知的な水準によって学校が振り分けられるという構造が学校教育の中には生じている。知的な差異は、思考や発話のスピード・明瞭さのちがいや、知的な入力としての理解、および出力としての解答のずれとして生じる。しかし先の“ふさわしさ”をめぐる葛藤によって、はたして知的にスピードがあるほうがよいのか、明瞭であるほうがよいのか、また理解や解答が順当であるほうがよいのか、というレベルにまで規範が照らし返されうるのである。

3) 対話と支援

3-1. 対話の支援：P4C

KUPIのプログラムは、日によって、また場面によって、その学習のテーマや様相が変化し、メンターとしてもいかに支援を構成してゆくか、常に迷いを抱えながら参加していた。とはいえ、学びを支援する以上、メンターもそれぞれに今後展開される学びを想像したり、その方向性について、多かれ少なかれ意図が発生することになる。日々の迷いの中でも、メンターの間において唯一共通して焦点化されていたテーマがある。それは、対話への意図である。1章で述べたように、KUPIの学生においては発話をめぐる差異、及び葛藤が生じていた。KUPI学生から、プログラムに対する期待の声として「人と話すのが苦手なので、人とちゃんと話したい」や、「人と関係をつくるのが苦手なので、なんとか関係をつくっていけるようにしたい」という願い、また授業を振り返って「今日はしゃべりすぎたなあ。いつもそうなんだよなあ。」という反省や、逆に「本当は自分の気持ちを伝えたかったけれど、なかなか言い出せなかった。」などという言葉を受けながら、彼らの想いの中に対話への希望を見出し、メンターとして、その支援過程において対話を意図的に志向してゆくという流れが生じることとなった。

対話への志向は、具体的には授業における話し合いや、授業のふりかえりにおける支援として体现された。とくに、火曜日および金曜日においては、メンターとコーディネーターで話し合った結果、火曜日では授業の振り返りに、金曜日はプログラムを通して哲学対話の手法である「P4C」のプロセスを取り入れ、その中で対話をめぐる支援が試行錯誤され続ける、という形で展開された。

まず、対話の手法として取り入れた「P4C」とは、Philosophy for Childrenの略であり、コロンビア大学の教授であったMatthew Lipmanが、大学において論理的に思考し、健全に判断するというところに課題を抱える多くの学生を目の前にして、1969年に考案した対話を

めぐる教育の手法であり、この手法をもとにハワイにおいて Thomas E. Jackson らによって新たに解釈を加えられつつ、ハワイスタイルの P4C（やさしい哲学研究）が提唱されている。今回、KUPI においては、このハワイスタイルの P4C を基に、対話の過程が計画された。その過程とは、まず話し合いごとに毎回、互いに自分以外の全員の顔が見えるような形で円状に向き合って座るなどして、コミュニティの輪をつくること。つぎに、コミュニティボールと呼ばれる、毛糸でできた手のひら程の大きさの玉をつくること。なお、このボールは話し合いの初回（今回は、金曜日のプログラム初日がこれにあたった。）において、やはり円状に座って毛糸と芯を一人ずつ回しながら、糸を巻いて作ることになる。その後、話し合いは初回につくられたボールを投げ合いながら展開されてゆくことになる。毎度、その時々テーマをめぐって、ボールを持っている人だけが話し、それ以外の人は黙って発話者の話を聴く。話し終わったら、つぎに話したい人、あるいは先に話した人が次に話を聞きたい人へボールをパスして対話をつないでゆく。以上が今回取り入れた P4C の具体的なプロセスである。なお、初期には次に話したい人は挙手し、先に話した人がその中から一人ボールを受け渡す、という形で進行していたが、KUPI 学生間の発話の多寡を受けてメンター間で話し合った結果、挙手をなくし、先に話した人が次に話を聞きたい人へとボールを受け渡す、という形へと変更を加えた。

P4C のプロセスには、いくつかの仕掛けがあるが、全体にわたって共通して指摘できることは、語り、および表現が身体性を伴って感じられること、すなわち対話の視覚化である。たとえば、参加者全員が見える形で円状に座ることで、対話の相手が視覚的に意識される。自分はいま誰と対話しているのか、誰に向かって話しており、あるいは誰の話を聴いているのか、ということがわかりやすく感じられるのである。これは一見単純に思えるが、多くの学校の教室において、全員が互いに見える状態で座ることはあまり見受けられず、往々にして教師一人と生徒全員が向き合う形となっている。この形にも、教えるという行為をめぐる意図があるのだろうが、対話には向かないといえる。また、ボールによって語りと語り、さらには自分のかたりと誰かの語りとが、空間的に繋がってゆく様子が認識される。ゆえに、前の語りを受けて、また次の語りに向けて、対話の連鎖が意識されやすくなる。

3-2. 対話をめぐる変容

P4C における一連の過程を経てゆく中で、次第に KUPI 学生の間で対話をめぐる変容がみられることとなった。ここでは、この対話をめぐる変容について、1 章でも触れた「聴く」こと、そして「話す」ことという二つの次元で、検討を試みたい。

まず、「聴く」ことをめぐる変容を一言で表すと、差異や葛藤の間で傾聴が立ち現れてきた、ということになる。先に確認したように、KUPI 学生や、大学の学部生、またメンターも含め、それぞれに差異があり、差異によって葛藤が生じる。この「葛藤」を、極めて簡易に言語化し直すとすれば、「わからないこと」と言い換えられるだろう。すなわち、異質な他者について、その異質さゆえに「わからない」ということが葛藤の本質ではないだろうか。プログラム参加者の日々の感想にも読んで取れるが、この「わからなさ」は KUPI を通して、そこに居る人々の間で、常に抱かれ合っていた想いであった。異質な外在に対する態度として考えられるのは、それを退けるか否かの二つである。KUPI の学生においても、異質な他

者の「わからなさ」をめぐって、話し合いにおいて互いに聴き合うことにしんどさが伴い、結果として発話に不均衡が生じていた。しかし、対話の過程を踏んでゆくにしがたって、わからなくても、とりあえず聴いてみる。あるいは待ってみる、という「聴く」行為において変容が生まれていた。待ってみるということは、待つ間、目で相手を見て、耳で相手を聴いているのである。この、待つという姿勢は、すなわち「傾聴」の立ち現れであると言えるだろう。「わからない」異質な他者を、わかってみようと聴いてみること。それでもやはり、わからなくても、また再びじっと待ってみる。そのような姿勢が、対話の中で、少しずつ拡がりを見せた。しがたって。振り返りやプログラムの展開は、後半になるにつれて、徐々にゆっくりとした速度へ移行していったのである。

つぎに、「話す」ことをめぐって、話し合いにおける語りが「答える」という性質から「応える」という性質へと変わっていったことについて考えたい。「聴くこと」のしんどさをめぐって、対話の困難に直面していたとき、その語りは自分が語りたことをただ「答える」という自己完結的な行為として発露していた。すなわち、自分はなぜ語るのかという意図、そして誰に対して語るのかという相手への意識が拡散してしまう状況が生じていたのである。それゆえ、発話の多寡により、対話に不均衡が生じることとなっていた。しかし、この「話す」という行為においても、対話の過程を経るごとに、テーマを巡って他者の語りに「応える」という変化がみられた。具体的には「～はこう言ってたけど、自分は～と思う。」という言葉や、「～さんはどう思いますか。」というような語り、また身振りや視線の投げかけなどの行為が、頻繁に現れるようになった。すなわち対話の過程において、自己完結的な語りから関係的な語りへの変容が、確かに生じていたと言える。

昨今、教育分野に限らず、あらゆる場面でキーワードとして「対話」という言葉を目にするが増えており、その概念はどこか曖昧なものとして感じられていた。しかし今回、KUPIをめぐって、このKUPIの学生の間でみられた変容を通じて、「対話」の本質的な概念が照らし出されたように思う。それは、「対話」とは、受容と応答のプロセスである、ということだ。異質な外在である“あなた”を受容し、それに対して独自の“わたし”が応答する、という一連の過程こそ、「対話」という言葉が表す行為ではないだろうか。

4) 葛藤と対話をめぐる学習と教育

4-1. 葛藤と対話を学びとして捉えること

KUPIというプログラムの実践は、教育や学習を考える上で多くの問いと示唆を生み出した。本稿においては、その一部ではあるが本質であると思われるテーマを焦点化し、検討を試みた。総じて、これらの検討を通して、そもそも「学び」とは「知」とは何であるか、という根源的な課題が問い返されることとなった。すなわち、「学び」や「知」とは、科学的知見の再現可能な了解ではなく、独自である人々の間で、それぞれに唯一な経験と解釈の過程ではないか、という問いである。H.アレントは、人間の唯一性を巡って『人間の条件』の中で以下のように述べている。

「新しいことは、常に奇跡の様相を帯びる。そこで、人間が活動する能力をもつと言う事実
は、本来は予想できないことも、人間には期待できるということ、つまり、人間はほとんど
不可能な事柄をなしうるということを意味する。それができるのは、やはり、人間は一人一

人が唯一の存在であり、したがって、人間が一人一人誕生するごとに、なにか新しいユニークなものが世界にもちこまれるためである。」（アレント『人間の条件』1994, p.289）

「その人が「なに」“what”であるか—その人が示したり隠したりできるその人の特質、天分、能力、欠陥—の暴露とは対照的に、その人が「何者」“who”であるかというこの（ユニークなアイデンティティの）暴露は、その人が語る言葉と行う行為の方にすべて暗示されている。…その暴露は、それを在る意図的な目的として行うことはほとんど不可能である。人は自分の特質を所有し、それを自由に処理するのと同じ仕方でこの「正体」“who”を扱うことはできないのである。それどころか、確実なのは、他人にこれほどはっきりと間違いないで現れる「正体」“who”が、本人の目にはまったく隠されたままになっていると言うことである。」（アレント『人間の条件』1994, p.291-292）

アレントによれば、他者の存在によってのみ唯一の（“who”としての）自己は認識され、確立されるという。すなわち、差異ある他者との関係性の中ではじめて、唯一の存在としての独自の“わたし”が現れる、また現れ合うのである。この、互いに置き換え不可能な関係性における学びは、知的な隔たりを越えうるのではないだろうか。

KUPIにおける学習者は、互いの差異の間で、さまざまな次元の「わからなさ」を葛藤として抱えていた。その中で、焦燥や違和感、フラストレーションを伴いながらも、異質な外在が「わからない」からこそ、その葛藤を反芻し、省察する可能性を持つことができる。そうした葛藤の反芻や、省察は、教育者や支援者はおろか、学習者自身にとっても予測不可能な学びとして展開されうるのではないだろうか。仮に「わかる」ものとして了解されてしまえば、その後、再び学びや知が反芻され、省察されることは、了解されている限りにおいて望めないだろう。

さらに本稿の検討を踏まえると、この反芻や省察が生じる具体的な行為こそ、対話であると整理することができるだろう。異質な外在を、「わからない」という葛藤を伴いながらも受容し、応答し（否定もそこには含まれる）、また受容し、応答する。この一連の対話における過程を繰り返し反復する中で、葛藤の様相、すなわち異質な外在の「わからなさ」が、予測不可能な形に変容してゆく。もし、「わかる」という状態が存在するとすれば、この異質な外在に対する「わからなさ」の変容を、事後的に、また長期的な視座で捉え返したとき、その過程全体を指して「わかり」と表現できるのではないだろうか。

4-2. 知的な隔たりの間で教育を考える

では、以上のような、予測不可能な学びを支援する、あるいは教育を計画することなど、果たして可能なのだろうかと不安になる。しかし、KUPIでの支援経験を経て、私はその実現可能性を感じている。学びの支援というと、例えば学習支援という言葉に代表されるように、まさに知見を了解すること、そしてそのような学習に適応することを補助するような支援役割が期待されることが多い。実際、KUPIのメンターにおいても、当初はKUPIの学生が少しでも知見を理性的に理解することができるように手助けをする、というような期待を感じていたという人は意外にも多かった。かくいう私自身も、そのような役割期待を想像して、KUPI学生への支援を通じた意図や介入をめぐる、悩み続けていた。

しかし結果として、メンターも、KUPI学生一人一人にとって、支援者というよりは、異

質な他者として、“わたし”自身としてそばに居続けることが、まず何よりも大きな意味を持つのではないかという結論に辿り着いた。なぜならば、メンターもまた独自に現れることによって、KUPIの学生一人一人を他者として受容し、「わからない」という葛藤が伴いながらも、応答として支援を投げかけてみるができるためである。

そして、この応答としての支援は、学習者を強制しないだろう。学習者を受容し、その応答として示される支援は、「わからなければならない」という規範から、学習者を、そして支援者自身も、解放するのである。教育や学習の現場においては、往々にして「わからない」ことが場における学習者の居心地の悪さ、ひいては場からの排除を生む。そこには、知を理解すること、わかることの必要が横たえている。しかし、ただちに理解できなければ、わからなければ、そこに居てはいけないのだろうか。あるいは、そのような規範が、知的障害をもつ人々をはじめ、そのほか多くの人々を学びから排除してきたのではないか。この教育からの排除に関連して、人間の独自性が現れることのできる教育を構想して「中断の教育学」を提唱する G.ピースタは『よい教育とは何か』の中で教育における学習者の疎外をめぐって以下のように述べている。

「独自性とは生み出されうる何かではない。すなわち、それは特定の教育的な介入もしくは特定の教育学の保証された成果になりうる何かではないのだ。しかし、独自性は生み出されえないが、独自性が現れないのを確実にしたり、現れるチャンスがないのを確実にしたりするのはむしろ容易である。それが生じるのは、我々が、生徒を、他者性や差異とのいかなる出会いや、彼らの「正常な」存在の仕方をさえぎるかもしれず、応答的で応答可能な反応を生じさせるかもしれないいかなる出会いからも遠ざけるときのときである。これは生徒に影響を与え、彼らを遮り、困らせるかもしれないことを彼らから免除する時である。」（ピースタ『よい教育とは何か—倫理・政治・民主主義』2016, p.133)

「わからない」ままでも、“ふさわしく”なくてもそこに居づらいことがないこと。わからなくても居られるということ。すなわち学習者一人一人が、それぞれの形で“学ぶ楽しみ”を発見する可能性を、奪わないということ。これこそが、知的な隔たりの間で、学びや教育を見出してゆこうとする実践の本質ではないかと考える。

この先、KUPIをはじめとして、差異をめぐる葛藤と対話の教育が、すこしでも“学ぶ楽しみ”の可能性と複数性を広げてゆくこと。また、「わからなさ」が生む傾聴や、「わからない」主体の包摂が、現代社会の過剰な加速傾向を問い返し、「対話」を通じた関係性の変容が、知的な隔たりを越えて、関係の結び目となりうることを希望して、本稿を締めくくりたいと思う。

【引用・参考文献】

- アレント（1994）『人間の条件』[Human Condition,1958] 志水速雄訳、筑摩書 房
ピースタ（2016）『よい教育とは何か』[Good Education in an Age of Measurement] 藤井啓之・玉木博章訳、白澤社
ピースタ（2018）『教えることの再発見』[The Rediscovery of Teaching, Routledge] 上野

正道訳、東京大学出版会
ジャンクソン, トーマス E.; 中川, 雅道 (2013) 「やさしい哲学探究」『臨床哲学 第14巻
2号』大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室
ゴッフマン (2016) 『スティグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ』
[Stigma :Notes on the Management of Spoiled Identity,1963] 石黒毅訳、せりか書房
川本隆史 (1997) 「「共生」の事実と規範《いのちのケア》に向かって」栗原彬編『講座 差
別の社会学 第4巻 共生の方へ』弘文堂
綿野恵太 (2019) 『「差別はいけない」とみんないうけれど。』平凡社

7. 「青春の謳歌」を支える大学の学び

神戸大学人間発達環境学研究科 赤木和重

知的障害のある青年が、国立大学において正規の学生(科目等履修生)として学ぶという、日本初のプログラム(KUPI)を、無事に終えることができました。

津田英二先生から、このプログラムへのお誘いをいただいたとき、正直、実施可能なのが半信半疑でした。「神戸大学生と一緒に学ぶって無理なのでは…?」とか、「そもそも知的障害のある青年に大学で何を教えればいいのかのさだろう…?」といったモヤモヤが自分のなかにあったからです。

…でも、同じくらい、「やってみたらどうなるのさだろう?」「なんだかおもしろそう」「すごいことやん!」というポジティブな気持ちも湧き出てきました。

私の専門は、特別支援教育やインクルーシブ教育です。その立場からいえば、大学という最高学府で、障害のある青年と障害のない青年が共に学ぶことは、「革命的」ともいえるすごい出来事に違いないと直感しました。

そこで、二つ返事をして、KUPIのスタッフとして運営に参加し、また、授業も数回ではありますが担当しました。

半年間、運営・授業に参加するなかで、私が大事にしていた問いは、「KUPIの青年たちは、このプログラムを通して何を学ぶのさだろう?」ということでした。というのも、KUPIの学習内容は、多くの大学の授業と同様、すぐにはなんの役にも立ちません。ここだけの話、宇宙のことや、心理学、音楽史、赤ちゃんの発達などを学んでも、ほとんど生活に役に立つことはありません。仕事に役に立つスキルを学んだほうが効率的です。

なのに、彼らは、仕事を終えて夕方から晩遅くまで、安くないお金を払って学びに来てくれるというのです。どうなるのさだろう?…ドキドキであり、でも、ワクワクでもありました。

結果、KUPI生は本当に熱心に学んでいました。その1つの証拠は出席率。なんと10名中5名がすべての授業に出席。皆勤です!そしてのこりのKUPI生も、1~2回程度の欠席。それも、ケガをしてなどやむにやまれぬもの。一般的な大学生の出席率を考えると驚異的です。どこにそこまでの魅力を感じていたのでしょうか?

KUPI生は、神戸大学で「青春」という魅力を思いつき感じたんだと思います。だからこそ、熱烈に学びに来てくれたんだと思います。

青春とは、私なりに言いかえれば、「仲間と、真剣なことやくだらないことを共有できる時間」のことです。私たちにも青春は確かにありました。これからの社会はどうあるべきかを青臭く語り合ったり、脈は全くないはずなのに好きな女の子のことを延々と語り合ったり、犬のかいウンコをふんづけてその興奮を熱く語ったり、何も成果がなかった合コンのあとの反省会で友情を確かめ合ったり…。なんだか今思いだすと、楽しいやら恥ずかしいやらアホなことやら…。あまり効率的ではない、でも、あのときにしか感じられない時間を、私たちは確かに持っていました。

KUPI 生も、きっとそんな青春を感じていたのだと思います。クリスマス会に参加させてもらったときに、このことを強く感じました。プレゼント交換のときのこと。KUPI 生も、神戸大生も、それぞれ 400 円以内のプレゼントを歌に乗せながら順々にまわしていきます。そして、歌が終わり、いよいよプレゼントをひらきます。女の子らしいピンクのプレゼントもあれば、なわとび(?) など不思議なプレゼントなど様々です。それを見て、それぞれが一喜一憂します。包みをひらかずに大事に持って帰る青年もいます。「それ、おれの!」と言わなくてもいいのにネタばらしをして、言いあいになったりもします。

だれが KUPI 生で、だれが神戸大生かわかりません。とるにたらないやりとりが続きます。でも、みんなとてつもなく楽しそうです。

このとるにたらないやりとりを、いろんな仲間と共有できる……これこそが青春なんだと感じました。もうその輪には自然には入れないオッサンの自分に、ひどくしょんぼりするくらい、これが青春なんだと感じました。

このような時間は、クリスマス会だけに限りません。女子会を企画したり(お酒も飲んだそう!), 大学祭やルミナリエにグループで参加するなど、楽しい取り組みを自主的にしていました。また、大学の授業は難しいこともあったのですが、それを「難しい」とこぼしあう関係があるのも、青春の一コマだなと思います。また、水道筋商店街にいて、そこにポツンとあった、小さい子どもがのるような動物の乗り物に、お尻をキュウキュウに詰め込んで乗って、ワハハと笑う……最高の経験です。それに、ラインのアカウントを交換しあう姿も青年どうしでしたそうです。その姿を想像するだけで、こちらまでドキドキしてしまいます。「青春を謳歌する」という表現がぴったりです。

でも、この「青春を謳歌する」ことは、簡単なようで、実はとても難しいことです。彼ら/彼女らの歴史を知れば、その意味がわかります。

KUPI の青年たちのほとんどが「いじめ」にあい、学校教育でつらい体験をしてきました。津田先生担当のライフストーリーの授業において、彼ら/彼女ら自身が語っています。いじめの経験は、その後の人生において、自己表現にブレーキをかけさせるつらく厳しい体験です。それに、学校に通うことができなかつた青年もいたそうです。また、特別支援学校の高等部では、社会にでるための訓練や作業学習が多くなり、どうしても「くだらないこと」にゆとりをもってつきあう余裕がありません。

そんな歴史をくぐってきた KUPI 生にとって、仲間と、真剣なことやくだらないこと、楽しいことを一緒に共有できたことは、得難い経験だったと思うし、だからこそ魅力を感じていたのだと思います。

そして、このような「青春を謳歌する」ことは、実は、「大学」や「大学での学び」ととても相性がよいのです。

KUPI の授業を担当した教員は、自分の関心のあることを自由に好き勝手に、意気揚々と話しました。社会にすぐに役に立つかどうかはわかりません。でも、どの教員も、自分が大事だと思うこと、面白いと思っていることを一生懸命話しました。

そこには、KUPI 生に、「これは大事だから覚えなさい」「社会に出て困らないように、こ

のスキルを身につけなさい」という「～すべき」という雰囲気はありません。上から目線でもありません。教員は自分が追求している内容を話すのみで、受け取りは、KUPI 生に任せられます。答えは1つではなく、そもそも答えなんて大したことではない、というのが大学の学びです。

授業内容は、一部難しかったかもしれませんが。それは私たちの反省点もあります。ただ、「わかる／わからない」とか「できる／できない」とは別のところで、学びのあり方を感じてもらえればいいです。そして、それはいいかえれば、「学びって自由でおおらかなんだ」「学びって楽しいものなんだ」という大学ならではの学びのことです。

きっと、このような自由でおおらかな学びの雰囲気にあふれる学び舎は、楽しいだけではなかったであろう彼らの歴史を癒し、かつ、自由に表現できる仲間と出会う空間になっていたのだらうと感じます。

KUPI 生の学ぶ姿から、私たち教員が大事にしてきた、そして大事にしていきたい大学のあり方を改めて教えてもらったような気がします。

KUPI 生のはじけるような姿、KUPI 生と神戸大学生の素敵なやりとりの様子を、より多くの人に伝えることで、今回のような場が、いろんな大学に広がればいいなと思いますし、広がる努力をスタッフとして、発信できればと思います。

改めて、青春って、いいですね。そして、青春の謳歌を支える大学であり続けられればいいな、と思います。こんなことを感じさせてくれた KUPI 生や神戸大の学生さん、ほんとうにありがとう。そして、様々な面で支えてくださった保護者のみなさんや、運営にご協力いただいた教員・事務の方々、運営にアドバイスをいただいた連携協議会の委員の先生方に、スタッフを代表して、厚く感謝申し上げます。

そして、一緒に運営してきた津田先生、河南先生、黒崎さん、秦さん、本当にありがとうございました。津田先生が提唱した「無理しないで運営する」という奇跡ともいえる方針が実現できたのも、津田先生をはじめとするスタッフのおかげです。私にとって楽しい仕事になりました。

本冊子の編集者・執筆者

津田 英二	神戸大学人間発達環境学研究科
赤木 和重	神戸大学人間発達環境学研究科
河南 勝	神戸大学「学ぶ楽しみ発見プログラム」メインコーディネイター
黒崎 幸子	神戸大学「学ぶ楽しみ発見プログラム」サブコーディネイター
秦 美季	神戸大学人間発達環境学研究科長期研修派遣生（兵庫県立阪神特別支援学校教諭）
井上 太一	神戸大学人間発達環境学研究科博士前期課程

KUPI 学生、メンター学生、一般学生、KUPI 学生の保護者や関係者、授業担当教員など、本実践研究を直接支えてくださったみなさま、文部科学省障害者学習支援推進室、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、神戸大学附属特別支援学校、神戸大学障害者雇用・環境整備グループ、神戸大学人間発達環境学研究科教職員など、間接的に支えてくださったみなさまに、深く感謝申し上げます。

なお、本実践研究にあたって、神戸大学大学院人間発達環境学研究科における人を直接の対象とする研究審査による承認（No.407）を受けています。

2019 年度 文部科学省委託事業

「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

「神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム」

～知的障害青年のための大学教育の創造～

2020 年 3 月発行

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 3-11

Tel 078-803-7970 fax 078-803-7971

